
Dance of Aether's! ~ 激情のメリーゴーラウンド ~

Leonids

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dance of Aether's ~ 激情のメリーゴーラウンド ~

【Nコード】

N9484J

【作者名】

Leonids

【あらすじ】

個々が持つ目的と誇りのために集った五人のエーテル使いは”生徒会”を結成する。異世界”イデア界”から侵攻する化け物”禍魂”と、人を守る”エーテル”たち。彼らの親 何十年と続く異世界戦争と想いは彼らの世代に引き継がれた。人の成長を描いてるつもり。尚、本編はHP『獅子座流星文庫』の転載です。なので更新が不定期になってるかも。

DoAgm”プロローグ”其の1 - 1

俺はイライラとしながら腕を組んでいた。

なんでこうなってしまったのか。

すべての始まりはたった三日前。

たった三日前である。

その日その時までは普通　　と言うには多少無理があるが、今のこの状況からすれば、それでもまだ静かな日常だったのだ。

ああ、そうですよ、そうなんですよ。

例え異世界からきたエーテルと呼ばれる厄介なものと契約し、俺がエーテル使いなんてものになってしまったとしてもだ。

更に言ってしまうえば、例え俺が禍魂とか仰々しい名前で呼ばれる人間を喰っちゃう化け物を相手に戦っちゃったとしてもだ。

なんとも中学二年生と会話が弾みそうな俺の人生はどこに向かっているのか。

念のためだが、これは決して自虐的に言っているわけでは……ない、たぶん。

とにかくだ。結論的に言えばそんな漫画やアニメな状況まっしぐらの日常さえ、どうやらまだマシなものだったということなのだ。俺

が言いたいの。

俺が契約した猪突猛進でおてんばなエーテルと共に禍魂と戦う日々は危険を孕んではいたが充実したものだった。

元々好戦的だったこともあり『戦って勝つ』という楽しさを覚え始めた俺は若干頭のネジがゆるみ始めているのではないかと懸念している。が、日に日にエーテル使いとして力をつけていくのが実感でき、順調な毎日を送っていた。

ところがである。

ちょうど三日前、ある事件が起こった。

どこから始まっていたのか定かじゃない。なにをきっかけに始まったのか定かじゃない。が、結果として気づいたらそうなってしまうていた。びっくりである。驚きである。驚愕である。もしかしたら俺は例の特異体質以外にも不幸を呼び寄せる体質を持っているのかも知れない。もしくは、疫病神で憑いているんじゃないか、と本気で悩んでしまう。

まあ何にせよ、こうなった以上、俺は現実というものに眼を向けて強く歩いていかなければならないのだろう。

そう心の中でまとめて、俺は振り返り、リビングの壁を見た。

そこには『新生・生徒会生誕会！』の垂れ幕。

生徒会。言わずもがなアレである。あのお堅いイメージの集団。みんな眼鏡をかけていたりして、会議なんか開いたりして『きみはこ

の件をどう思うかね？」とか言っちゃったりする集団である。と、多少偏見の眼で物を言いすぎだろうが、一生、俺が関わることはないだろうと思っていた学生組織には違いない。

生徒の代弁者・代表者と言えは多少の聞こえは良いかもしれないが、実のところ雑用だらけの厄介な職務。生徒会関係者には悪いが、俺は好き好んでこういうものに関わる奴の気が知れないと常々思っていた人間だ。

ところが、『匠』の手にかかればどうでしょう！

そんな俺が生徒会に入るんだって（笑）。

まさに劇的。

ビフォー。ちょっと負けず嫌いでやさぐれてて、ものぐさな俺。

アフター。生徒会で生徒の代弁者として活動する波科高校の良心者。誰もが予想しなかった『匠』の手腕に全米を代表して俺が涙しよう。余計なことしやがってと。

まあ、ここまでは百歩譲って、苦虫を噛み潰す想いで、犬にでも噛まれたと思って、耐えよう。いくら沸点が低い俺でもこれしきで怒り心頭して怒鳴り散らしたりは

その時、どこからともなく飛んできた空き缶が『すこーん！』と小気味の良い音をたてて俺の側頭部にヒットした。

「物投げんなつつってんだろ、このボケども！ 終いにや喉から手

つつこんで奥歯ガタガタいわせんぞ、オラア！！」

俺が怒鳴るといつもの如く喧嘩をしていたらしい二人の少女はお互いに指差して、

「こ、こいつが悪いのよ！ 私が投げたんじゃないからね、トウヤ
！」

「いいえ、貴女が投げました。私が悼矢さまを傷つけるような真似をするわけがないじゃないですか」と今度は罪の擦り付け合いを始める。

どうやら彼女らは喧嘩両成敗という言葉知らないらしい。

D o A g m ”プロローグ” 其の1 - 2

コホン。お見苦しいシーンを見せてしまつて私個人と致しましては非常に遺憾に思つ次第です。

お、今のは生徒会役員っぽい発言だ。

えーっと、何の話をしていたんだつたか。

そうそう、生徒会に入るのは別に構わないという話だった。これに關しては俺にも關わらざるを得なかつた事情というものがあるし。まあ、やむなしというか、道がなかつたというか、崖っぷちというか、どん底というか……。

では何を不満に思っているのか。それはその生誕会がなぜわざわざ俺の家で行われているのか、という一点に尽きる。

お察しの通り、俺がいるのは片桐家つまり俺の家である。現在、リビングとキッチンが繋がつたこの部屋には俺を含めた総勢八人と二匹が机を囲んで料理を突いている。

そのメンバーは後々紹介するとして、今はまだ俺の愚痴を聞いて欲しい。

確かに俺には両親もなく（残念なことだが禍魂に食べられたらしい）、幼い妹こよりと異世界からやってきたエーテル、リタとの三人暮らしだ。いや、三日前からこの家で住むことになった弥生さんを含めれば四人、四人か。

何が言いたいのかというと、詰まる所、騒いだところで文句を言ってくるような人がこの家にいないということである。こよりにリタ、弥生さんは一緒になって楽しんでるようだし……。

しかもこの片桐家は親の代から共同賃貸なんて経営してるもんだから無駄に部屋はあるし、リビングも多少は広い。

会場をここにする理由も、まあ分からなくはない。

けどだ……！

俺は額に青筋をたてたまま部屋を見回した。

いたるところに転がっている空き缶と空き瓶。

ご近所にも聞こえていそうな大声。

飛び交う怒号と散乱する家具の残骸。

ガリガリとテーブルの足で爪とぎをする白猫。

注意する家主（俺のこと）を放ってどんちゃん騒ぎを続ける新生・生徒会メンバーたち。

「お前ら全員いい加減にしろ！」

叫んではみるものの、もはや俺の言葉に耳を貸す者はいなかった。

「ははは！ なに怒ってんねや、かつちゃん！ ほら、かつちゃんも飲みいよ」

とビールの缶を俺の頬に押しつける俵先輩。

俵衛助。俺の一つ上の先輩である。嫌でも眼につく赤髪と底が抜けるほど明るい性格、それに関西弁ということもあってか、学校では目立つことこの上ない人だ。

ここ三日で分かったことだが、この人もどうやら俺と同じ非日常側の人間だったらしい。

俺はぐいっと俵先輩の首に腕を回し、彼の頭を脇に挟むと思いつきり締め上げた。

「ぎゃああ！ キマってるって！ 入ってるってかつちゃん！」

ばしばし、と俺の腕を叩いてタップしてくる。これで懲りただろう、と俺が彼を解放すると、先輩は首を左右に振ってゴキゴキと鳴らした。

「なんや〜？ えらくご機嫌斜めやな〜」

「そりゃ機嫌悪くもなりますよ。この状況なら」

「よっしゃ！ 機嫌直しに俺が笑い話を披露したるわ！」

「いや、いらないつス」

「ある男とその妹がおつてな。その妹さんがな。毎朝早くに起きて家事をこなすできた娘っ子らしくてな。日頃の感謝を込めて男は妹に有効に使ってくれてプレゼントを贈ったらしいねん」

いらなと言っているのに勝手に話し始める俵先輩。

「そのプレゼントっていうのが声を吹き込める目覚まし時計やったらしいわ。男は朝早く起きる妹に氣い使ったんやろーな。

まあ実際、妹さんはそのプレゼントにそら喜んだらしいわ。ところがどっこい次の日や。いつものように男が妹の声で眼え覚ましたんやけど、妹の姿がどこ見てもないねん。したら昨日、妹にプレゼントした目覚まし時計が枕元にあってなー。どうやらそっから妹の声がしてたらしいねん」

「……………」

「男は妹になんで自分のところに目覚まし時計があるんか質問したんやと。そしたら妹はこう答えたそうや。『それが私にとって一番有効な使い方なんだもん』ってな。

男は余計に凹んだって話や！ 笑い話やろ！ アホな男やで！」

かんらかんらと笑って俺の肩を叩く先輩。

「あははは！ そりゃバカですね！ って、それ俺のことじゃねーかよ！」

俺はエーテル・エネルギーを体に込めると俵先輩の胸にドロップキックでツツコミを入れた。

エーテル・エネルギーで筋力が何倍にも強化された俺の蹴りを受けて、俵先輩の体がボールみたく派手にぶっ飛ぶ。

どがしゃああんん！

豪快にふすまを突き破って隣の畳部屋まで転がる俵先輩。

「ははは！ ええツツコミや、かつちゃん！ 新喜劇でもここまで派手にコケへんで！」

俵先輩は頭から血をだらだら流しながらかんらかんらと笑っていた。

が、不意に眼の色がふつと消えて白目になるとそのままぱたんと背中から倒れる。

よし、一人排除完了。片桐家の喧騒度が二％低下。

「ちょっとー悼矢くん、あんな奴に構ってないで私の相手してよー………いっく………」

と横からくいくいと服の袖が引つ張られた。

声のした方を向くとそこには同じく生徒会メンバーとなった美姫先輩の姿。その顔はどこか虚ろで眼が据わっている。

「美姫先輩、どれだけ飲んだんですか。顔が真っ赤ですよ」

「桧流間美姫！ 乙女座のB型、趣味はゲームセンターの射撃ゲームです」

「知ってます」

桧流間美姫。身長は俺より少し低いぐらい。マロンブラウンに染められた髪は肩まで伸び、好奇心旺盛なところが分かるような丸い瞳の女性だ。だが童顔というわけではない。美姫先輩は可愛さと美しさを持ち合わせているのだ。性格もそんな感じで子供っぽいところがあるかと思えば、大人びた口調で俺を注意したりもする。今は波科高校の制服に身を包んでいるのだが、制服の下に着ているらしいパーカーのフードが制服から出ていた。

彼女、桧流間美姫との付き合いは長い。

美姫先輩はここから少し離れたところにある桧流間家の一人娘である。

詰まる所、ご近所さんなのだ。

もともと両親と交流のあった桧流間家は両親が行方不明になった俺とこよりを心配して、昔からいつもよくしてくれていた。そのせいか俺やこよりにとって彼女は姉のような存在で、実際、美姫先輩も俺やこよりのことを弟や妹のように扱っているふしがある。

「ノリが悪い！」

「っっ！」

いきなり眼にも止まらぬ速さでアッパーを打たれた。

「つてえ！ 何するんですか美姫先輩！」

俺はアゴを撫でながら涙目で先輩を見た。

「私はね！ 嬉しいのだよ！」

真っ赤な顔してふらつき、食器棚にぶつかりながら俺を指す美姫先輩。この人、本当に絡み酒だなあ。

「はあ……何がですか……」

「エーテル使いとして話せることがよ！」

「ごがっ！」

今度は左のフックが俺の頬に入った。

「なんで二度も殴るんじゃ、あんたは！」

「悼矢くんのが殴りたいほど好きだからよ……いっく……」と眼が据わったまま、しゃつくりをする。

答えになってねえ！ っていうか、あんたいつからそんなドSになったんだ！

「美姫先輩、美姫先輩。指何本に見えますか？」

俺は彼女に人差し指、中指、薬指をたてて見せた。

「んー、パンダ」

……だめだ。完全に酔っ払ってる。

「つていうか、先輩……！　あまりエーテルとかは言わないでくださいよ……！　こよりが聞いたらどうするんですか……！」

俺は美姫先輩の腕を掴んで、耳元にささやいた。

こよりはエーテルだの禍魂だのという非日常の世界を知らない。というか、知って欲しくない。

こよりはまだ幼い。幾らなんでもこの世界に異世界から化け物が出てきて人間を食い荒らしているなどということを知るには早すぎる。

「なあーんでー。気持ちはさー。分からなくもないけどさー。いいじゃないバレてもー……つく……」

ぐびりと缶チューハイに口をつけ横目でこよりを見る美姫先輩。

「だめです」

有無を言わさぬ俺の表情に「ぶー」と両頬を膨らませる。

「あーあ。彼女よりも妹が大事かあ」

『いつく』としゃつくりをしながら席に戻るうとする。

「誰が彼女なんですか、誰が」と一応のツッコミを入れてあげると、美姫先輩は嬉しそうにくるつと振り返った。

「ひどいわ、悼矢くん！　私のことは遊びだったの!？」

急にアニメ声になって眼をうるうるさせ、両の拳を口元に持つていく。

いきなりスイッチが入るな、この人。

「あの夜、あんなに激しく私を求めたくせに！」

床にしなだれ倒れ、しくしくと袖で涙を拭う。

「××なんか×××して×××だった私を××××××××××のに！」

しかもどうやら止めるスイッチはなさそうだ。放送できない言葉が多すぎて何を言ってるか分からなさ全開である。

「つーか、未成年だって分かってるんですか。飲みすぎですよ」

「えへへ、ごめんね悼矢くん。おわびにちゅーしてあげる　ちゅー」

俺の首に腕を巻いてくる美姫先輩ってうわ酒くせっ！？

「離れろ、この酔っ払いが！」

唇を近づけてくる先輩の顔を両手で突き飛ばす。

その勢いでがつん、と後頭部を食器棚にぶつけさらに足が覚束なくなっているがきつと彼女なら大丈夫だろう。

と、その時だ。

だん！

と机の上へのぼる人影。

「何が“ラグナロク”よ！ たかがエーテル犯罪者ごとき、敢然で俊敏でまるで勝利の女神が如く完璧な采配を揮う聡明なわたくしの新生・生徒会の敵じゃありませんわ！！」

机の上でひどい自己評価をしながら叫んでいるのは何を隠そうと狭霧鏡花生徒会長だ。勝利の女神が聞いたら泡吹いて倒れそうな台詞だ。

「いいぞ、会長〜！」と美姫先輩、

「いいぞ、お嬢〜！」と盛り上がる俵先輩。

つて、俵先輩もう目覚めてら！？

あの二人……すぐに喧嘩するくせにこういう時だけはきっちり合わせるのな……。

狭霧鏡花。それが彼女の名だ。髪の毛を右側に纏めてくるくる巻き髪のドリルにした髪型。なんでもどこぞの令嬢らしく、今の今まで生徒会を一人で運営していた才能豊かな豪傑でもある。人柄はともかく、家柄、能力、容姿、権力を持ち合わせた人物なのだ、人柄はともかく。

馬鹿と煙はなんとやらというが……。こいつ、ほんと高いところに登るのが好きだな。

「下僕その一」

不意に会長様が俺を見た。

「なんだよ。つか、名前覚えろよ、お前」

「名など必要があれば自然に覚えるものだわ。それに貴方のような愚鈍で使い様もない人間の名を覚えるために、高名で崇高なわたくしの頭の容量を占拠しようなどとはおこがましいにもほどがありませんわ。恥を知らないさい！」

相変わらずの毒舌ぶりである。

名前覚えろと言って恥を知らないと返ってくる意味が俺にはどう頭を捻っても理解できなかった。少なくとも勝利の女神はこんな返しをしないと俺は思う。

「それよりも手を貸しなさい。降りられませんか」

そしてどうやら一人で降りられないらしい。

お前は自分の力を試すかのように、ひたすら高い木に登った子猫か……。

「その態度が人にものを頼む時の態度か？ ああん？」

俺が下からガンをくれてやると鏡花はいつも持ち歩いているらしい黒い扇子を片手で振って広げ、口元を隠した。

「何か勘違いしているようですわね。貴方はわたくしの下僕ですの

よ。下僕が主人にかしづくのは至極当然の行為ですわ。それに何の支払いもなくわたくしの愛らしい御手を触れるのですから、これはむしろ貴方にとって僥倖といったところでしょう」

普段は金とんのかよ！

「あのなあ。俺はそもそもお前の下僕になった覚えはねえぞ」

「あらあら。あらあらあらあら」

では貴方の勘違いでなくわたくしの勘違いということにしてさしあげますわ。わたくしはてつきり貴方の出資者だと思っていたのだけれど。どうやら雇用契約は破棄されてしまったようですね。はてはて借金一千万円をどう返すおつもりなのかしら」

「くっ………！」

借金一千万。

そうだった。これは今日俺が告げられた新事実である。先日の大騒動で俺が負うことになった負債。

両親のいない俺の稼ぎ口はエーテル使いとしての仕事で出る報奨金と毎月振り込まれる謎の生活費のみ。これでこよりや大飯食らいのリタを養うつてのは土台無理な話である。新たな入居者である弥生さんは家賃と生活費を払ってくれているものの、そんなものリタと弥生さんの喧嘩の後始末をするだけで足が出る。つまり、借金を背負う前から赤字状態だった我が家。

詰まる所、俺は今このいけ好かない自己顕示欲の塊みたいなお嬢様

に逆らえないわけである。

自分のプライドを保持するための自己弁論終了。

「へーへー。お嬢様の仰せのままに」

俺はやる気なく手を差しだした。

「あら。いいんですのよ。無理なんてしなくても。大地母神のように暖かな優しさを持つたくしですもの、貴方が嫌だというのなら無理強いなどさせるわけはありませんわ」

「お嬢様の御手を取れて嬉しいなあああ！俺は幸せものだなあああ！」

やけくそ。

「あらあら、そこまで声を大にして言うほど嬉しいのかしら。可愛い下僕ですこと。貴方では多少役不足ですけど、仕方なく使ってさしあげますわ」

てめえが言わせてんだろーが！

片側ドリルの髪を手で背中へと流して、俺の手を支えにするお嬢様。

俺はピキピキと額に浮かび上がる青筋と腹の底から煮えたぎる怒りを抑えながら言った。

「ありがとつ……ございます……！」

「やれやれ。これからおサルさんの躰が必要ですね」

鏡花は優雅に椅子に座るとナフキンを腰辺りにしいて食事へと戻った。

くそぉ…………このアマ…………！　いつか逆の立場にしてやるからな…………！

俺は鼻息も荒く自分の席についた。

DoAgm”プロローグ”其の2 - 1

そして自分の料理皿を見て固まる。

「はぐはぐはぐ」

俺の目線の先。そこには俺の料理を食べるしらたまの姿。

しらたま。しょっちゅうこの家に遊びにくる野良の白猫だ。大変こよりが可愛がっており名前もこよりがつけた。のだが、ついこの間、ひょんなことから彼女がオリジンであることが発覚する。

オリジンを分かりやすく説明するならばエーテルが進化した形態のことを言う。あれだ。エーテルがコイキングならば、オリジンはギャラドスである。力の差は歴然。オリジンたちは街一つ軽々と破壊するほどの強さを秘めている。

そんな化け物染みた存在がこの白猫なのだ。

「おい」

俺が声をかけると、しらたまは顔をあげて俺を見た。

だがすぐに顔を下げ、また料理を食べ始める。乱雑に食べているせいで料理が皿の外へと飛び散ってしまっていた。

「こら！ 無視すんなよ！」

そんなしらたまに眼をつけた人物がいた。

「ほぐら、キミも飲んでみる？」

美姫先輩である。封を開けたての一升瓶を持ってしらたまに近づいていく。

「……………」

しらたまはその危ない雰囲気を感じ取ったのかふいっとそっぽを向いてテーブルから降りようとした。

だが。

がしっ！

「にぎやー！」

先輩はしらたまのしっぽを掴んだ。

しらたまの耳がびっくりしてぴんと跳ね上がる。

そして先輩はそのまましっぽを引っ張り自分の胸に抱くと、一升瓶をしらたまの口へと向ける。

「にやー！ にやー！」

しらたまがこちらに向かって鳴く。

どうやら俺に助けを求めているらしい。

だがそれは無理な話である。

俺の皿の上のものは不可侵条約で結ばれていたはず。締約を破棄したのは貴様の方だ、しらたま。

「ご愁傷様」

俺は小さく呟いてしらたまに手を合わせた。

「裏切りもごぼっ！」

先輩がしらたまの口に瓶の口を突っ込む。

突っ込む寸前に何か聞こえた気がしたが、まず間違い無く、空耳で、俺の妄想で、気のせいだろう。

猫が喋ったりなんてするわけないしな、はっはっは。

ごぼごぼと音をたてて空気が入る一升瓶。

それに合わせてごくごくとしらたまの喉が脈打つ。

「あはははははははははは！」

それを見て何が面白いのか美姫先輩は大爆笑している。

きゅぽんっ！

美姫先輩は酒をすべてしらたまの口に流し込むと一升瓶をしらたまの口から抜いた。

「キミ良い飲みっぷりだねえ〜！ おねーさん気に入っちゃったよ〜！」

本人も完全に出来上がっているらしく、顔を真つ赤にしながら舌をべろんと出して眼がうつろなしらたまに頼ずりする。

悪いな、しらたま……。その人に目をつけられたのがお前の運の尽きだったんだ……。

オリジンでも適わない美姫先輩って……この人いずれ世界を崩壊させるんじゃないか。

「ごちそーさまが〜？ 聞こえない〜」

言えるわけねえだろ、と心の中でツツコミを入れておく。

どうやら美姫先輩はかなり酔っていらっしやるようである。絡んでいる相手が猫だということを理解しているのだろうか。

よく見ると美姫先輩の眼は渦になってぐるぐると面白いほど回っていた。

美姫は こんらん している！

わけもわからず しらたまの口に 一升瓶を つつこんだ！

つかそのフリだと永遠ループしませんか美姫先輩……。

美姫先輩がもう一本新たな一升瓶を取り出したのを見て、しらた

まは自分が白猫モードであることも忘れて口を開く。

「いっ、ごちそうさーばー」

だがその『ご馳走様』は一升瓶の熱い口付けによってふせがれてしまった。

……………無限ループって怖くね？

しらたまのたべのこしを箸で摘んで口へと運んだその時だった。

ぼんっ！

ついにしらたまの腹が破けて爆発でも起きたのかと思うほどの音とともに白猫が白煙になった。

煙が晴れると、しらたまがいた位置には白い着物を着た猫耳少女。『はふへへ』と意味の分からないうわ言を呟きながらくると眼を回している。その少女のお尻あたりから白い尻尾が二本、よろりと出ている。

彼女こそしらたまの真の姿であった。化け猫のシヨウ。齢不明（一四 あたりで分からなくなったらしい）。波科高校近くにある寂れた神社に住む狐のオリジン、言の葉と共に波科の街を守っているオリジン。

「ぶふううう！？」

思わず俺は口に含んでいたものを吹き出してしまっ。

おそらくアルコールに吞まれて変化が解けてしまったのだろう。

「なんぞ世界がまわっておるのじゃ」

猫耳少女は真つ赤な顔で伸びていた。美姫先輩もしらたま（猫耳少女バージョン）の下敷きにされて気を失っている模様。

がしっ！

「そおいつー！」

俺は誰かに見られる前に猫耳少女の襟首を掴むと、隣の畳部屋に勢いの良い掛け声と共に彼女を投げ込んだ。

「熱い、熱いぞ悼矢。儂の身体が焼けておるようじゃ。やれ、帯をゆるめてたもれ」

力の入らない手でかりかりと俺の胸を搔いてくるしらたま。

「だああ！ こんなところで脱ごうとするな！ こよりに見られたらどうする！？ さっさと猫に戻ってくれ！ あとでプリンでもいろいろつでもなんでも食わせてやるから！」

俺はしらたまの胸倉を両手で掴んで揺さぶった。

「無理じゃ。あるこーるとやらのせいで力が制御できんのじゃ」

俺に揺らされ、頭ががつくんがつくんとなりながら眼を回し続けるしらたま。

これがかのエーテルが進化することで成ることができるという上位存在オリジンだというのだから笑える。かのヤマタノオロチがそうであったようにオリジンも酒には勝てないか。

その時だ。

「悼矢ちゃん？　どうかしたの？」と背後からこよりの声がした。
びくっ！

俺の肩が震える。

俺はしらたまを布団が入れてある押入れの中に押し込む。

「ふぎゃ！　何をするもがっ！？」

俺はこよりへと振り返ると後ろ手に押入れの扉を閉めた。

「な、何でもないぞこより！」

何度も言うがこよりはエーテルだの禍魂だのといったことを知らないのだ。しらたまが実は猫耳少女だなんて知られるわけにもいかない。知ったら知ったで、喜んで可愛がりそうだが、それはそれ、これはこれ。

DoAgm”プロローグ”其の2 - 2

額に脂汗を掻いている俺の顔をじつと見ると、こよりは怪しむように眉を曲げる。

「……………。悼矢ちゃん。押入れに何を隠したの？」

「な、何も隠してないって！」

こよりの両端で縛った髪の毛がセンサーのようにぴよぴよと動く。

「…………怪しい。もしかしてまた壊したの？」

一ヶ月ほど前。リタがこの家にきた時、部屋をぶっ壊したことを思い出しているのだろう。こよりの顔が渋くなっている。

「どいて」

じりつと詰め寄ってくるこより。

「だめですって、こよりさん！ それだけは…………！」

背中がぴたりと押入れにくっつく。その背中にだらだらと脂汗が流れ、服が張り付く。

やばいやばいやばい…………！ どうする！？ 猫が人間になったなんてどうやって言い訳すりゃーいいんだよ！？ いや、リタや弥生さんが来た時もその姿にはまったくツツコミを入れなかったこより

だ！ 猫耳だろうと尻尾が二本生えてよーと案外、なんてこたーなののか！？

かりかりかり……。

ふと後ろから扉を爪で引つ搔く音が聞こえた。

『にゃーおー』

出してたもれー、とでも言うようにしらたまの鳴き声でしたので、扉を開けてみると、その隙間から白猫に戻ったしらたまが出てくるではないか。

その姿を見て俺はほつと胸を撫で下ろした。

「もうっ、悼矢ちゃん！ しらたまをこんな所に閉じ込めちゃ可哀相じゃない！」

「はい、すいません」と俺は素直に頭を下げる。

くそお！ なんで俺がこよりに怒られなきゃいけないんだ……！

俺は恨めしく美姫先輩を見ると、力尽きたのか倒れたままぐーすかと幸せそうに眠っていた。

ぴきぴきっ！

出てきたしらたまはふらふらと千鳥足で畳を歩いていく。が、足がもつれさせこけそうになった。こけまいと体制を整えようとするしらたま。だが、うまくいかずさらに足がもつれ、タタタタと左側

へ体が流れていき、ついには壁に頭をぶつけた。

がつん！

「ふにゃ！？」

「しらたま！？ 大丈夫！？」

すぐさま、倒れたしらたまを抱きかかえるこより。

「にゃー」

猫の変化は解けぬものの眼を回したままのしらたま。

「信じられない……。しらたまにお酒を飲ませるなんて……」。

悼矢ちゃんの馬鹿！ 大嫌いつ！

がーん！？

俺の胸を突き刺さる一言が発せられた。

俺はその深い傷を押さえ、畳に膝を落とした。

こよりはいいーっと白い歯を見せるとしらたまを胸に抱きかかえたまま、自分の席へと戻っていった。

その自分の席というのが、八神の隣で横になって静かに眼を伏せているライオン、レオの背中だったりする。

背中に座られたレオは片目を開いたが、自分の上に乗ったのがこよりだと分かるとまた眼を閉じた。

レオは八神のエーテルである。

と言うからには八神はエーテル使いだ。

八神きづな。黒髪、腰まで届く長髪のクールビューティー。常に冷静、無口、独りで行動することを好む少女だ。しかし、生徒会四名の中で一番信頼のおける人物だろうと俺は思う。

エーテル使いとしての戦い方や、エーテル・カードのことを教えてくれたのも彼女だ。

一ヶ月ほど前、凶悪なエーテル使い藤島と戦った時も八神とレオは持ち前の連携力で活躍していた。

エーテル使いとしての力量もさることながら、彼女はなんだかんだで優しい心根をした奴……だと分かるようになってきた。

無表情のような鉄仮面の下にある感情。それを伺い知れるようになったのだ。

それに八神に関しては気になることもある。“拒絶されし子”と呼ばれ、誰も信用せずに独りで生きる彼女。俺はそんな八神をどこか放っておけないのであった。

そしてやはりと言うべきか今回の馬鹿騒ぎにも特に加わる気はないようで、だが便宜上は生徒会の一員ということもあってか、机の隅っこの方を陣取りもくもくと栄養の摂取をしている。

「うむ。これもおいしいな」

キャベツロールを興味深く噛み締める八神。

「えへへー。濃厚でしょ？ お肉とキャベツに下味を付けてから煮込んであるんだよ？」

「ああ。こよりは天才だな」

八神にぼむと頭の上に手を置かれ、こよりは照れるように笑った。

あの二人、ほんと仲良くなったもんだよな……。

兄として妹をとられてしまったような嫉妬心を感じながらも俺は自分の席についた。

とにかく一息つく……。

やれやれと俺は乾いた口を潤そうと飲み物を手に取る。

すると、いきなり美姫先輩が目を覚ましたらしく、ぱつと立ち上がった。

「はい！」と元気よく手をあげる美姫先輩。

だがその顔はまだ赤く、どう見てもまだ酒が回っている。

「一番、比留間美姫！ 乙女座のB型、趣味はゲームセンターの射撃ゲーム！」

歌って踊ります！」

刹那！

美姫先輩の身体から七色のエーテル・エネルギーが溢れ、体を光が包み込む。

「どれすあーつぶ」

光が止むと、そこには彼女のエーテル“星屑のドレス（スタージヤケット）”に包まれた姿。白を基調としたくるぶしにかかるほど長いコートに短いスカート。胸には変な紋章の入った胸あて。至るところに細かなデザインがなされたその変身（？）した姿はどう見ても魔法少女のそれである。

ピースを横にして目のあたりで重ね、キュピーンとポーズを決める美姫先輩。

その決めポーズ毎回やるんだ……。

俺は敵のエーテルが美姫先輩を見てドン引きしていたのを思い出していた。あいつらも可哀想な人を相手にしたと思う。

そんな俺の思考をよそに、彼女は空になった缶をマイクにするとお気に入りのアニメソングを歌いだす。

「ほーしをーまわーせ世界の真ん中で」

「美姫先輩！　うるさいですって！　近所迷惑になりますから音量

を下げてください！ 頼みますから！」

「本気のカラダ見せ〜付けろ〜までわたしねむう〜らあない〜」

「ご機嫌そうに歌い続ける美姫先輩。」

永眠させてやろうか、このアマ。

思わず手元の大皿を掴んで投げつけようとしていた自分に自分で驚いてしまう俺。

「悼矢さま。そんなにぴりぴりしないで下さいまし。私はこのような楽しい席につけて嬉しいですよ」

そう言ったのは弥生さんだった。

先ほどから俺がてんやわんやとしていたのを見ていたのだろう、どこか苦笑いを浮かべている。

和泉弥生。それが彼女の名前である。赤い着物に白の袴を着た巫女のような格好をした和風美人。黒い艶やかな髪は後ろで白い紐で結われポニーテールになっている。その色っぽいうなじに定評のある弥生さんである。ちなみに趣味は俺を見ていることらしい。ふとした拍子で弥生さんを見ると、必ずといっていいほど眼が合ってしまうのだ。そして彼女は恥ずかしそうに頬を赤らめるという習性を持っている。

「どうぞ、オレンジジュースです。これでも飲んで落ち着いて下さいまし」

巫女服の長い袖を片手でおさえ、俺のコップへとジュースを注いでくれる。

その一つ一つの拳動が弥生さんは洗練されているというか、流石は京都、大和撫子の名産地だ。

「あ、すみません……。有難うございます」

俺は弥生さんから注がれたコップのジュースを一気に喉に流し込んだ。

少し喉が焼けるような感覚に違和感を覚え、俺は弥生さんにグキキキと首を鳴らしながら視線をやった。

「弥生さん。もしかしてこれ」

「あらまあ、すみません。アルコールが入っていたようです」

絶対にわざとだ、この人！

笑顔のままのたまい、あらあらと袖で口元を隠す彼女を見て俺は確信していた。

「と、悼矢さま……。それで、あの……」

人差し指同士をちょんちょんとくつつけながら、少し恥ずかしそうに上目遣いで俺を見てくる弥生さん。

「その……宜しければ今夜にでも契約なんかを」

どくり、と胸の鼓動が否応なく高鳴る。

少し赤らんだ彼女の頬、うるんだ瞳。その表情から彼女が本当に俺との契約を望んでいることが伺い知れた。

彼女はエーテルだ。それもどうやら俺と最初に契約するはずだったエーテル……らしい。だが俺はすでに常に全力、突撃と破壊ならお手の物という恐ろしくイノシシなエーテルと契約してしまっていたため、それを知った時大変なショックを受けパニックになっていた。らっしやった。

至近距離で見詰め合う俺と弥生さん。

そんな弥生さんの首根っこを掴む人物がいた。

「はいはい、そこまでー」

リタである。

リタは有無を言わさぬように、俺と弥生さんの間に体を無理やりねじ込むと、その場に陣とって座る。

リタ＝ルクライル。歳の頃は俺と同じくらい。上質の金を溶かしたようなサラサラの髪を背中までストレートに流した髪型。見るからに気が強そうな女性である。更に詳しく言うなら高飛車でプライドが高く、強情で意地っ張り、で頑固な女性である。しかも敵を発見しようものならご主人様をほったらかしにして一人で突っ込んでいくようなイノシシである。この一ヶ月で俺が何度『おい、こら！俺を置いて行くな！』という台詞を彼女の背中に投げつけたか分か

らないほどだ。

しかしだ。俺にとってやはり頼りになるヤツなのだ。手のかかるヤツほど可愛いとはよくいったもので、可愛げがないのがもつくるっと一回転しちゃって可愛いというか……。

今はノースリーブのハイネックセーターにホットパンツ、黒いニースックスというラフな格好をしている。その細い右肩に刻まれた赤い文様は彼女がエーテルであることを示している。どうやらリタは動きやすい格好が好きらしく、短パンやホットパンツを履いては自慢の足を見せびらかしているふしがあった。こよりの服を着ているせいもあってか、彼女には少し小さいらしくホットパンツのチャックが最後までしまらず白いショーツがちょこつと見えてしまっているが、特に彼女は気にしていないようである。

そしてコイツこそが俺と契約しているエーテルなわけだ。

「おい、リタ……。何もそこまで」

「なによ。文句あるの」

と不機嫌そうに睨んでくるリタさん。

弥生さんがきて分かったことだが、どうやらリタは嫉妬心が強いらしい。いや果たして嫉妬心と呼べるものかは怪しいが、気に入ったものを取られるのは我慢ならないようなのだ。そのせいか、リタと弥生さんは出会って間もないというのに数々の衝突を繰り返しているのだった。

「トウヤは私の主人なんだから、私が隣に座するのも当然でしょ」

ふん、と鼻を鳴らすリタ。

まーたそうやって弥生さんを煽るし……。

「あら、リタさん。その言葉には甚だしい間違いがあります」と弥生さん。

「へえー。何が間違いなのか是非とも教えてもらいたいわね」とリタ。

「悼矢さまは地球が生まれる前から私のご主人様です。そして未来永劫、私のご主人様です」

きつぱりと言い放つ弥生さん。

「言ったでしょ。トウヤは私のものよ。アンタがどうしようが、この事実は変わらないのよ」

そしてリタの方もきつぱりと言い放つ。

ばぢばぢばぢっ！

二人の視線が真っ向からぶつかり火花を散らす。

またかよこの展開……。何度もやって飽きないのかこいつら……。

「そんな小さな器で貴女が悼矢さまのエーテルだなんておこがましいですね」

弥生さんは何でもなかったように視線を反らすと手元の彼女が愛用している湯飲みに手をつけ、ずずずとお茶を嚥下する。

「そうやってトウヤに執着するあんたの器の方が小さいんじゃないの？」

「なんですって……！ 私がどれほどの想いを抱いて京都から来たかも知らずに、よくもぬけぬけと！」

パンツと机を叩き、立ち上がる弥生さん。

「そんなもん知ったこっちゃないわよ！ トウヤは私のものって言ったら私のものなのよ！」

対してリタも立ち上がる。

理論的な考えで物を言う弥生さんとただ感情だけで物を言うリタ。この二人はほんと色んな面で真逆のタイプであった。

「そんな子供みたいな言い訳をして……！ 本当に器の小さい方です……！」

「そんなに器が気になるのなら、小さいかどうか試してみる……！」

売り言葉に買い言葉。

ゴゴゴゴゴゴ……！

リタから赤いエーテル・エネルギーが漏れ出す。

「まだ懲りないのですか、貴女は」

! ... $T_{\neq} T_{\neq} T_{\neq} T_{\neq}$

弥生さんから緑色のエーテル・エネルギーが滲み出る。

「ええぞー！ やれやれー！」

無責任に煽る佻先輩。

俺は額に手をあててため息を吐いた。

もう勝手にしてくれ……。

もはや彼女らを止める元氣は俺に無かった。

不毛だ。

不遇だ。

こんなメンバーでエーテル犯罪者集団に勝てるというのだろうか……。

いや、そもそもこんなメンバーが生徒会なんて運営していいのだろうか。

なんでこんなことになってしまったんだ……。

二日前。

そう。三日前からすべては始まったのだった

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の1 - 1

生徒会生誕会から遡ること三日前。

俺は友人たちと共に学食のテーブルを囲っていた。

昼休みということもあつてか、食堂の中はいつもの通り混雑しており、レジ付近では朝一の競りかというくらい人が群がっている。

残り少ないパンと弁当を手に手に壮絶な奪いあいと殴りあい。

と、言うのは流石に過剰表現ではあるが、あの集団の中に入って無傷で帰ってくるのは難しいことに違いない。

そんな阿鼻叫喚な集団を傍観しながら俺はミートボールを口に入れた。

めしうまー。

ミートボールを噛み締めると、なんと驚いたことに中からとろりとろけるチーズが肉汁と共に溢れ出すではないか。

俺が持つ弁当を作ったのは我が妹であるこよりなのだが、愛妹は日に日に料理のスキルが高くなっているように思う。

それも日がな一日、家でごろごろしているリタが『あれが食べたい』『これが食べたい』とこよりを困らせた結果なのかも知れない。

「絶対に変だよな」

不意に鍊太郎がぼつりといきなりそんなことを言いだした。

七橋鍊太郎。身長は俺と同じか少し高いぐらい。一昔前に流行ったウルフヘアの男子生徒。なんだかんだ一緒に行動することが多い俺と鍊太郎ではあるが、親友というよりも喧嘩仲間といった表現が最も近い。

と言うのも俺と鍊太郎の間では一週間に一回の割合でガチ衝突、ガチ殴り合いが勃発するのだ。

原因はとてもささいなことである。

例えば、テストの点数が一点高かった（といっても二人とも赤点）とか、腕相撲をしているうちに本気になって殴り合いへと発展……などなど。挙げればキリはないだろう。

そんな俺たちではあるのだが出会った中学時代からもう既に数えて四つの春が経過している。

こういうのをウマが合う、とか言うんだろうか……。

鍊太郎の向かいの席に座っていた古河来が弁当から顔をあげるとオウム返しに訊き返す。

「変って……何が？」

古河来留季。身長は一六半ば。女性の中では少し高い部類に入るだろうか。下半分の縁が青くなっている洒落た眼鏡をかけるショートカットの女子生徒だ。いつもどこか客観的に周りの人間を見て

おり真面目な印象を俺は彼女から受けていた。本田の親友らしく、今年度に入って付き合いができた女子生徒である。ちなみにだが、成績も優秀で、もっぱら俺たち四人のブレインとなっている。

いつも宿題見せてくれてありがとうございます。

俺は心の中で古河来に手を合わせた。

「古河来。ミートボール食うか？ 中にチーズが入ってるぞ」

「どうしたの……いきなり優しいわね……」と不審そうな目で俺を見ている古河来。

だが甘だれのかかったミートボールを見ると食指が動いたらしく、俺の弁当箱へとフォークを伸ばした。

これは決して賄賂ではない。ちょっとした感謝の気持ちである。

「爆破事件だよ、爆破事件」

鍊太郎が古河来の問いに答えた。

ぎくり。

思わず肩が震えてしまった。

箸でつまんでいたミートボールをごはんの上に落とした俺を見て本田が怪訝な顔をする。

「？」

本田睦月。身長は一五 前半。くりつくりの瞳に小さな唇。その唇から出るヴォイスはとんでもなくアニメ声だったりする。肩まである茶色の髪（地毛らしい）が耳の辺りからウェーブがかかった女子生徒。その髪型はことなく某魔法学校のハーイオニーに似ている。性格が明るく温和なためか、男女の別なく人気のある生徒。それが本田睦月だった。

本田とは去年からの付き合いになるが、能天気な奴というのが俺の第一印象であつた。そして今もこの印象は変わっていない。

さて、テーブルを囲っているメンバーを紹介し終えたところで俺の自己紹介も含め、俺の愚痴 あ、いや状況説明をしておこう。

片桐悼矢。それが俺の名前だ。身長は一七五だが成長期につき絶賛伸長中である。身長だけに……。

「ブッ」

「!？」

いきなり吹き出した俺に本田が『くわっ』と怪訝そうな視線をさらに深め、身を引く。いかにも『大丈夫か、コイツ』というような眼だが、少なくともお前の能天気頭よりは大丈夫だ。

コホン。本題に戻ろう。

この通り俺はどこにでもいる普通の高校生である。大した夢もなく、大した希望もなく。普通の大学に進学して、普通の会社に就職して、普通に結婚して、命を終える。

そういう人生を歩むと思っていた。

少なくとも一ヶ月前までは。

しかし

『トウヤ。あんた、今日から私のご主人様だから』

そんな言葉とともに俺の普通の人生は終わりを告げた。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の1 - 2

有り得ない肉体能力で人間を襲う化け物、禍魂。それをさせまいとばかりにイデア界からやってきたエーテルたち。

兎にも角にも、かくして今の俺がいるわけで……。

俺たちの戦いはまだ始まったばかりだぜ！

説明終了

「爆破事件……ねー」

爆破事件……といっても、事件と呼ぶほどのものでは決してない、
はずである。

彼 鍊太郎が言う爆破事件とは近頃、この街の各所で起こっているビル崩壊や公園大爆発のことを指しているのだらうと予想するのは簡単だった。

何でももの凄い爆炎と共に色んな所が消し飛んでいる……らしい。

それを目の前で見ていた俺が証言するならば爆発しているのではなく、新ジャンル『猪突つ娘』が禍魂との戦闘で大剣をぶん回して破壊の限りを尽くした結果なのだが。

その猪突つ娘は加減つてものを知らないので俺も困り果てているところだ。

常に全力。何があろうと全力。人違いでも全力。謝っていても全力。相手が気絶しても全力。

ここ最近の禍魂との戦闘で彼女が破壊した公共施設は数知れず。まこと波科町のみなさまにはご迷惑をおかけしていると思う。

そんなためか、こここのところ嫌な噂が俺の耳に入ってくるのである。

クラスメイトの曰く『昨日、赤いドレスを着た金髪の女に大きな剣を振り回されながら追いかけてさー』とか。売店の前で泣いていた男の子の曰く『赤いドレスを着たおねーちゃんにアイスクリームとられたあ！ うわーん！』とか。

ガキ相手に何しとんじゃ、とツツコミを入れたいところだが今頃その張本人は家でのんびり日光浴でもしているに違いない。

それ以外にも『噂の赤ドレスの女は貧乳と言ってやると泣きながら逃げていくらしい』というようなことも耳にしたことがある。

なんというか……悲しいことだが、あながち外れていない。しかし、対処法が開発されることから、よほど赤ドレスの女は頻繁に出没しているらしいことが推察できる。

そんなに暇か、あいつは……。

まるで口裂き女みたいな扱いである。

本人がこの噂を耳にしたとしたら……。おそらくぶちキレて、噂を流した張本人を探しだし仏様が微笑んでらっしゃる雲上へと殴り飛

ばしそうだ。なのでもちろん俺はこの事を彼女に黙っている。

下手に藪をつつくこともないだろう。

「ああ、なんか最近起こってるみたいだな」

俺は他人行儀を決め込んで、素知らぬ素振りで今朝コンビニで買っていた格闘技雑誌を開く。

そこにはちょうどでかかと、ある特集が組まれていた。

『新たな都市伝説！？ 赤いドレスの妖怪現る！？』

「……………」

俺は無言で雑誌を閉じた。

「一ヶ月前の白い発光現象からだよなあ。爆破事件が起こり始めたのって」

鍊太郎は何か考え込むように腕を組んだ。

ぎくぎくつ。

俺の額にじわりと脂汗が滲んてくる。

「なんだったのかしら。あの白い光。専門家の間じゃサーチライトだって言われてるらしいけど……私は絶対サーチライトなんかじゃないと思うわ」

古河来はそんな事を言いながらマルガリータをフォークで丁寧に口を運ぶ。

「.....」

まさか『実はあれ、俺が暴走して解き放ったA Eなんです。びつくりさせてごめんね』などと言えるはずもなく俺は沈黙を保つ。

エーテル・エネルギー
これは人々に知られてはならない事実とされているからだ。まあ、そもそもA Eなどを説明したところでこいつらが信用するはずもない。

というか、俺にだって未だに理解できていない部分が多い。もちろん、俺の特異体質も含めて。

A E。エーテルたちが住むイデア界という別世界に充滿している未知のエネルギーである。なんでもイデア界というのは俺たち人間の想像を創造に変える世界なのだから。それを可能にしているのがこの摩訶不思議エネルギーのA Eというわけである。エーテルたちはその純粋なエネルギーを体内に取り込み、変換して己の力量や物質を創りだしているようだ。例の赤いドレスの妖怪もとい猪突つ娘.....改めリタが人間外のバカ力を発揮できるのもそのためのおうだ。

本来、人間はエーテルたちのようにA Eを変換し、力量化・物質化する仕組みを体内に持ち合わせていない。

だが、どういうわけか人間である俺はエーテルたちと同じようにA Eを変換することができるのだ。

要するに、手にA Eを込め人間外の力量を生み出し、鉄をも握り

つぶすことが可能なのである。

……………ほんとどこで間違えた俺の人生。

そのせいか最近はいせいで定期健診という名の実験を受けている。

にしてもあれからもう一ヶ月か……………。

俺は何気なくちくちくと割り箸でからあげを突いた。

と、そこで本田の視線に気づく。

本田が俺のお弁当のミートボールを物欲しげに指を咥え、じーつと見つめているではないか。

「……………」

俺は箸でミートボールを掴むと本田の口元に持っていく。

すると『ぱあっ』と顔を輝かせて本田はからあげに食いつこうとした。

だが、口に入る直前でひょいとミートボールを遠ざける。

「むっ」と本田は身を乗り出したまま俺へと不満そうに眼を向けた。

「ベタだが楽しそうな顔を見るとついやりたくなるんだよねあ」

「だめだなー。そんなだから片桐くんは彼女ができないんだよ」

「な……んだ……と？」

「片桐くんってツンケンしてるから女の子に怖がられるタイプだもんね。仲良くなるとそうでもないことが分かるんだけど」

これは新事実だ。たしかに多少トガっているし、捻くれているし、すぐに怒るかも知れないが、まさかそんな俺のどこに怖がる要素があるのか、そんなことを言う女子を校舎裏に連れて行って正座させた上でメンチを切りながら問いただしてやりたい。

「彼女作る方法教えてあげよっか？」

魅力的な提案だった。しかし、ここで教えて欲しいというのは男として負けた気がする。

「……………興味ねえな。まあ、教えてくれるっていうなら聞いてやるのもやぶさかじゃねーけど」

俺が強がってそう言うふいとミートボールを指差す本田。

「じゃ、じゃーねーなー」と俺は本田の口元に再度、ミートボールを近づける。

そしてパクリと食いつく本田。

「ほんわ〜」と頬を両手で挟んで幸せそうな顔をする。

能天気……。

「コホン。それで、彼女を作る方法ってのはなんなんだ？」

「ん？　なにが？　興味無いんじゃないの？」

眼をぱちくりとさせる本田さん。

「……………てめえ」

俺は本田の頭をわしりと掴んだ。

「きゃーきゃー！」と楽しそうに笑う本田。

今から一ヶ月ほど前になるだろうか。

俺はひょんなことからそのアイデア界とかいう世界からきたエーテル、リタールクライルと知り合った。

彼女はくそ迷惑なことに同じくアイデア界からきた禍魂という化け物に追いかけていたわけで。すったもんだの挙げ句彼女、リタと契約することになったわけだが……。

そうやってエーテルと契約し共に戦うのがエーテル使いと呼ばれる存在。

詰まる所の俺のような存在である。

エーテル使いになった俺は、同じくエーテル使いだった八神きづなというクールで無口で頑固で孤独ダイスキなエーテル使いと出会った。これがまた二年の始業式にクラスメイトということが発覚する。

その後、エーテル使い支援協会　通称AESSと呼ばれる非公認組織のエーテル使い河上さんを含めた三人で、ある凶悪なエーテル使いを捕獲するにいたった。

そう。敵は禍魂だけでなくエーテル使いでもあったのだ。

エーテルたちはみな尋常でない運動能力と何らかの能力を保有している。そのエーテルたちを利用して犯罪を行うエーテル使いがいるのだ。強盗、恐喝、殺人、犯罪と名のつくものすべては強大な力を持つエーテルを使えばあまりにも容易い。

そしてこういったエーテル犯罪を取り締まるのがAESSの役割。もちろん、禍魂を討伐するのも彼らの仕事である。言わばエーテル使いたちの警察といったところだろうか。その他にもAESSは凶悪犯に賞金をかけ、野良のエーテル使いにも協力を促している。八神はこの賞金稼ぎという立場に位置するが、彼女がなぜあんなことをしているのかは未だに分かっていない。

そしてもちろん、この藤島に関する一切の事件を人々は知らない。

一ヶ月前の俺がそうであったように、人々は禍魂なんて化け物がいいることも知らずのうのと暮らしているのである。

食事を終えた俺たちは食堂を出て教室へと向かう。

と、不意に鍊太郎がささつと壁際に寄った。

「あん？　なんだよ、鍊太郎」

いきなりの鍊太郎の不可思議な行動に眉をひそめる。

後ろを見ると本田や古河来も道を開けるように壁際に寄って立ち止まっている。

「と、悼矢！ 早くどけて！」

ちらちらと何かを見ながら焦っている鍊太郎。

「はあ？ なんで？」

そこで俺はやつと気づいた。

俺の目の前に一人の女が立っていたのだ。

片側に纏めた髪をくるくるとドリルのように巻いた女子生徒だ。美麗としか言い様のない眉と眼。どこか体全体から溢れている高貴なオーラ。きつちりと制服を着こなし、脚は黒タイツで覆われている。腕を組んだその手には黒い扇子が握られている。何か香水でもつけているのか良い匂いが俺の鼻腔をくすぐった。

その女子生徒は毅然と前を向き、俺を見つめて いやどう良いように脳内変換してもこれは睨んでいる、だな……。

彼女の後方を覗いてみると、鍊太郎たちと同じく廊下を歩いていた生徒たちが壁際によって彼女の道を作っていた。

その生徒たちの視線は俺の目の前に立っている女子生徒に注がれている。

どうやら彼女はその道を通ってきたらしい。

「誰だ、こいつ？ 有名人か？」

思った疑問を俺は鍊太郎へと投げかけた。

指を指されたのが気に食わなかったのか、ぴくりと女子生徒の眉が動く。

「狭霧鏡花。うちの生徒会長ね」と古河来が鍊太郎の代わりに答えをくれる。

「お前、なんで知らないんだ！ 会長はライオンも泣いて逃げだすって言われる人だぞ……！」

鍊太郎が声を落として俺に叫んでくる。

いくら声を抑えたところで、俺の目の前で立ち止まっている会長にも聞こえているだろうに。

本田があたふたと俺へ会長へと忙しそうに視線を移している。その姿はどこか巢穴から出てエサを探すプレーリードッグを連想させた。後で餌付けができるかどうか試してみたいところである。

「狭霧鏡花はな……！ 現生徒会を一人で運営している豪傑だ……！ 狭霧財閥の令嬢でこの学園長にもツテがあるんだよ……！ しかも成績優秀・容姿端麗・運動神経抜群なんてもので言い表せないほどオールマイティーな人間なんだよ……！」

「へえー、いるもんだねえ。そんな完璧人間みたいなのが……」

俺は会長の眼を見た。

その瞳には確かに誇りや自信といった感情が色濃く見える。

分かる。こういう眼をするのは俺と同じタイプだ。

いわゆる頑固者。

「会長に眼をつけられたらこの街じゃ普通に暮らせないぞ……！
不良五人をあつという間に気絶させたとかいう噂もある……！ 悪いことは言わないからどいとけて、悼矢……！」

ほう。そりゃ面白い。

既に普通の生活から逸脱している俺としてはなんてこたーない話だった。

人生、何事も挑戦である。北に早食い大会があると聞けば挑戦し、西にゲーム大会があると聞けば挑戦し、東に抜けない聖剣があれば挑戦し、南に喧嘩があると聞けば乱入する。そう云う人に私はなりたまる。

俺は両手をポケットに突っ込んだままニヤリと好戦的に笑って会長を見下ろす。

気分は悪役。不良A。

そしてはつきりと言葉を紡ぐ。

「通りたきゃ俺を避けて通りな」

すつ、と会長様の眼が細くなった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の2 - 1

「か、片桐くん……！」

「馬鹿か、悼矢！？」

「馬鹿はお前だろ、鍊太郎。なに道なんか開けてんだよ。たかが勘違いしたお嬢様じゃねーか。道を開けてやる義理なんかねーだろーが。」

第一に、この校舎内では生徒はみな平等。そうだろ、生徒会長さんよ」

悪い癖がむくむくと首をもたげている。正直、俺はわくわくしているのだった。

張り詰めていく緊張感。

面倒なトラブルに巻き込まれるのはもちろん好むものではない。だが自分の前に対抗する者が現れたというのならば話は別。トラブルだろうがなんだろうが、かかってきなさい。

第二に、こういった権力を振りかざす奴に従う道理は無い。権力を持つ者は悪者と相場は決まっているものなのだ！

そして俺はこの状況で完璧超人のお嬢様がどういう行動に出るか楽しみであった。

彼女は『ふう』とため息を漏らした。

「……わたくしの学校にまだこんなサルが残っているなんて……。失態ですわ……」

「いいねえ。頭にくる言葉だぜ」

俺はさらに口を歪めた。

空気がしいんと静まり返っている。

「そこをおどきなさい」

有無を言わさぬような威厳のある一言。どこか強制力を秘めているような、思わず従ってしまいそうな迫力。

「悪いな。俺は今、反抗期ってやつでな」

無表情のまま俺を見ている会長。

「……………」

「……………」

無言で威嚇し合う俺たち。

ばぢばぢばぢっ！

俺と会長サマの視線が中空で火花を散らした。

ざわざわとしだす廊下内。

事を聞きつけたのか近くの教室から顔を出したり、成り行きを見に来る者もいる。さしずめ『あの会長に喧嘩売ってる奴がいるぞ』という感じだろうか。

「おどきなさい」

もう一度、少し語気を強めて言ってくる会長サマ。なので俺も彼女にちゃんと理解できるようにはっきりと言葉を口にした。

「イ・ヤ・だ」

先に言っておこう。

俺は負けず嫌いである。

しかもだ。こうと決めたら途中で間違いだったと気づいても、脂汗を額に掻きながら貫くという反骨精神の塊のような人間だ。自分で言うのもなんだがかなり頑固な部類に入と思う。

そして、やはり目の前の彼女も俺と同じように頑固な人間のようなのだ。俺を避けて先へ進むという選択肢は鼻からないらしい。

不意に会長が俺の頭に手をやった。そしてぐらんぐらんと左右に揺らす。

「な、なにすんだ！」

俺の文句に対し彼女は驚いたように言った。

「あら。ちゃんと中身が詰まっているようですわね。言語が理解できないような小さな脳しかないせいで、カラカラと音が鳴るのではないかという興味に手が伸びてしまいましたわ」

このアマアア……！

俺の激昂する顔を見てくすりと笑う会長。

「どうしたのかしら。そんなに青筋をたててしまつて。貴方のようなサルでも脳みそは詰まっているという新発見に胸が躍るような想いの一つでも感じ得ないのかしら。」

それともやはり貴方の脳は地を這いつくばるミミズのように矮小で何の驚愕も感動も感嘆も感心も感銘も感じ得ないようなゴミクズ以下の蛆虫の如き存在だと自覚したのかしら」

言つた後で、何かを思い出したような素振りを見せる会長。

「あら、わたくしとしたことが……。思い違いをしていましたわ。

空っぽだと何も音がしないのでしたわね」

ぴつきーん！

それが俺の我慢の限界だつた。

「さつきから聞いてりやうだうだ好き勝手言いやがつて！ てめえの捻じ曲がつた根性を叩きなおしてやらあああああ！」

言い遅れたが、俺は沸点が低い。

しかもキレると口が相当悪くなる。これに関してこよりに窘められることが多々ある。だが十何年とことう性格でやってきたものを直すというのはなかなか難しいわけで、こよりもいささか諦め気味のようだ。

「おい、こら、悼矢！ 手をだすのはまずい！ まずいつて！」

俺を後ろから羽交い絞めにする錬太郎。

わたわたと俺と会長を交互に見ている本田。

『はあ』とため息を吐き、頭を押さえる古河来。

「離せええ、錬太郎オ！ お前らがそういう対応をするからことう馬鹿が調子乗って付け上がったよッ！ 会長だか怪獣だかしらねーがかかってこいや、コラア！」

「暑苦しいですわね。唾を飛ばさないで下さいます？ 馬鹿が感染しますわ」

黒い扇子を広げ、口元を隠す会長。

「俺の馬鹿はバイオハザードレベルか！？ アアン！？」

そんな俺と会長サマを周りの生徒たちはハラハラと見守っていた。だが、錬太郎のように止めに入る気はなさそうだ。

それもそうだろう。鍊太郎いわく眼をつけられたら普通に暮らせないのだから。

キンコーンカンコーン。

チャイムが鳴った。どうやら昼休みが終わってしまったらしい。

音が漏れでるスピーカーを見上げ、会長は言った。

[illegible]

「よくもそこまで人を馬鹿にできるな！ ええ、おい！？」

[illegible]

くすり、と口を笑みに歪める会長。

ぷっ
ちーん！

俺、二度目の噴火。

「うがあああああああああ！」

人は真に怒ると言い返す言葉も出なくなるものらしい。俺の口から出たのは原人のような咆哮であつた。

「落ち着け、悼矢！ 落ち着けつて！」

「これが落ち着いていらーよ！？」

と、その時だった。

「なんですかこの騒ぎは！？」

我がクラス担任の原先生がやってきた。どうやらこれから授業の
ようで、教材を胸に抱えている。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の2 - 2

そついや次は原先生の授業だっけか。

原先生は騒ぎの中心が俺であることを見とめると『またお前か』
と言わんばかりの表情をなさる。

「ほら、皆！ 教室に入って入って！ チャイムはもう鳴りましたよ！」

ぱんぱんと手を叩き、慣れているかのように野次馬を教室の中へと押し込んでいく。

鍊太郎たちも背中を押され、こちらを気にしながら教室へと入って行く。

本田が心配そつな瞳を震わせているが、心配するな……！

必ず勝つ！

俺は本田に向かってぐつと親指を立てた。

「うわ！？ あの人、やる気満々だ！？」と愕然とした表情で本田が言っていた。

ついには長い廊下の真ん中に俺と会長サマの二人だけが残る。

無然と俺を見上げている会長。

それを見下ろしている俺。

「こら！ いつまでやってるの片桐くん！」

たすことの原先生。

ぽか！

なぜか俺だけ頭を叩かれた。

「つてえな……！」

「なんて口を聞くんですか！」

俺の頬を掴んでぐいぐいと引っ張る原先生。

「いで！ いででででっ！ すいません！ すいません！」

「まったくキミはどこまでそうやってツツパるの！ 先生は哀しい！ 哀しいわ！」

「う……… すいません……。好きな言葉は『反抗・反逆・反論・反発・反対・反骨』なもんで………」

しゅんとなる俺。なんだかこの先生からはこよりに似た謎の迫力を感じてしまうのだ。

「そこに『反省』を追加することをお薦めしますわ」

そう言ってくすりと笑う会長。

ぶちぶち！

俺の額の血管からピュッと血が飛び出た。

「こっちはてめえと言葉遊びをしている暇はねえんだよ！」

「わたくしだって貴方と子供遊びをしている暇はありませんわ」

あー言えば、こー言いやがって……！ もう我慢ならねえ！

会長の胸倉を掴もうと俺が手を伸ばすと、

「すぐキレない！」

すばこーん、とまた頭を叩かれた。そのせいで手が宙を泳ぐ。

「原先生……！ 邪魔しないでください……！ 後生ですから……！」

「そうですね、原教諭。せっかくこんな面白いおサルさんがいるんですもの。芸の一つでも仕込まなければ勿体無いですわ」

「何を馬鹿なことを言ってるんですか！ 喧嘩は許しませんよ！」

がしり、と原先生が俺と会長サマの腕を掴む。

すっ、と会長の眼が細くなった。

「離しなさいな。給与を下げられたいんですの？」

「!？」

原先生の顔色が一瞬で変わった。

おいおい。そんな権利をどうして生徒会長が持っているんだ。波科高校の形態性に疑問を抱かざるを得なかった。

「い、いえ……それでも私は負けないわ……！ 教師として正しいことを」

「自分の信念に勇気を持つて従うとは見上げた態度ですわね。ただ折れる場面を間違えるとそれはただの無謀だと人は言いますわ。

自分の意志を貫くことは、何かを失うことと同意義。

明日から職探し頑張りなさいな」

「へ？」

「つまり」

クビ。

会長がそう凄むと、じんわりと眼をつるわせて彼女は走りだした。

「最近の子たちは教師をなんだと思ってるのよ！ もう教師なんてこっちからやめてやるんだからあああ！」

なんだか凄いことを叫んでいるが気にしないでおこつ。原先生なん

だかんだで打たれ強い人だし。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の3 - 1

にしても今の横暴振りには反吐がでる。

自分が権力を持っているのを良い事にやりたい放題か、コイツは…
…！

「おい、会長さんよ……！ いささか乱暴じゃねえか……！」

「あら。わたくしがいつ彼女に乱暴をしたというのかしら」

「言葉の暴力って聞いたことあんだろ……！」

と、その時だった。

「ロックオォーオオン！」

こゝ、この声は……。

俺が振り返ったまさにその時だ。

「ほあちゃー！」という掛け声と共に、

どげしー！

「ぬおばっ！？」

いきなり足にスライディングをかけられ俺は完全にバランスを崩して派手にずっこける。

だが俺の体は固い廊下にぶつからなかった。

スライディングした張本人が俺の下敷きになったのだった。ふに
よんと手に柔らかいものが当たる。

俺の下敷きになっている張本人は大きな瞳を横に反らすと、赤い
顔で静かに呟いた。

「やだ…… 悼矢くん…… こんなところで……。せめて電気は消して
よ……」

「……。何してるんですか、美姫先輩」

松留間美姫。身長は俺よりも低く、一六 前半。制服を着てはいる
のだが、その下にパーカーを着ているらしく、ピンクのフードが後
ろ首から垂れていた。髪はかなり黒みがかったマロンブラウン、青
いヘアピンで前髪をとめている。彼女は一つ年上の先輩で俺が物心
付いた時からの知り合いだ。小学校、中学校を飛ばして（彼女は私
立の女子校に入学した）、高校と進んだ道は同じ。いわゆる幼なじ
み、悪くいえば腐れ縁というやつである。

美姫先輩はかなり破天荒な人で、例えるならブレーキの壊れたダン
プカーというところだろうか。彼女から発信されたトラブルは数多
くそれに毎度の如く被害を受ける俺としてはいい加減にしろとボデ
イブローを入れたところだ。

「やだもつ…… そんなこと女の子に言わせないでよ……。悼矢くん
に押し倒されてるんじゃない……。きゃっ言っちゃった」

恥ずかしそうに顔を両手で隠す。

「いや、足をひっかけて俺を倒したのはアンタでしょーが」

そう言ってやると彼女は両手を降ろして急に真剣な顔になった。

「悼矢くん」

「はい」と思わず阿呆のように返事する。

「私はね。結果が大事だと思うの。どれだけ勉強を頑張ってもテストで結果を出さないと意味なんてないでしょ。つまり、原因や過程なんて気にしてちゃいけないってことよ」

「はあ」と阿呆のように生返事をする。

「そして私の上に悼矢くんが覆いかぶさっているというこの結果。ここから導き出されるのは悼矢くんが私を押し倒したっていう事象なのよ」

「恐ろしく穴が空きまくりの帰納法だと思いますが」

「奇遇ね。私もちょうどそう思っていたところなの。帰納法って難しいのね」

「……………だめだ、この人。相手してたら頭がおかしくなりそうだし……………」

俺はこめかみを押さえながら立ち上がった。

すると美姫先輩はくるりと半分後転して、廊下に両手をつき戻ってくる反動で『よっ』と立ち上がる。そしてぴしりと両腕をY時に広げた。

俺がぱちぱちと拍手すると、満足したのか美姫先輩はパタパタとスカートの埃を払い、廊下に落ちていた薄い赤のベレー帽を手に取った。どうやら彼女がアクセントで被っていたものらしい。

「ほい。悼矢くん」

背伸びしてベレー帽を俺の頭にちよいとのせてくる。

「おー、かわいい！　かわゆい！」

「美姫先輩。男は可愛いと言われても嬉しくないですよ」とベレー帽を取ろうとすると、

「あ、待つて！　写メ撮らせて！　こよりに送るから！」

俺は彼女が取り出した携帯電話を光の速さで奪い取った。

「もー、恥ずかしがり屋さんだなあ」

美姫先輩は俺の頭からベレー帽をとると、俺の鼻元にもってくる。

「？　なんですか？」

「匂いは覚えた？」

美姫先輩のわくわくとした表情。

「は？」

俺の困惑する表情。

「ほーら、とつてこーい！」

美姫先輩がいきなり廊下の向こうへフリスビーよろしくベレー帽を投げた。

くるくると回転しながら飛んでいくベレー帽。

俺と美姫先輩、会長は突っ立ったままそれを見送った。

「……………」

「……………」

「……………」

美姫先輩は何も言わずに自分でベレー帽を取りに行くと、無言のままこちらへ戻ってきた。

「こんなところで何してるの？」

帰ってくると本題に入っていた。

俺には彼女の脳構造が理解できない！

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の3 - 2

「それはこっちの台詞ですよ。今は授業中ですよ。何でこんなところを歩いてるんですか」

「てへ 青空と爽風のサボタージュ」

「料理の名前みたいにして言うな！ なんだかコーンポタージュみたいでウマそうだけど！」

「うーん。ほら、授業中って静かだし廊下に誰もいなくなっって清々しいじゃない。みんな真面目に授業受けるのを尻目に廊下を歩くと優越感っていうのかな、良い気分なのよね」

両腕を伸ばしてうーんと伸びをする。

授業時間に校内散歩とは……。授業中に中庭で昼寝する八神といい、俺の知り合いたちは奔放すぎやしないか……。

「清々しいついでに改めまして。おはよう、悼矢くん。今日もヤサグレてるかな？」

おいーす、と俺が敬愛する芸人であり俳優だったいか やさんみたく挨拶する美姫先輩。どう計算しても全員集合の世代じゃないのになんで知ってたんだ。

「おはようつてもう昼ですよ」

「何言ってるのよ。まだ一時間目の授業が終わったところじゃない。

今、二時間目でしょ？」

「いえ、昼休み終わってますけど？」

「……………」

「……………んあ？」

若干の沈黙。

そこで彼女はまた携帯電話を取り出して時間を確認する。

「ナアーン！？ 寝てる間に五時間目になってる！ タイムスリッ
プだわ、悼矢くん！」

がーんと壮絶な表情になり、震える両手で画面を見つめている。

おいおい。一時間目から今の今までずっとぐーすか教室で寝てた
のか、この人…………。

「そうなのね…………。私、過去の時間軸から来てるのね…………。今頃、
この時間軸の私はちゃんと教室で勉強しているのかしら…………。」

と遠い目をして窓から空を見上げる。

いえ、残念ですがめっちゃ青空と爽風のサバタージュをおいしく
いただいています。

俺も遠い目で空を見上げた。

二人して遠い目をしている俺たちを会長サマは『変な奴らに関わってしまったかも知れせんわ……』という奇異の眼で見っていた。

「どこかで見た顔だと思ったたらそこにいるのは我が校の生徒会長さんじゃない。なにになに、悼矢くん知り合いなの？」

窓からこちらへ視線を移し、やっと俺が向かい合っていたお相手に気づく美姫先輩。

律儀なことに会長サマは俺と彼女のやり取りを口を挟まずにずっと見ていたのだった。

「美姫先輩風に言うなら激怒と憤怒のコレールってところです」

「ほえ？ なに言ってるの、悼矢くん」

あんたがやったネタじゃねーかよ！？

なにこれ恥ずかしい！ ちょっとうまく返したと思った自分がすげえ恥ずかしい！

俺が顔を真っ赤にして悶えている間に、美姫先輩の興味は再び會長さまに移っていた。

「噂は聞いてるわよ。キミ、生徒会を一人で回しているんだってね。凄いねー。おねーさんがよしよししてあげよっか？」

「わたくしも貴女の噂は聞いていますわ。自由奔放で教諭たちが手を焼いている生徒が三年二組にいらっしやると。お名前は桧流間美姫さんとおっしゃったかしら」

「えっ！ 私って有名人！？ 学園のアイドル！？ 親衛隊っている！？」と急に眼を輝かせる美姫先輩。

学園のアイドルかどうかはともかく一部のマニアにとっては有名人なのは違いない。そして、もしも彼女の親衛隊なんてものが存在したらそれは紛れも無い変人集団だ。

なんせこの人は昨年の文化祭ではステージジャックして壇上で歌を歌っていたし（しかもアニソン）。周りで呆然と壇上を見ていたクラスメイトの顔は今でも思い出せる。

たしかに一部の人たちには大ウケだったらしく彼女の明るい性格とその容姿からファンも多いらしいが……。

実際、長年の付き合いの身……身内に近い目線で見ればああいうことをされると非常に恥ずかしく感じるわけで……。はっきり言ってトラブルメーカーだし、火の粉が飛んでくるとかなり迷惑な人なのである。

俺の場合、自分の信念に関わるならば已む無く自らトラブルに首を突っ込むこともあるのだが、この人の場合は面白がつて何でもかんでも首を突っ込むという悪い癖があるのだ。そういえば子供の頃、家族ぐるみで一緒に海に行った時も

「……………#」

ばしん！

「ナアーン！？ ぶたれたあ！？ 悼矢くんがいきなりぶったあ！」

頬を押さえ涙目で抗議される。

「あ、すいません。つい……」

本当に勝手に手が出て彼女の頬をひっぱたいてしまったので、俺は謝ってから不思議そうに自分の手を見てしまった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の4 - 1

「ふう……。あなた方、分かってらっしゃるのかしら。今は授業中なんですよ。やはりおサルさんの知り合いはおサルさんということかしら」

「生徒会長だつて廊下にいるじゃん」

何言つてるとばかりに的確なツツコミを入れる美姫先輩。

ああ、いいぞもつと言つてやれ。

「それはこの脳みそつるつる中身すかすか男が愚かにも自分の身分を弁えず、頭脳明晰・明瞭快活・傾国美女、街中を歩けば手を合わされ拝まれる仏陀再誕の如きこのわたくしの道を塞いでいるからですわ……！」

会長サマが腕を組み、ふいとそつぽを向く。

よくもまあ、そこまで自分に美辞麗句を並びたてられるもんだ……。お前の場合、違う意味で国が傾くつての……。

「通せんぼなんかしてねーよ。通りたきや勝手に通れよ」

どうぞどうぞ、と俺は手を横に出してやる。

「貴方のような人をサディストというんですわね。きっとわたくしにこのような主義主張の無い嫌がらせをして性的快感を得ているんですわ。汚らしいサルですわね。首輪をつけて縛っておくべきか

しら」

「どっちかっていうと言動からしてお前の方がサディストだ！」

しかもかなりヘビーな女王様属性じゃねーかよ！

「私、ドMだよ」と美姫先輩が俺の制服の袖をくいくい引つ張る。

「訊いてねえーよっ！」

がつちりと美姫先輩の頭を掴みアームクローする。

「あはぁん……！　そこ……もつと……！　『愛のままにわがままにキミは私だけを傷つけて』……！」

本当にドMだった。おそらく俺が知っている歌の中で一番長いだろうと思われる題名までドM風味になっていた。

俺は呆れて手を離す。

「まあ、事情はだいたい飲み込めたわ。相変わらず悼矢くんって負けず嫌いよねー」

「意地があんだよ、男の子には。　By君島」

「誰……そのキミシマくんって……」

眼をぱちくりさせている美姫先輩。

あ、あつれー……この人、アニメとか好きなはずなのになー……。

「くす。いつかその意地が貴方の立場を窮地に落とさなければいいですわね」と笑う会長サマ。

嫌みつたらしい女だ……。

むっとした俺は再び会長と無言で睨み合う。

とそこでさらに前から歩いてくる人影に俺は気づいた。

それは俺のよく知った人物だった。

「ありや、八神……」

八神きづな。この学園の三大美女の一人（鍊太郎談）で俺と同じ二年三組の生徒。

腰に届くほどの綺麗な黒髪に、すっと細い眉。可愛いというよりも美しいという方がしっくりくる顔だだろうか。スレンダーという言葉がよく似合いそうなスラッとした体つき。スカートから伸びたしなやかな白く細い足が組みかわると、クラスの男たちはそれに釘突けになったりする。そんな体つきをしているせいかな、どうしても実年齢より大人っぽく見える。

八神は一人でいることを好んでいるふしがある。特に学校ではそれが顕著なようで彼女の周りからは『寄ってくるな』オーラが滲み出ているのだった。

そのせいか俺は八神が学校で他人と会話しているのを見たことがない。

ラブアタックを受けているシーンなら飽きるほど見かけてはいるのだが、当然の如く彼女は聞く耳持たずってな感じで無視し続けるのである。

それに休み時間になるとよくどこかへ行ってしまうし、そのまま授業が始まって帰ってこないなんてこともしばしば。そもそも無断で学校に来ない日だってある。何ものにも縛られない、そんなクー ルで孤高の姿が男子生徒が心を奪われている一因でもあるのだろう。現に今も重役登校してきたらしく、学校指定の黒い革靴を右手に持ったまま背中へ乗せている。

そして何よりも特筆すべきは俺と同じエーテル使いであることだろう。

八神はAESSが手配している凶悪なエーテル犯罪者の首を狙う賞金稼ぎなのだ。

学校に来なかったり、途中でいなくなったりするのはきつとそういう理由も関係しているのかもしれない。

もちろんこの一切をクラスメイトたちは知らないが……。

「八神って……きづなちゃん？」

美姫先輩がひょいと顔を横に出して会長の向こうを見た。

その刹那。八神が俺たちを……というか美姫先輩に気づいた瞬間、びくりと肩を奮わせて足を止めた。

「あ、ほんとー。きづなちゃんだ。やつほー！ きづなちゃん！」
授業中にも関わらず両手をメガホン変わりにし、大声で八神を呼ぶ
美姫先輩。

八神の頬をつつと汗が流れ、ぴくぴくと眉が跳ねる。

感情の読み取りにくい八神ではあるが、あの表情は誰が見ても分かるだろう。

あれは明らかに嫌がっている表情だ。

そんな表情で固まっていた八神だったが、無言で急に振り返ると元来た道を戻り始めた。しかもかなり早足ですたすたと歩いていく。

「あ、こらっ！ 逃げるな！」

美姫先輩が走っていった八神を後ろから羽交い締めにした。

「は、離せ、美姫……！ 私は用事があるんだ……！」

じたばたと暴れる八神さん。

「嘘つきなさいよ！ どう見ても今、登校してきたばかりじゃないのさー！」

「嘘じゃない……！ 忙しいんだ私は……！ 急いで帰らなければならぬんだ……！」

いつもクールな八神があそこまで慌てふためくとは……。

美姫先輩……あんなに嫌がられるまで八神になにしたんだ。

「ああん きづなちゃんまた大きくなってるう」

背後から両手であの八神の胸を鷲掴みにしている美姫先輩に俺は「ぶふううう！」と吹き出した。

「ば、ばかもの！ どこを触って……くうんっ……！」

八神が艶かしい声を発した。

「わおっ敏感敏感 悼矢くん！ きづなちゃんは感度良好よ！」

眼を輝かせてばっとな俺の方を振り返る。

恥ずかしいので俺にそういう話を振らないで戴きたい。それを伝えて俺にどうしろと言っただ。

っていつか知り合いだったのか、あの二人。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の4 - 2

「破廉恥ですわね。公然で何をなさっているのかしら……」

ぱんと黒い扇子を開き、ゆつくりと扇ぐ生徒会長。

「まあ、それには同意するけどよ……。止めに入る気にはなれねーな、男として」

俺はじゃれあっている美姫先輩と八神を興味深げに眺め続けていた。端から見ると仲良くじゃれあっている風にしか見えない二人であるが。

「も、もう……やめてくれ……！　つく……あつ……！」

美姫先輩の手から逃れようと悶える八神。

「おほほほ！　よいではないか、よいではないか〜！」

それを逃すまいとする美姫先輩。

禁断の桃色世界がそこにはあった。

にしても美姫先輩、楽しそうだ。いつにも増して生き生きしてるじゃないか。

美姫先輩は中学時代が女子校だったせいもあるのか、どうやらそのノリが抜け切れていないようだ。

……。いや、地だな、あれ。

「まったく……女性としての恥じらいを持ち合わせていらっやらないのかしら……。街でわたくしまであのような方たちと一緒にだと見られでもしたら迷惑ですわ」

信じられせんわ、とても言う風に呆れた表情でくるくるドリルの髪を背中へ流す会長。

「タイプは違うがレベルで言えばお前も似たようなもんだと思うぞ」

その俺の一言にぐるりと俺の方へと振り返る。

「なんとおつしやいまして？ この清く正しい誰の足跡もない雪原のようなわたくしのどこがあんな人たちと同じだと言うんですの？」

だんつと廊下を踏むと憤慨して俺を睨んでくる。

そんなに一緒にされるのが嫌か、あれ（美姫先輩）と。

「お前、ライオンも泣いて逃げ出すとか言われてるらしいじゃないか。しかも不良五人をノシただって？ 女の恥じらいとやらが備わっているかどうか怪しいもんだな」

ここぞとばかりに挑発を試みる。

「このっ……！ そこに正座なさい！ わたくしが力づくにでも躡てさしあげますわ！」

ぱあんつと軽快な音を鳴らして再び扇子を広げる会長。

「面白え……。やれるもんならやってみろ。無理だろうけどな」

俺に力づくではほとほと阿呆な奴である。

「後悔するといいですわ。こう見えてわたくしは武芸の道に通じていますよ。貴方のようなチンピラとは訳が違いますの」

その扇子を構える格好からして確かに武道を嗜んでいるようだった。どこか様になって見える。

否定しなかったし、あながち不良五人を気絶させた話も嘘でないのかも知れない。

対する俺は相変わらず両手をポケットに突っ込んだまま会長を見下ろしている。

不意に、会長が動いた。

良い踏み込みだった。速度も遅くない。

身を低くして一気に俺の間合いへと入ってきた。

度胸がある。

まず俺と会長では圧倒的な体格差がある。そこから受けるプレッシャーもあるはずだ。だというのに迷いもなく俺の間合いに踏み込んでくるとはよほど自信があるのか。

俺の顔面めがけて左手に持った扇子を横に一閃してくる。

それを俺は背中を反らして難なくやり過ぐす。

「！」

その一発で決まるとでも思っていたのか、きゅつと上履きを鳴らして左足で踏みとどまる会長。

その足を軸にして右の前蹴りへと攻撃を繋げる。

俺の腹へと会長の足底が迫る。

が、それを俺は横にスウエーして回避する。

俺は少し下がって、とんとんと軽くつま先を廊下で打つ。

間合いが空き、会長は驚いたような表情をした。

「……………。…………やりますわね」

一ヶ月前の俺ならまだしも、あれからかなり八神が言うところの“成長”した俺の身体能力は今やエーテルと同等といっても過言ではない。もちろん、生身の人間の攻撃なんぞエーテルや禍魂に比べれば格段に遅いわけで、身体能力を強化する必要もない。たまにリタや美姫先輩がクリティカルな光速アッパーを繰り出したりするが、あれはコミカルという名を力にした例外中の例外である。

「お褒めに預かり恐悦至極にございます、お嬢様」

俺は執事のように右手を折って頭を下げた。

「馬鹿にして……！」

再び間合いを詰める会長。しかも今度は先ほどよりもより勢いをつけて、だ。そして先ほどと同じように扇を俺の顔面向けて横に薙いでくる。

ワンパターンだな。

と、思った刹那だった。

扇子が俺の顔面から通り過ぎない！

視界が黒で覆われ、俺は慌ててポケットから手をだして扇子を弾く！

が、扇子が俺の頭上に舞うと俺の視界から会長は消えていた。

一体、どこに！？

と思った瞬間。

きゅっきゅ！

廊下を擦る上履きの音が背後から聞こえた。

そうか……！ こいつ俺の股座を通って……！ 俺との体格差を利用しやがった……！ 勢いをつけたのはそのためか……！

「貰いましたわ」

慌てて振り返ると、俺の視界には会長の拳がでかかと飛び込んできていた。

にやる……！

脚にエーテル・エネルギーを込める！

それはまるでエンジンのように体内で爆発を引き起こし、俺の脚力を数倍へと跳ね上げた！

だんっ！

廊下を蹴り後ろへと間合いを空ける！

轟おっ！

背中を風を切り、廊下に右手をあて、前かがみになって両足でブレーキをかける！

キュキュキュウウウ………！

上履きのゴムと廊下が擦れ、白い煙がでた。

「……………」

「……………」

拳を振りぬいたまま眼をぱちくりとさせる会長。

「…………え…………」と小さく声を発する。

何が起こったのか理解できていないらしい。

会長からは俺の姿が一瞬で数メートル後ろに下がったように見え
たことだろう。

脂汗が頬を伝い、流れる。

やべ…………。つい使っちゃった…………。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の5 - 1

会長は自分の足元。俺が跳んだ箇所とブレーキをかけた箇所、そして俺の上履きから白い煙が出ているのを見て、俺へ視線をうつす。

「……………貴方」

会長が何か言おうとしたその時だった。

ガラッといきなり教室の扉が開いた。

そして赤髪の男が廊下に放り出される。

放り出された男はごろごろと廊下を後転すると俺と会長の間を通って壁に後頭部をぶつけた。

「なにすんねや！ このアホんだら教師！」

赤髪の男子生徒が扉の前に立っているガタイの良い角刈りの男性教師に文句を放った。

いきなりの出来事にそのまま事の成り行きを見守る俺と会長。

「俵よお」

不意に角刈りの教師　カンキチが呟く。

ちなみに、カンキチという名は彼の本名ではない。その特徴的な繋がり眉毛と角刈りから連想される某キャラクターに似ているため生

徒たちが面白がつてつけたあだ名である。

「お前、うちのクラスじゃないだろうが。っていつかなんで二年のクラスにいるんだ」

「ええやないか！ めぐみちゃんと同じクラスが良かったんや！」

バカだこの人！？ 良い歳して何してんの！？ 分かっちゃいたが大馬鹿だ！？

「ちょうどいいところにいるな片桐」

……………嫌な予感しかない。

さらにちなみに俺の教科担当でもないカンキチが俺の顔を知っているのは、生活指導を受け持つ教員だからである。

「お前、ちゃんとこいつを三年のクラスに返してこい。頼んだぞ」

俺の返事も聞かずにぴしゃりと教室の扉を閉めるカンキチ。

「ちょっとキミ何やってんのよ！ ずるっこ！ ずるっこよ！」

俵先輩に気づいた美姫先輩が八神を羽交い絞めにしたままこちらへやってくる。心なしか八神が青い顔でぐったりしてしまっているが……大丈夫なんだろうか。

「ああん？ なんや女狐」

「誰が麗しの令嬢よ！」

「言つてへんし！ 勝手に変えんな！」

むしろ本物の令嬢がいる前でよく言えたな美姫先輩。そもそも麗しの令嬢は褒め言葉じゃないのか。っていうか、この二人も知り合いなのかよ……。

世の中って狭いんだなあ。

とか俺がしみじみしている隣でヒートアップしていくお二方の先輩。

「私だって悼矢くんときづなちゃんのクラスと一緒に授業受けたいんだからね！ でも違う学年なんだもん！ 同じ授業を受けるなんて夢のまた夢なのよ！ そりゃ授業中散歩にもでるってもんでしょ！」

「自分の非行を勝手に俺たちのせいにしなしないでくださいよ！」

俺は力一杯、ツツコミを入れた。

「あなた方、いい加減にしなさいな。今は授業中で」

「ハッ。心配せんでも来年になったらかっちゃんたちと同じクラスになるんちゃうか。お前、留年しそうやしなあ」

会長サマの言葉を遮って美姫先輩を馬鹿にする俵先輩。どう考えても挑発としかとれないその言葉にもちろん素直に反応する美姫先輩。

「なあんですってええ！　頭きたわ！　悼矢くん、やっておしまい！」

びしつと俵先輩を指差し俺に指図してくる。

あんたは水戸黄門か。

「何で俺なんですか。自分でやって下さい。できればチリの一つも残さないほど完膚無きまでにボコボコに」

「んおい！？　かつちゃんどっちの味方やねんな！？」

「美姫先輩の味方というわけではありませんが、俵先輩の味方じゃないのは天地がひっくり返っても有り得ないのは確かです」

俺はにっこりと笑ってみせた。

「おゝい……。なんかえらい俺の方は強調されてへんか……？」

「じゃあ、きづなちゃんゴー！　あれは女の敵よ！」

「断る」

ぴしゃりと八神に突き放され「ナァーン！？」と驚いている美姫先輩。

「はっはっは！　見放されたな、桧流間！　ええ気味やゝ！」

べろろゝんと舌をだして騒ぐ俵先輩。

「なんですってー！　こうなったら全面戦争よ！　サバイバルよ！
ジ・ハードよ！　欲しがりません勝つまでは！」

ぎゃーぎゃーぎゃー！

それが会長の限界だったらしい。

ぶるぶると肩を震わせて、くわつと眼を見開く会長。

「うるさいと言ってるんですわー！」

キーーーーンッ！

その一喝は長い廊下を反響して木霊するほど大きなものだった。

しーん。

会長の一喝に黙って眼をまんまとさせている俺たち。

「あなたたち！　上級生としての意識はありませんの！？　まして
やこんな下級生のクラスの前で授業中に大声でぎゃーぎゃーと喚い
て！　ここは動物園じゃありませんのよ！　恥を知らないな！」

『すいません』

流石に恥ずかしくなったのかうなだれて頭を下げる先輩がた。

「おお。いいぞ、さすが生徒会長だ。生徒の代弁者」

俺はパチパチと手を叩いて会長を労ってやる。

「……………」

八神もどこかすっきりした表情で腕を組んでいた。

するとキツとこっちを睨んで、ずかずかと歩き、

すばあん！ すばあん！

扇子で俺と八神の頭をはたく。

「あなた方も授業中にいつまでわたくしを付き合わせるつもりですの！ こんなところでふらふらせず、知識の一つでも頭に叩き込みなさいな！」

「……………すいません」

「！？ ……！？ ……！？」

まさか自分までも叩かれるとは思っていなかったらしく八神が無言で驚いている。

「まったく……！ まだわたくしの学校にこんな馬鹿が残っていたなんて恥ずかしい話ですわ……！ そもそも我が校はわたくしのお父様が」

がみがみぐちぐちねちねち。

堪忍袋の緒が切れたとはまさにこのことだ。

この後、会長はただらぬ気迫を奮わせながら俺たちにチャイムが鳴るまでたっぷりとお説教をしたのだった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の5 - 2

「ひどいめにあつた……」

俺は俺の身に起こつた出来事を総評してそう呟いた。

五時間目の休憩時間。

机に突つ伏す俺の周りにいつものメンバーがやってくる。

「お疲れ様、片桐くん。お説教されてるのずっと聞こえてたよ」と苦笑いな本田。

「みんな、忍び笑いしてたわね」とやはりどこか客観的な古河来。

「片桐くんの負けず嫌いって筋金入りだね。頑固だし。きっと頭なんか超合金だよ、うん」

「んだと、本田あー！」

俺はわしつと本田の頭を掴んだ。

「きゃーきゃー！」と楽しそうに笑う本田。

が、俺は力をなくしたように、へなへなと再び机に突つ伏した。

「だめだ……体力がもう無い……」

「しかし、流石は波科高校三大美女の一人、狭霧鏡花だな。身を

まとうオーラが違ったぜ、オーラが」

「……お前の中では三大美女の一人だったのか。確かにツラは男受けしそうな感じだったが……」

と会長の顔を思い返す。だがすぐにぎゃーぎゃーと喚く怒り顔になって俺は少し鬱になった。

「何言ってるんだ悼矢。あの人に命令されたい踏まれたって人はいくらでもいるんだぞ」

百歩譲って前半はともかく後半は物好きにもほどがありやしねーか。性癖どうこうより、人間性が疑わしいぞ。

「男の子ってそうやって勝手に女の子をランク付けするの好きだよねー。失礼だよ、しつれー」

「ランク付けはあんまり男女関係ない気がするけど」と苦笑いを浮かべる古河来。

「ちなみに、睦月ちゃんは波科高校三大恋人にしたい人の一人だな」

「……他にもあったのか波科高校三大うんたらかんたら……」

俺は机に肘を付き顎をのせ、呆れ気味に言ってる。

「ええー、私がー？ そ、そっかなー……」と顔を紅潮させ、もじもじしだす本田。

「うん、まあ睦月は私から見ても可愛いと思うよ。睦月と付き合い

たいてって人はいっぱいいるんじゃないかな。人懐っこいからクラス
の男子とかにもウケがいいし」

古河来の言葉に本田は赤くなった頬を両手で挟んでその気になっ
ている。

「おい、古河来。あんまり褒めすぎるなって現実を直視した時の本
田が可哀想だろ。持ち上げて落とすのが一番辛いんだぞ」

「むう……。なにさ、なにさあー！」

ぷうーと頬を膨らませ唇を尖らせる。

「ブツブツ……片桐くんなんて女の子の間で名前も拳がらないくせ
に……ブツブツ……挙げて怖いとか言われてるくせに……ブツブ
ツ……」

まあまあ、となだめている古河来。

こういうところろ表情を変えるところが人気の理由なのだろうか。
あまり機嫌を悪くさせるのも何なので俺は一応のフォローを試みた。

「本田に魅力がないわけじゃないけどな。例えば髪型とかなんてい
うか」

『ハーマイ ニーだし』

俺の言いたいことを察したのか鍊太郎、古河来、俺の声が見事に
揃う。

「がーん！ 別段何の意識もしていないのにファンタジー世界の住人と同一視されてるっぽい雰囲気ー！？

ね、ねえねえー。むしろ、それ私の魅力って言っているのか凄く怪しくない……？」

「興味本位なのだけれど七橋の言う三大美女って生徒会長以外に誰がいるの？」

「がーん！ 無視された！」

古河来の言葉に鍊太郎と俺は顔を見合わせ、窓際の席の彼女へと視線をうつした。

そこには当然、八神きづなの姿。

足を組み、肘をつき、席に座ったまま片手で机に広げた文庫本を押さえ、気だるそうに読んでいる。

耳からはイヤホンが垂れ下がっており、シャンシャンと音が漏れている。さらに口にチュッパチャップスを咥えているらしく、白く細い棒が飛び出ている。

完全に周りを遮断して一人の世界に没頭しているようだった。

いわゆる本バリアというものだろうか。

今、私は読書中なので話しかけないで下さい、と周りと自分の間に壁を作り、喋りかけられない雰囲気を作成し、人との接触を避けられる効果があるという。

しかも、喋りかけたところで耳につけたイヤホンでその言葉も聞
こえないという二段構え。

まったく、どこまで一人でいるのが好きなんだ、あいつは……。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の6 - 1

多少の付き合いがある俺でも学校で八神と会話したことなど数えるほども無い。

というのも学校であまりエーテル使いだの禍魂だのという話をするわけにもいかなかった。授業が終われば八神はさっさと帰ってしまうし、俺は俺で家にいる猪突つ娘の暇つぶしの相手をしなければならぬ。

藤島を捕獲してすぐにエーテル使いとしての基本を教わってもらったことがあるにはあるが……。それはまた別のお話。

話は変わるがAESSが禍魂やエーテル犯罪者の情報を統制・規制しているのは人々に混乱を起こさせないためという理由もあるそう。

人々が禍魂なんて化け物が夜な夜な街をふらついていることを知れば大混乱は免れない。そんなことになれば“まだ大人しくしている”と言える状態の禍魂たちも何をしてくるか分かったものではない。なので現状維持もかねてそういった情報が表に出ないようにしているのだとか。

俺とてAESSで働いているエーテル使いの河上さんからエーテルや禍魂のことについては他言無用だときつく言い聞かされている。故に、何年も前から学校に通いつつ賞金稼ぎをやっていたらしい八神にすればごくごく当たり前のことなのだろう。学校は学校、賞金稼ぎは賞金稼ぎ。二足のわらじだなんて高尚なものではないのかも

しれないが、うまく切り替えをしていかなければならないのは事実だ。

兎にも角にも、きっと周りのクラスメイトたちは俺と八神が知り合
いであることも知らないだろう。

かたやちょっと物ぐさでぶつきらばうな、言うところの一般生徒で
ある俺と、その美しさと孤高さから羨望の眼差しで見られる八神と
では校内の接点など有り得るはずもない。

「ああ。八神さんね。納得したわ」

「八神さんって凄くキレーだもんね。髪もつやつやだし。なに使っ
てるのかな」

「クールなところがまたその綺麗さに拍車をかけているのよね。相
乗効果っていうか」

きゃいきゃいと八神の話題で盛り上がる女子二人。

「スタイルもいいしな」と鍊太郎が言うと、

『……なぜだか急に引つかかる』

ジト目で二人に鍊太郎が見られていた。

そんな友人たちの会話に耳を貸し、俺は片肘をついたまま張本人
へと眼を向ける。

相変わらず八神は文庫本に眼を落とし、もくもくと読み進めてい

た。

風が窓から入ってきて、彼女の横髪がさらりと頬にかかる。

口の中からチュッパチャップスを取り出すと、ちろりと舌をだして舐める。

コーラ味だった。

不意に八神がチラリとこちらに視線をやった。

んあ？

眼があつと八神は再び本へと視線を戻した。

何もなかったかのようにころころとチュッパチャップスを口の中で転がしている。

その様子に本田も気づいたのか、少し戸惑い気味に言う。

「今……八神さん、片桐くんを見たような……」

「ははは、まさか。悼矢なんかを八神きづなが気にするわけないって」

えらく低く見られたものである。

事実だけど。真実だけど。現実だけど。

その時だった。いきなり彼女はぱたりと文庫本を閉じると、耳か

らイヤホンを抜いた。

彼女の様子を観察していたためか、思わず無言になる俺たち。

席から立つと、つかつかと机の間を縫ってどこかへ向かう。っていうか、こちらに近づいてくる。

目線の先、その進行方向からしてやはり俺たちの方へと向かって
いるようだった。

俺たちの話が聞こえていたとは思えないが、噂話でもされている
のに気づき気を悪くして文句でも言うつもりかも知れない。

いきなりのイベント発生に本田たちは慌ててばたと手を動か
し、何かすることを求めて手元の教科書（つまり俺の）をとって顔
を隠した。本田に関しては教科書を古河来と鍊太郎にとられてしま
ったため、顔を両手で隠すという意味不明な行為にでていたが、ツ
ッコミたい衝動を俺は抑える。

果たして、ぴたりと俺の席の前で八神は止まっていた。

なぜかシーンと静まり返る教室内。

……なにこの雰囲気……。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の6 - 2

俺は周りを見回した。

八神が自らクラスメイトに話しかけることなど滅多に　　という
か俺の記憶の限りでは今までなかった。

そのせいか自然と注目を集めてしまったようだ。クラスメイトた
ちが何事かと俺たちのことを見ている。

ぶわっと背中中脂汗が出るのを感じる。

本田たちもまさか本当にこっちにくるとは思っていなかったらし
く教科書や手から顔を覗かせ口をあぐりと開けて固まっている。

その微妙に堅い空気を少しでも柔らかくしようと俺は笑ってみせ
た。

「よ、よお、八神。な、何か用か？」

きつと周りからは全校生徒が知っているほどの美女がいきなり目
の前にきて、焦ってどもっているように見えただろう。

実際はまったくもって別の要因でもっているのだが。注目を受
けることなどなかなか体験したことの無い俺にとっては緊張しない
方がおかしい。

まだ先ほど会長に絡んだ時のように頭に血が昇っている時ならば
いい。目の前の相手に注目しているため、他人の視線が視野に入ら

ないからだ。しかし、こう冷静な時に注目を受けるといっのは居心地が悪いというか、兎にも角にも、慣れるものではない。

八神は注目されていることなどまったく気にする様子もなく（もしかしたら気づいていないのかも知れないが）口を開いた。

「片桐。今、いいか」

片手を腰にあて、凜としたクールな声を発する八神さん。

「え……あ、はい……。どうかしましたか？」

俺なぜか敬語。

クラスメイトたちに注目されていることにはやはり気づいていないようで、八神は至って普通に話しかけてきやがる。

「？ なぜ急に敬語なんだお前は……。今まで通りで構わない」

『今までどおり！？』

クラスメイトたちが口を揃えて叫んだ。

ざわ……ざわ……。

クズ主人公が登場するギャンブル（？）漫画のようなざわめきが教室内に起こる。

「あ、いや……」

つつつ、と視線を逃し頬をぱりぱり搔く俺。

「変な奴だな……。知らない仲でもないだろう。今更そんな扱いを受けても違和感しか感じないぞ」

八神さん！　ちよつとでいいからクラス内の雰囲気気づいて！？

「まあいい。話したいことがあるんだ。少し時間をくれないか」

そのいかにも気の知れた仲のような接し方にクラスメイトたちは口をあんぐり開けて驚いたままだである。

そこでぐつと練太郎と本田に腕を引つ張られた。

バランスを崩し、危うく席から落っこちそうになるのをなんとかもう片方の手で背もたれを掴んで留める。

「お、お前……！　八神きづなといつからそんな仲になったんだよ……！！　聞いてないぞ……！！」

「ど、どどど、どういふことなの、片桐くん……！？　なんで八神さんと知り合いなの……！？」

練太郎と本田が俺の耳を食いつかんかのような勢いで耳打ちしてきた。

「いてっ！？　お前ら……！　腕に爪が食い込んでるって……！」

「こ、これは流石に予想していなかった展開だわ……」

古河来は震える手で眼鏡の位置を直しつつ真剣に悩んでいた。

「……………。忙しいなら出直すが……………」

俺は三人に言い訳するのを後にして八神に向きなおる。

「い、いや、構わないぞ。で、何の話だ？」

「ああ、それなんだが……………あまり他の人間に聞かれない話でな。二人きりになれる場所へ移動したい」

『二人つきりい！？』と過剰に反応するクラスメイトたち。

お前ら、そこまで驚くことかよ！？ 確かに八神の言い様だと何か二人の間にありそうな印象は受けるかもしれないがっ！

二人きりと言うには訳があるのだ。

「あ、ああ…………。分かった」

「談笑していたところをすまないな。片桐を借りていくぞ」

八神が本田たちにそう言うや否や、本田たちは焦りながら声を大きくした。

「あ、いえいえ！ どうぞどうぞ持っていくてください！」と鍊太郎。

「どこへでも好きなところに連れて行ってあげて下さい！ 彼、根は良い人ですから！」と古河来。

「なんならもう帰ってこなくてもいいくらいです!」と本田。

三人に鼻息荒く詰め寄られ、

「あ、ああ……」と困り気味の八神。

本田……お前、後で覚えておけよ……。

「キヤー! 八神さんと話しちゃった……!」

俺の内心を知ってか知らずか、ぴよんぴよんと嬉しそうに跳ねる本田。

八神は芸能人が何かですか!?

「片桐、何をしている。休み時間は少ない。早く来い」とすでに扉まで移動している八神。

「あ、はい……」

俺は八神のマナージャーみたく背を追って教室を後にするのだった。

扉を閉めた後、一層、教室内がざわざわとしたのは言うまでもない。

間違いなく話題は俺と八神の関係だろう。

変な噂がたたなきやいいが……。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の7 - 1

所変わって屋上。

屋上には俺たち二人以外に誰もいなかった。というのも、そもそも屋上は立ち入り禁止になっているからである。しかし、立ち入り禁止の札がかかったチェーンを乗り越えれば難なく屋上にはこれるので、もっぱら不良の溜り場になっていたりする。

爽やかな風が吹きぬけ、八神は流れる髪を手で押さえた。

そういえば一ヶ月前もここで八神と話したことがあったっけ。

「すまないな。お前が一人になるのを待とうとも思っただが……」

「いや、気にしないでいいぞ。あいつら喜んでたみたいだし」

喜ぶという言葉に八神は少し理解が及ばないような顔をした。

「それで話ってなんだよ、八神」

話を促すと半ば睨むようにこちらへと顔を向ける。

さっきまでの和やかな空気が一転して張り詰めたものへと変貌していた。

当然である。

俺と八神の間にクラスメイトたちがきゃいきゃい騒げるような桃

色な関係性など無い。

俺たちの話題といえば

「分かっているだろう。お前の体質についてだ」

まあ、当然だわな……。

分かっちゃいたが、少し残念な気持ちになり、ぼりぼりと頭を掻く。

「人間にエーテル・エネルギーを力量に変換する機能はない。それをお前はやってのけた」

かつかつと、屋上のフェンスへ足を伸ばし腕を預ける八神。

俺もそれに倣いフェンスへと向かう。

「それもこの街に地震を引き起こすほど非常識なエネルギー……。

あの力は一体なんだ……！ お前は何者なんだ……！」

八神は振り返ると俺の胸倉を掴み上げた。

「教えろ……！ どうやった……！？ どうすればあの“力”が手に入る……！」

八神のその眼は真剣そのものであった。どこか焦っているようにも感じられる。

「私には必要なんだ！ 力がっ！」

「ちょっと待て！ 落ち着け八神！」

どーどーと両手を見せてストップをかけてはみるものの、八神は止まらない。

「あれからお前の力のことを自力で調べたがなんら有力な情報はなかった！ 一体どうやってあの力を手に入れた！」

三週間ほど前の話だろうか。八神は俺の身体のことを調べると言っていたが、この分だと結局何も見つからなかったらしい。

「俺にもよく分からないって話はしただろ！ 第一に、俺がエーテル使いになったのはつい最近だ！ エーテル使いの基本を俺に叩き込んだのもお前だろ！ それは八神もよく知ってることじゃねーかよ！」

「お前が知らないはずがないだろう！ お前の体のことなんだぞ！」

八神の言うことももつともだ。

あの時のことは鮮明に覚えている。

本来、自分の体であるはずのものが、まるで自分の意思に反応しなかったのだ。

ただ感じられたのは破壊的衝動と欲求。

満ち溢れる抑えきれないエネルギーと、それを解放する快感。

『オラ、強えやつと戦うのが趣味だ』と豪語するようなサイヤ人とまではいかないものの、確かに俺は好戦的な人間だ。この一ヶ月、禍魂やエーテル使いと自ら進んで戦うこともあった。

負けず嫌いということもあってか、強い者と戦えることは自分の力量を計る上で純粋に楽しいと思う。

だが違う。

一ヶ月前の俺はもつとドス黒いものだった。

圧倒的な暴力で相手をいたぶるような、普段の俺が抱いている戦闘への考えとはかけ離れた思考。

自分の知らない自分の体。

これほど怖いものはない。

俺はギリッと奥歯を鳴らした。

「分かってるさ！ だけどやっぱり何度考えても知らねえし、分からねえんだよ！

俺は親父やおふくろに何にも教わらなかった……！ エーテルのこととも禍魂のことともイデア界のこととも……！ 何も聞かされてねえ！ つい一ヶ月前までは何も知らずに暮らしてたんだ！ 知るわきやねえだろ！」

「……………くっ……………！」

八神は怒りを抑えるように俺から手を離し顔を伏せた。

「悪い。お前に当たっても仕方ないよな」

八神は再び、波科の町並みを見下ろすと拳をぐつと握った。

「……いや、すまない。私も悪かった。」

確かにお前に訊いて分かることならば苦勞などしない。私なりに調べてはみたが完全に行き詰ってしまつてな。焦っていたんだ」

「やつぱり……。何も分からなかったのか」

「……ああ。」

ないんだ、前例がな。唯一分かった事といえば」

「なんだ！？ 何が分かったんだ！？」

今度は俺が八神に詰め寄る番だった。

八神は今まで口に含んでいたチュッパチャップスを取り出す。

飴玉はもうかなり小さくなっていた。

「唯一、分かったことは…… AESSの上層部ではお前が“奇跡の子”と呼ばれている……それくらいだ」

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の7 - 2

“ 奇跡の子”。

確かにグリフォルオや藤島も俺のことをそう呼んでいたが……。結局、どういう意味かは分からず終いであった。

「 “ 奇跡の子” か……。やっぱり親父とおふくろに何か関係があるのか……」

俺は誰かが中庭から運んだらしいベンチに腰をかけた。

八神は再び口の中にコーラ味を突っ込む。

「 だろうな。だがお前の両親に関する情報もほとんど分からなかった。一体、お前の家系はどういう血筋なんだ。河上から聞いてないのか？」

「 多少は聞いたぜ。河上さんに言わせれば当時、最強だったエーテル使い……らしい。アイデア界の開拓と研究をやっていたんだとよ。河上さんは親父の弟子だったらしくて、それについていってアイデア界に行ったらしい。親父とおふくろがグリフォルオに喰われたのもその時のことだと」

「 当時は“ 穴” があつたと聞くからな。今となつてはそそんなものが存在していたかどうか怪しいという意見が大多数だが……。やはりアイデア界に行く方法は存在していたか……」

八神は何か考え込むように街を眺める。

「お前の父親のことを調べるのがお前の体質に行き着く最短ルートかも知れないな」

「俺の前ではエーテル使いであることは億尾にも出さなかったからな。調べるのも難しいと思うぞ」

俺に似て、いやこの場合、俺が親父に似たのか、とにかく俺と同じく好戦的な親父。物心付いた時には既に殴り合いの喧嘩をしていたのを覚えている。

というか、哀しいことに親父との思い出はほぼ殴りあいの喧嘩が占めていた。幼い少年、ましてや自分の子供に本気で対抗心を燃やす父親の図。あまり人に話せるものではない。

おふくろに関して言えばぶっちゃけあまり覚えていない。が、恐怖の対象でしかなかったというイメージが頭に残っている。親父がおふくろにガミガミと怒られているのをよく見かけたからだろうか。姉さん女房、かかあ天下、逆亭主閨白。言い方は何でも構わないが親父が尻に敷かれていたのは変えようのない事実である。当時は『アリス』という名も周りの友人の母親と違うようで不信感を抱いていたものだ。そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、おふくろは俺のことを猫可愛がりしていた。親父と違い相当な親バカだったのだ。今から思えばそれがまた親父の対抗心を燃やしていたのかも知れない。となると、親父もなかなかかわいい奴だと思えてくるから不思議だ。

「問題はお前の体質や父親だけじゃない。お前も気づいているだろう。今、私たちは“ラグナロク”から狙われている」

俺は昔の思い出に浸るのを止め、こちら側へと帰ってきた。

「藤島たちのエーテル犯罪者組織だよな。やっぱり八神のところにもちよっかいを出してたのか」

こくりと頷く八神。

「河上も幾度となく“ラグナロク”に襲われているようだ。どうやら奴らの逆鱗に触れてしまったようだな、私たちは」

ふうと息をつき『面倒だ』といわんばかりに前髪をかきあげる。

「“ラグナロク”はエーテル犯罪者組織の中でも最大の規模を誇っている。構成人数は一　人以上……ともな」

「けどよ。なんで俺たちなんだ？　倒したのは藤島一人だけだぞ」

「藤島は“ラグナロク”の幹部の一人だったようだ。それを倒され捕獲されたとなれば、私たちに報いを受けさせなければ示しがないのだろう」

「狙われる理由はそれとしても……実際、どうするんだ？　このままずっと受け身になってもジリ貧だぜ。数に差がありすぎる」

一ヶ月前に比べ俺も多少はエーテル使いとして成長しているため、二人の足手まといにはならないと思うが、流石に俺と八神、河上さんだけで――人を相手するのは無理があるだろう。

特に藤島クラスがまだいるというのなら今度はどういう結果になるか分らない。

三人が手を組んでやつと倒せたぐらいの男だ。もし今、俺とリタで藤島を倒せと言われれば……まあ、間違いなくボコられるだろう。

「そんなことは分かっている。しかしこちらから行動を起こそうにも“ラグナロク”たちがこの街のどこに潜伏しているのか……誰が“ラグナロク”なのかが分からん……」。

この校舎内に“ラグナロク”のメンバーがいてもおかしくはないしな」

「おいおい、怖いこというなよ」

思わず横に立つ八神を見上げる。

八神は町並みを眺めるのをやめ、フェンスに背中を預け、空を見上げた。

「可能性は0ではないという話さ。」

“ラグナロク”は禍魂と手を組んでいる。犯罪組織として活動するだけではなく、その組織自体に何か目的があるとは思っただが……」

「禍魂と手を組む奴らの考えてることなんか想像もつかねえな」

「そうだな。これに関しても追々調べる必要があるだろう。禍魂たちの動きも気になる」

「禍魂たちの動き？」

「呆れたな。気づいていないのか」

「……………なんかすいません」

しょぼくれる俺を見て八神はやれやれとばかりにため息を吐いた。

「最近の禍魂の動きはどうにもおかしい。いや、禍魂だけじゃなく
エーテル犯罪者もだ。」

この一ヶ月、禍魂やエーテル犯罪者の事件が激減した」

「なんだよ。いいことじゃないか」

「頭を働かせろ。禍魂やエーテル犯罪者に人を襲うことより優先する
べきことができた、ということと同意義なんだぞ。」

もしくは「

そこで言葉を切って、八神は眼を細めた。

「もう襲う必要性がなくなった」

「それって……………」

“ラグナロク”は何かの目的のためにエーテル使いや人を襲っていたのだと八神は考えているようだ。そして、それがなくなったというのは何からの準備が整ったことを示唆しているのかも知れない、ということも。

「ああ。嵐の前の静けさというやつだろう。意外に早くくるかもし

れないな。禍魂たちが本気でこの世界を食い尽くしにかかる日が…。

注意しておけ。次、奴らが私たちと接触する時は多少派手になるかもしれない…。

残る時間は多くないぞ」

「ごくり、と俺は生唾を呑んだ。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の8 - 1

「まあでも俺たちが動かなくても“ラグナロク”の様子じゃ相手からきてくれそうだけだな」

俺はおどけるように言って、両手を頭の後ろで組んだ。

「違ういな」

フと綻ぶように笑う八神。

八神の笑顔の珍しさに俺は思わず呆気にとられて横を見上げたまま無言になってしまう。

「? どうした?」

「あ、いや……」と気恥ずかしくなって俺はぽりぽりと頬を掻いた。

「あ、待てよ。AESSでは俺の親の情報がほとんど残されていないんだよな?」

「ああ……。そのようだが。それがどうした」

「いや俺の親父の部屋になら何か資料があるんじゃないかと思ってさ」

「ないな。私がAESSの人間なら資料はとくに回収している」
ごもつとも。AESS内でも上層部の一部にしか知らないというな

らそういった資料は既に回収されている可能性が高い。

「だが今の時点でそれくらいしか探る場所もないのも事実だぜ。どうせ他はもう調べつくしたんだろ？」

「……………ああ。そうだが……………」

そこで俺はふとした違和感に気づいた。

「ってちよつと待てよ。なんかおかしいぞ」

「なにがだ」

「今の話の流れだとAESSは俺たちに何か隠し事をしているってことになるじゃないか」

キーンコーンカーンコーン、と俺たちの沈黙を覆うようにチャイムの音が鳴る。

チャイムが鳴り終わると八神は呆れたような表情で言った。

「何を今更。最初から私はそう言っている。お前も知っているだろう。AESSが一枚岩ではないことを」

「合界派と別界派か」

エーテル使いは思想の違いから大きく二つに別れている。異世界であるイデア界に繋がる“穴”があるといわれているが、この“穴”をどうするかでエーテル使いたちはしばしば衝突を起こしているのだ。

合界派は“穴”からエーテル・エネルギーを引き出しこの世界で利用しようと考えてる者たち、要するにイデア界との共存を考える者たちである。

変わって別界派は臭い物には蓋をしる理論で、穴を塞ぎ現界とイデア界を完全に切り分け、禍魂から身を守ろうと考える者たちだ。

結局、この二つの勢力はいつまで経っても平行線。解決の糸口さえ掴めないような状態が長い間続いているのである。

俺の言葉に八神が頷く。

「AESSの存在理由は確かに人々を禍魂やエーテル犯罪者から守ることだ。だが手に入れた情報を合界派が別界派に、別界派が合界派に流すかと問われれば……」

「なんだよ、それ！ 結局AESSも真つ二つでいがみ合ってるってことかよ……！」

そういうエーテル使いの衝突を取り締まるべき組織が内部で衝突しているとなれば、一体誰が場を治めるといつのか。

「ああもう！ あっちもこっちも問題だらけじゃねえかよ！」

わしゃわしゃと髪をかきむしる。

「でも悩んでたって仕方ねえ。行動しなきゃな。俺たちができるところを一つ一つやっていこう。少しでも今の状況を変えるんだ」

そんな俺の言葉に八神はフと笑う。

「お前は私と正反対だな」

「あん？　どいうことだよ？」

「お前は“奇跡の子”と呼ばれみなに必要なとされている。だが私は」

“拒絶されし子”。

俺はグリフォルオが八神に言った言葉を思い出した。

それは何を意味しているのか。

俺はAESSで八神が他のエーテル使いから壁を作られ白い眼で見られているのを知っている。学校での羨望の眼差しなどではなく、触れてはいけない腫れ物のように見られ、扱われている八神。

いや、今はそれを考えるのはよそう。どんな意味だって構わないのだ。八神は八神。俺にとっちゃ頼りになる存在であることには代わりはない。

「帰ったら親父の部屋を調べてみるか」

「ああ、そうしろ。結果は見えているかな」

「そうしろって……手伝ってくれないのかよ、八神。情報が欲しいんじゃないのか？　他はもう調べたんだろ？」

「手伝うも何も資料など残っているはずがないからな」

「そんなもん調べてみなきゃ分からないだろ」

「分かるさ。あるはずがない」

「あるかもしれないだろ。調べてみなきゃ分からないじゃねーか」

「いや、分かる。ないな」

「分からねえって！　なんで決めつけんだよ！」

「分かる！　常識的に考えれば想像はつくだろう！」

「分からねえよ！」

「分か」

「らねえ！」

言葉の先を俺に取られ、八神は悔しそうな表情になる。

「くうっ……！　お前はどこまで頑固なんだ……！」

「八神にだけは言われたくねえぞ！」

すると八神は仕方がないともいう風に後頭部を掻いた。

「……分かった分かった。私も手伝おう」

「そうこなくっちゃな。頼りにしてるぜ、八神」

言って肩を叩くと、

「調子の良い奴だな、お前は」と八神は苦笑した。

気持ちの良い風が、俺たちの間には吹いていた。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の8 - 2

放課後。

俺は裏門に来ていた。周りを見回してみるが人影はどこにも見当たらなかった。

それもそのはず裏門は山側にあるためこちらから帰宅する人はいないのだ。駅方面や住宅街に近い正門から帰るのである。

ここで八神と待ち合わせをしているのだが、まだ彼女の姿はない。

八神の方が先に教室を出たんだがなあ……。

一緒に教室を出るとまた何を言い出されるか分かったものではない。なので俺は八神から少し遅れて教室を出たのだった。

『また』と言うからには既に何かを言われたわけで……。授業中に教室へと帰った俺と八神は授業が終わるや否や、本田たちにどんな関係か問い質されたのだった。

結局、本当のことを話すわけにもいかず、適当にお茶を濁して逃げたが。

後が怖えーな……。

そんなわけで待ち合わせ場所を正門でなく裏門にしたのもそのためである。

八神って待たされるのとか嫌いそうだし、帰ったんじゃないだろうな……。

そんなことを考えていると、

「待たせたな」

後ろから八神の声がして振り返る。

「八神、もう帰っちまったのかと……って、おい」

「どうした」

「なんだそりゃ」と俺は八神が持っているものを指差した。

八神は大きなバイクをエンジン切ったまま転がしているのだ。

「BMWのR1200Rだ。いいバイクだろう」

そう言つて青く塗装されたR1200Rとやらを撫でる。その様子は少し自慢げだった。

「私はバイクいじりが趣味でな。新しいバイクを手に入れたら乗り回したい衝動に駆られるんだ」

「おまえ、まさかこれに乗って学校に来てるのかよ。うちはバイク登校禁止だろ？ いや、そもそも免許取るのも禁止だろ」

「知ったことか。ほら、さっさと乗れ」

ヘルメットを渡され、仕方なく俺は後部座席に座った。

「お前の家はどの辺りだ？」

「中央公園を突っ切った辺りにクリーニング屋があるのは知ってるか？」

「ああ」

「あの近くだ」

「かなり駅前から離れたところに住んでるんだな」と八神はキーを回した。

ぶろろろろと心地よい重低音にあわせて車体が振動がする。

「八神。スカートのままバイクに跨って大丈夫か？」

「問題ない」

と八神は後ろに座る俺に見えるように自らスカートをめくってみせた。

あわや下着が見えるかと思いきや、八神は黒のスパッツを履いていた。

「そこまで無防備ではないさ」

スカートを離すと、白いふとももから黒のスパッツが見え隠れしている。なんか妙にそそられるがあまりジロジロ見ると殺されそう

なので俺は気にしないよう努めた。

「安全運転で頼む」

「任せておけ。私の運転テクニックはプロ級だ」

自信満々のご様子な八神さん。

八神には悪いが正直言つて不安しかない。こういう奴は大抵、運転が下手くそと相場が決まっているのだ。

「少しばかり近道をするぞ」

ぶるう おおおん！ キキキキイイ！

そう言つと八神はいきなり左足を軸にしてアクセルターンで方向転換する。コンクリートにタイヤの黒い筋が伸びた。

そして前輪の向いた方向はというと……。

「うおおおおい！ そつちは森だぞ！？」

木々が鬱葱と生い茂る山側であつた。

「言つただろう。少し近道をする」と

事も何気にきっぱりと言ひ放つ八神さん。

そこで俺は少し考えを巡らせる。

ポクポクポク……。

脳内にこの辺り一体の地図が浮かび上がり、現在位置である裏門前と俺の家もとい中央公園の辺りを線で結ぶと

チーン！

森の中を一直線！？

馬鹿じゃねえの、コイツ！

「八神さん、八神さん！ それ近道じゃないんですけど！？ って
かそもそも道でもねえよ！ 聞いてんのか、おい！」

俺の話を無視し、返事の変わりにアクセルを全開にしてバイクは走りだした。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の9 - 1

ふわりと一瞬だけ持ち上がる前輪。

いきなり振り落とされそうになり思わず俺は八神の背中に抱きついた。

ぎゅるおおおおおん！

本来の進行方向である道を横断するように走りだす青いバイク。

「ぎゃあああ！？」

誰かこの人止めて、ぷりーず！

バキバキバキバキ！

木々や草木の中を突っ切って山の中を下っていく。

「黙っている……！ 舌を食いちぎりたいのか……！」

ガタガタと揺れまくるバイク。まるでトランポリンの如く跳ねる後部座席。

「落ちる！？ 落ちる、落ちる！？」

俺は必死に八神にしがみつくしかない。きつと今、俺がバイクから落ちてても彼女は気づきもしないだろう。

ふと前を見ると、どうやら森から抜けるらしく日の光が前方に見える。

ああ、やっと出られる……！

そう思ったが、どうやら災難はまだ続くようであった。

なんと森の先に道が無いのである。

そこで俺は気づいた。

この先は崖になっていて三メートルほど下に道路が通っているのである。

ぶわ！

一気に脂汗が出た。というか死を感じた。

まさか、こいつ……！

「八神さん！？ その先、崖ですけど！？」

「知っている……！」と舌で唇をべろりと舐め、更にスピードを上げやがる八神。

「ぎゃあああああ！？」

森から抜け、光の中へと飛び込んだその刹那！

ふわっ！

妙な浮遊感が俺を襲う。

下には山に巻き付くように造られた一般道。もちろん車が走っている。

散歩の途中なのだろうか、犬を連れたおばさまが俺たちに気づいて上空を見上げ、口をあんぐりと開けていた。

そりゃそうだろう。いきなり頭上中空からバイクが飛び出してくりゃ驚かないほうがおかしい。

八神と俺を乗せたバイクは一般道を飛び越え、おばさんの前に着地した。

ガシャン！ ギャギギギイイイ！

「バウバウバウバウ！」

犬が驚きのあまり吼えまくっている。

だがそんなことを八神が気にすることもなく暴走はまだ続いた。

なんと更にそこから歩道を横断して、さらに三メートル下の中央公園の茂みの中へとダイブしたのである。

また浮遊感が我が身を襲い俺の口からすつとんきよな声が漏れ出る。

「ふおおおおお！？」

中央公園の階段をガタガタと降り、ため池の中をジャブジャブと突っ切り、キス寸前のカップルの間を通り抜け、サッカーをしている真っ最中のグラウンドの中に入り、ゴール寸前のシュートを車体で止めて突っ切る。

「ルパンルパン！ ルパンルパン！」

俺は訳が分からずそう叫んでいた。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の9 - 2

キキキキキイーーッ！

片桐家の前に青いR1200Rが急停止する。

「ここか。思ったより早く着いたな」

八神はエンジンを切ると颯爽とバイクから降りる。

ずるり……どさ！

そんな音が背後からしたためか八神は自分の腰から腹に巻き付いている腕にやっと気づいてくれた。

その腕の視線の先を追うとバイクからずり落ち八神に抱きついたまま足を地面に引きずっている俺の姿。

「……おい、着いたぞ。いい加減離せ。動きにくい」

ぱしんと慈悲もなく腕を払われ、俺はばたりと地面に崩れ落ちた。

そりゃ……あんな近道したら早く着くだろ……。

「何をしている。さっさと案内しろ」

「八神」

俺はふらりと立ち上がった。

「なんだ」

「もう二度とお前のバイクには乗らねえ！」

「な、なぜだ。風が気持ち良かった筈だ。お前が望むならまた乗せてや」

「乗らねえッ！！」

そんなやり取りをしながら八神のバイクを庭に止め、俺はぐつたりとしたまま玄関の引き戸を開く。

「た、ただいま……」

「おかえりー、悼矢ちゃん。私も今帰ってきたところ　あれ？」

ぱたぱたとリビングから出てきたこよりが八神を見とめると少し驚いた表情になる。

「お客さん？　珍しいね。悼矢ちゃんが女の子を連れてくるなんて」

こよりが珍しがるのも仕方がない。なんせこの家に訪れる女の子と言えばこよりの友達か、この家の数軒先に住んでいる残念な美姫先輩ぐらいなもんだっただからだ。

「こいつはクラスメイトの八神。」

八神、俺の妹のこよりだ」

俺が互いに紹介すると、こよりはにこやかに笑ってぺこりとお辞儀した。

「どうも初めまして。悼矢ちゃんがお世話になってます」

「あ、ああ」とどこかぎこちない八神。

おそらくあまり今まで人付き合いをしてこなかったせいで、こういう対応をすればいいのか分からないのだろう。

そこでいつもは俺が帰ると犬みたく尻尾を振って『遊んで、遊んで』と寄ってくる一人の暇人を思いだす。

「リタは何してる？」

「さっき見た時は畳のお部屋でお昼寝してたよ。その前はリビングでゲームしてたみたい。机にゲーム機がでばなっし」と苦笑いなこより。

それを聞いて思わずため息が出てしまう。

まったく、俺が苦勞して情報を集めようとしてるのに……。八神の言うとおりここ最近は禍魂の気配が薄れたせいでダレてんな、あいつ……。

「ちょっと親父の部屋使っぞ。」

八神、部屋は二階だ」

「お父さんの部屋？ どうして？」

怪訝そうな顔で首を傾げる。

「あ、いや、それはだな……」

俺はこよりにエーテルや禍魂、イデアのことを話していない。AESSが情報規制しているのと同じように、人を襲う化け物がいることなど話しても混乱させたり、怖がらせるだけだろうという配慮もある。が、なにより『普通に生活すること』それが俺の彼女に対する望みでもあるからだ。

彼女　こよりは幼い頃、少し特殊な環境下にいた。それが原因か、かなり荒れていた時期があったのだ。俺に噛みついたり反抗的な態度をとったり……。

つーか、殺そうとしたり（笑）。

そういう事態を乗り越えたこともあってか、今の俺とこよりは兄妹としての絆以上に個々人の強い信頼関係がある。

そんなわけで彼女には普通の暮らしというものを享受していて欲しいわけだ。

俺が話したくないのを察してくれているのか、こよりも別段リタや俺たちが何をしているのかを訊いてこない。暗黙の了解みたくなっているのが現状である。

心配はするけど深入りはせず、個人を尊重して首は突っ込まない。これである。

「？ なーに？」

眼をぱちくりとさせ、小首を傾げるこより。さらりと両側で結んだ短い髪が肩にかかる。

ああもう可愛いなあ、こいつうゝ

「えーっと、だから、それは……」

頬をかりかりと搔いてどう言ったものか考えていると、そんな俺の様子に業を煮やしたのか八神が口を開く。

「何を言い淀んでいる。素直にお前の体の」

「わあああああああああ！」

だがそれを俺は慌てて大声を出して掻き消した。

「び、びつくりしたあー。いきなり大声出さないでよ、悼矢ちゃん」

ときどきと心臓が跳ねているらしく、胸に手をあてるこより。

俺は素早く八神にひそひそと耳打ちする。

「八神っ！ こよりは禍魂だとかエーテルだとかのことは知らないんだよ……！ つーか、知られたくないんだよ……！」

「何を言っているんだ。この子は」

と、そこで八神はこよりの視線に気が付き眼を合わせる。

「……………」

「……………」

無言で見つめあう八神とこより。

そして八神はやれやれとばかりにため息を吐くと、めんどくさそうに頭を掻いた。

「まったく……どいつもこいつも……。部屋は二階だったな」

「あ、ああ」

八神に尾いていこうとすると、制服の袖がくいくいと引っ張られた。

振り返ると引っ張っているのは、言わずもがなこよりその人だ。

「悼矢ちゃんっ、悼矢ちゃんっ」

「ん？ どうした？」

なんだか嬉しそうなご様子のこよりさん。

「八神さんって……………いい人だねっ！」

何があったのかこよりは笑顔でそう言った。

「は、はあ？ どういう意味だ？」

「いいから、いいから！　ほおら、早く行かないと！　女の子を待たせちゃだめだよっ！」

「あ、ああ……」

マイシスターに背中を押され、彼女の様子を訝しがりながらも階段を上るのだった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の10 - 1

二階に上がると八神は物珍しそうに廊下を見回していた。

「部屋が多いな。お前の家は」

「こう見えてこの家は共同賃貸なんだよ。今は誰も入居していないけど」

後半はぼそりと呟くように言っ、廊下を歩く。その後を八神がついてくる。

「共同賃貸だと？ お前の親が経営していたということか？」

「らしいな。経営なんてそんな大層なもんじゃねーと思うけど……。

放浪癖があつたみたいでさ。俺が覚えてる範囲で誰かが住んでた記憶はないんだよな。

ほらここだ。親父の部屋」

一ヶ月前、俺の父親、片桐司の部屋を俺とリタは探索したことがあった。その時は片桐家にエーテル・エネルギーがたゆっている理由を突き止めるためであつて今とは探索する理由が別だったが……。

結局その時、俺とリタは金庫を見つけるにいたった。

「んで、見つけたのがこの金庫だ」

あれから床に置きっぱなしの黒い金庫をぼんぽんと叩く。

八神はしゃがみ込んで金庫を調べ始めた。

「結局、鍵がなくて開けられなかったんだけどな」

俺はお手上げとばかりに詰まれた書物の上に腰を降ろした。

「だが今ならこの金庫をどうやって開ければいいか分かるだろう」

「へ……？ ……八神、この金庫の開け方分かるのか？」

俺の言葉に彼女はこくりと頷いた。

「この金庫の鍵はカードキーだとは理解しているんだろう？」

「ああ。だけどこよりもカードキーなんか預かってないって言うてるし……」

そう言った後で俺はある可能性に気づく。

「まさか……カードキーはエーテル・カードか！」

人間はエーテルたちのようにA Eを力量・物質に変換するような仕組みを体を持っていないことは既に説明した通りだ。だが、それを擬似的に可能にする装置を人間は開発した。

それがエーテル・カードだ。

エーテル・カードはA Eを注げばどんな人間でも発動できる摩訶

不思議なアイテムだ。しかしエーテルが発動することはできない。それはそもそもエーテルが放出するエーテル・エネルギーというもののは“変換されたエーテル・エネルギー”であるかららしい。そのエネルギーのことはエーテライズ・エネルギー（ASE）と呼ばれるようだが、その辺りの説明は割愛しよう。兎にも角にも、エーテル・カードを発動させるにはまだ変換していない“純粋なエーテル・エネルギー”でなければならないのだ。まあ、要するにエーテル・カードは人間がイデア界に接触できることを最大限利用した画期的な装置、というわけだ。

「おそらくそういうことだろう。だとすれば鍵となるエーテル・カードがない限りこの金庫は開かないだろうな」

「なんだよ。結局手詰まりなわけか」

コンコン。

扉がノックされこよりが入ってきた。

「お茶とお菓子持ってきたよー」

さすがはマイ・ラブシスター略してマブシスである。こういう気遣いができるのがお兄ちゃんと違って友人が多い理由なのかも知れない。

「炭酸飲料のジュース残ってなかったか？」

お茶が入ったコップを見つめている八神を見てこよりに尋ねてみる。

「う、ごめんね。リタさんが全部飲んじゃったみたい」

……。あの野郎……。

リタがこの家に住みはじめてから著しくエンゲル係数が跳ね上がった気がするのは錯覚じゃないだろうな……。

「いや、構わない」

と、無表情に言う八神ではあるが微妙に残念そうに見えるのは俺だけだろうか。

「ごゆっくりして行ってくださいねー」

こよりは手をふりふり部屋を出て行く。

「……………自慢の妹か」

出て行ったこよりを目で追って八神はコップに口をつけた。

「可愛いだろう。料理もうまいんだぞ。毎朝起こしてくれるし俺の弁当も毎朝作ってくれるんだぞ」

「……………。お前がシスコンと呼ばれる意味が理解できた」

うるせーよ。

「しかし、この金庫が唯一の手がかりだと思ったんだけどなー」

「諦めるのはまだ早いぞ。金庫以外に何かあるかもしれん」

八神は本棚の本をぺらぺらとめくり始める。

資料などあるはずがないとか言っただくせに八神の方が断然やる気あるじゃねーか。

そんなに欲しいか俺が持つてる特異体質。

と、その時だった。

ピンポン。

家の呼び鈴が鳴らされた。

「ありや来客か」

『悼矢ちゃん！　今、手が離せないから出てー！』

階下からそんなこよりの声が聞こえてくる。

「だそうだ。ちょっと行ってくる」

「……ああ」

興味深い本でも見つけたのか八神は本に眼を落としたまま生返事する。

この分じゃしばらく放っておいても大丈夫か。

俺は静かに部屋を退出した。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の10 - 2

私は本を手にして文字を追っていた。

興味深い内容だった。

片桐の父親はなかなか面白い趣味をしていたようだ。おそらく相当、知識欲の高い高尚な人間であったのだろう。

本を閉じ、私は何か他に目ぼしい物はないかと部屋を見回す。

そしてある本が眼に入った。

『悼矢 成長の記録』

何気なく私はそのアルバムを手取る。ハードカバーで手にずしりとするそれを開いてみた。

そこには片桐の赤ん坊の頃からのまさに成長の記録ともいえる写真が貼られていた。その写真の近くにはどこで撮ったものなのか、いつ撮ったもののかなどがこと細かく記されていた。

両親に放浪癖があったとは言っていたが、どうやらそれに片桐も幾度となく連れられていたことがあったらしい。

無邪気でわんぱくな子供時代を送ったらしい奴の写真を見て、ふと顔がほころんでしまう。

幸せそうだった。

今でこそ両親が亡くなったとはいえ、昔はそれこそ普通の家庭と同じく育てられたのだろう。

本当に……“正反对”……だな……。

『あの子が例の……』

『まったく……いい迷惑だな……』

冷たい視線。白い眼差し。私を避ける人々。

暗闇。雷鳴。

『助けてよ！ 誰か！ 助けて！！ お願いだから……助けてよっ……！！』

血を滲ませて剥がれる爪。

『どうして……誰も助けてくれないの……！ 助けてよ……！ 誰か助けて……！』

体温を奪う雨。尽きていく体力。

『誰もお前を助けない。誰もお前に興味はない。八神きづな、お前は独りで生きるしかないのだ』

嫌な記憶が脳裏に蘇り私は頭を押さえた。

頭に血が昇っている。

興奮したためかエーテル・エネルギーがじんわりと体から漏れ出る。

と、そこで私はある違和感に気づいた。

それはほんの微量なエネルギーの残り火。

「……？」

発生源は手に持つ片桐のアルバム。

そのアルバムからエーテル・エネルギーが微かに感じられたのだ。エーテルが見れば一発で分かるだろうが、人間が見れば見落とす程度のごく小さいなもの。

通常、本からエーテル・エネルギーを感じるなどあり得ないことだ。

つまり、誰かがこの本にエーテル・エネルギーを込めたということ。

これは、まさか……。

エーテル使いは一般人に秘密を知られないように文章に特殊な暗号をかけることがある。

仕組みはエーテル・カードと酷似している。一般人が見れば普通の何でもない文章なのだが、エーテル・エネルギーを注ぎ込めば真の文章が浮き出てくるという代物だ。昔からエーテル使いがよく使っ

た秘密隠匿のための技術である。

ごくり、と生唾を呑む。

A E S Sは気づかず回収し忘れたか……！

おそらく……いや、間違いなくこのアルバムには何か重要なことが書かれている。

すぐさま私はそのアルバムにエーテル・エネルギーを注いだ。

すると、貼り付けられていた笑顔の片桐の写真が違つ写真へと変貌していく。文章もまた違つ意味のものが浮き出てくる。

「っ！？」

本来の写真と文章を見た瞬間、どさりとアルバムを床に落としてしまっていた。

どういう意味なのか、理解できなかった。

何が写っているのか、理解できなかった。

だが思考が結論に辿り着いた瞬間、手からアルバムが離れていた。

声にならない。

いや思わず叫んでしまいそうになった。

だが自分の口を手で塞いでそれを阻止した。

顔から血の気が引いたのが分かる。

「!?!?!?!」

驚きのあまり脳が考えることを拒否していた。

キツい。

キツすぎる。

こんなことがあつていいのだろうか。

こんなことが本当にあるのだろうか。

目眩がして体がぐらりと揺らめき背後の本棚と背中がぶつかる。

片桐がこの事実を知ったら……！

知るべきではない。

見るべきではない。

教えるべきではない。

AESSが片桐に隠している意味が分かる。

何もAESSは悪巧みで隠していたわけではない。奴らの心遣いから誰にも知られないように秘匿にしていただけだったのだ。

そして私があの特種な力を手に入れることは絶対にできない。

奴はやはり世界で一人しかいない絶対唯一の“特別な存在”だったのだ。

落ち着け……！ 片桐が戻ってきたらどうする……！

私はすーっと深呼吸した。

……大丈夫だ。ちゃんと普段通り接しよう。

そして呟く、本当の意味を知ったその言葉を。

「……“奇跡の子”……か……」

私の手から離れたアルバムはただただ笑顔で無邪気に笑う子供時代の片桐を映し出していた。

「はい」

俺は気だるい感じで片桐家の門を開けた。

門前には一人の少女が立っていた。身長は俺と同じか少し低いくらい。歳は俺より少し上くらいだろうか。

白の着物に赤の袴で身に包まれた姿。その巫女さんや剣道場で着られるような格好と相まって清楚とした佇まい。

透き通るような黒髪を白い紐で結っている。いわゆるポニーテールと呼ばれる髪型。その頭には三度笠。足には白い足袋、わらじという遥か昔の旅芸者のようだ。その背中にはまるまるとなった大きい風呂敷を背負っている。

とても綺麗な人だった。大和撫子とは彼女のために作られた言葉なのではないかというほどの和風美人。

しかしどうしたことだろう少女の眼は涙で潤んでいた。

まるで感極まっているかのように。

「ど、どちら様でしょうか？」

俺が開口した瞬間。

ぶわっ！

彼女はどさりと風呂敷を地面に落とし、眼の幅涙をだああっと言出し始めた。

鈴が鳴るような澄んだ声で彼女は言った。

「やっと……！ やっとお会いすることが出来ました、悼矢さま……！」

だきっ！

胸に飛び込んでくる巫女装束の女性。

「と、悼矢さまだあゝ！？」

そんな呼ばれこともない敬称に俺はただただ驚くしかなかった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の11 - 1

しばらくして客間には俺と彼女の姿があった。客間の窓からは庭が見えており、縁側では白猫のしらたまが日向ぼっこをしている。気分でも良いのか尻尾がリズム良く廊下を打っていた。

客間は畳部屋で、俺の背後には『千客万来』の文字が書かれた掛け軸がかかっている。

昔はよく親父が来客の度に利用していた部屋だったらしいが、今は来客もほとんどないためもうほとんど利用していない部屋である。

その割に埃が見当たらないし、木目調の低いテーブルがぴかぴかなのはこよりがまめに掃除をしているからなのだろう。

俺たちはそのテーブルを挟んで座っていた。

彼女はまるで訓練されたかのように清らかな佇まいで正座。

彼女、というのは言うまでも無く巫女チックな姿をした黒髪ポニテの女性である。

対する俺はあぐらを掻いて少しその場に居づらそうに。

俺が居づらそうにしている理由は一つ。

彼女の俺を見る眼だった。

彼女の視線は憧れ、感激、陶醉とまあおよそ俺が今まで受けた経

験の無い類の想いが伺い知れるほどの熱視線だからだ。

なんか変なことになってきたなあ……。

「どうぞ、粗茶ですが」

こよりがお茶を客間へ運んできた。

「有難うございます、こよりさま。どうかお構いなく」

「こ、こよりさま……」

こよりは俺と眼を見合わせると首を傾げてみせた。『誰?』といったところだろうか。

俺は両の掌を天に向けて『さあ?』と返す。

こよりはそのまま興味深そうに彼女を見ながら部屋を退出していった。

ずずとお茶に口をつけ、ほうと熱い息を吐いて一息つく彼女。

二人つきりになった部屋でする事も無く、彼女を見ていると不意に眼があつた。

すると彼女は頬を赤らめ、視線を斜め下に反らすではないか。

「嫌です、悼矢さま。そんなに見つめないで下さいまし。恥ずかしいです……」

反らしながらも上目遣いにチラチラとこちらを見ている。

「あ、ああ。すまん……」

なんだか様付けで呼ばれることにむず痒い気持ちを抱きながらも謝る。

「えーっと、それでうちには何の用で？」

これを切り口に話を促してみる。すると彼女は急にしゃんとした顔になった。

「申し遅れました。私は和泉弥生と申します。悼矢さまの父君である司さまの命を受け、参上仕った次第にございます」

なっ！？

なんつつた、今！？

「親父の！？ 親父は生きてるのか！？」

いきなりの展開に身を乗り出す。

それもその筈。グリフォルオの言葉を信じるなら俺の親父は既に死んでいるはずなのだ。

しかし弥生さんはゆっくりと首を振った。

「私は司さまがご存命かどうかは存じ上げません。

私が命を受けたのは十年以上も前の話ですから。その時、司さまは時期がくればすべてを悼矢さまにお話しろと……。

そして今こそ悼矢さまにすべてをお伝えする時機だと考え、遥々京の都から来たのです」

ごくりと俺は生唾を飲んだ。

親父が自分に伝えようとしていること。

おそらく、俺の体に関することだろう。

「話してくれ。親父は俺に何を伝えたかったのか」

俺の真剣な眼差しを受けて弥生さんはごくりと頷いた。

「こんな話をいきなりされて信じられない部分も多々あると思います。ですが今から話すことは真実です。」

どうか心を強く持ってお聞きください」

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の11 - 2

「話してくれ。親父は俺に何を伝えたかったのか」

俺の真剣な眼差しを受けて弥生さんはこくりと頷いた。

「こんな話をいきなりされて信じられない部分も多々あると思います。ですが今から話すことは真実です。

どうか心を強く持ってお聞きください」

そう前説を置いて弥生さんは胸に手をあてると真剣な顔で言った。

「悼矢さま。実は私、人間ではないのです」

「……………」

「私はアイデア界という異世界からきたエーテルと呼ばれる存在です」

「……………は、はあ……………」

俺はぽりぽりと頬を掻いた。

あー、エーテルだったんだ、この人。

それが俺の素直な感想である。

すると弥生さんは眼を閉じ、かぶりを振った。

「ええ、分かります。悼矢さまが困惑するのも当然です。いきなり異世界だのエーテルだのと言われてもお困りになることでしょう。ですがどうか受け入れてください。これは真実なのです、事実なのです、現実なのです」

どうやら弥生さんはひどい勘違いをしているらしい。俺はまだイデアのことも、エーテルという存在のことも知らないと思っているようだ。

「はあ。まあ、別に疑ってないですけど。親父が俺に伝えたかったことってそれだけ？」

そんな平然とした俺の様子に弥生さんは驚き、感嘆して俺を見つめてくる。

「そ、そうですが……。あ、いえ他にもエーテル・カードなるものやら、禍魂やら……。！」

無論。そのどれもの知識を俺は持っている。

「……………。他には？」

「し、信じられません……。！ さ、さすが悼矢さま……。！ 私のご主人様です……。！ なんとという理解力なのでしょう……。！」

詰まる所、俺にエーテルやイデアのことを教えるのは弥生さんの役目だったってことか？

弥生さんの話から鑑みるに、親父は俺が時期がくれば非日常の世界を、この世の真実を伝えようと昔から決めていたらしい。その役目

を担ったのが彼女のようだ。

しかし俺は一ヶ月前リタからアイデアだのなんだのという話は既に聞かされているわけで。

「あ、いや……俺、もうそのことすでに知って」

既に知っているということ伝えてようとしたその時。

弥生さんは何か訝しそくに眉をひそめる。

「あら？ 悼矢さま」

くんくん。

俺の匂いを嗅ぎ取るように鼻をひくひくさせる。すると弥生さんの表情が徐々に黒いものになっていく。

「……………。これは一体どういふことなのでしょう。悼矢さまから他のおなごの“匂い”がしますが……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

弥生さんから凄まじい負のエーテル・エネルギーが立ち昇っている。

ぶるぶるぶる。

そして俺は弥生さんの足にそえた白い手が震えているのを見逃していない。

さらに俺は気づいていた。

『他のおなごの匂い』とはおそらくリタのことなのだろう、と。

エーテルたちはエーテル・エネルギーに満ちた存在だ。そのため近くにいる者はエネルギーの残り火を受けることになる。リタと一つ屋根の下で暮らしている俺からリタの“匂い”がするのも当然の話であつた。

それは人間には分からないささいなものだ。が、エーテルである彼女は気づいたのだらう。

どう説明しようかと俺が悩んでいるその時だつた。

すぱーん！

軽快な音とともに客間のふすまが開く。

「トウヤー。お腹すいたー。なんか買ってきてー」

寝起きっぱいリタがそこには立っていた。

思わず俺は『げ』と呟いてしまう。

なんとなく今、この状況でこの二人が出会うのはまずい気がしたのだ。

リタ＝ルクライル。何を隠そう俺が契約しているエーテルである。上質の金を溶かしたようなサラサラの長い髪に、気の強そうなこ

ろが分かる眉と目。黙っていれば美人なのだが、性格は残念なことに猪突猛進で俺に負けずとも劣らぬ頑固、自信家、おてんば、高飛車、じゃじゃ馬なのだった。

今は白いタンクトップにホットパンツ、黒のニーソックスという部屋着まんまな姿をしている。こよりのを着ているせいかサイズが小さく、タンクトップはへそ出しに、ホットパンツのチャックは最後までしまらず白いショーツが見え、後ろは半分お尻が出ているような状態だ。リタとしては動きやすい服装を選んでいるつもりなのだろうが、俺にとってはまるで男としての度量を試されているような格好でしかない。

そう。彼女こそがイノシシも目ん玉むき出すぐらいの猪突っ娘なのである……！

そんなリタをまじまじと見つめる弥生さん。

そんな弥生さんをまじまじと見つめるリタ。

まるで本田のようにリタへ弥生さんへと、交互に視線をやりながらどう説明しようかとあたふたと慌てている俺。

決して自分は悪いことをしたわけではないはず。だというのに襲い掛かってくるこの嫌な予感は何なんだ……！

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の12 - 1

「あれ？ この人、もしかしてエーテル……ですか？ あれれ？」

弥生さんの頭上に『？』マークが頻出しているのが見える。

そりゃそうだろう。弥生さんは俺がエーテルという存在など知らないはずだと思っているのだから。

リタは弥生さんを指差して俺に問いかけた。

「……………誰？ エーテルみたいだけど」

「リ、リタ！ あとで何でも買ってきてやるから今は向こうに行つてろ！ な！？」

俺は慌ててリタを追い出そうと彼女の白い肩をぐいぐいと押す。

「気安く触らないでよ、変態！」

ぼこ！

アッパーを入れられた。

なぜちよつと触ったぐらいで殴られたのだろう。俺、こいつの契約主のはずなのに……。

ああ、そうか。やっぱり弥生さんと契約するのが正規のルートだったんだな……。

涙がちよぎれた。

「ど、どうしてエーテルがこの家に？ あれ？ あれ？ あれれれ？」

弥生さんはなんだかパニックになっていた。

「どうしてって……。私、トウヤと契約してるし」

そんな弥生さんに平然とのたまうリタ。

あ、地雷を踏んだ音が聞こえた。

顔色がどんどん悪くなってくるのが自分でも分かる。

「へ？」と間抜けな顔をしている弥生さん。

それはまるで言葉の意味が分かりません、とでも言っているようだった。

なので相手にちゃんと意味が伝わるように、リタがもう一度言い直す。

「いや、だから……トウヤは私の主なのよ！ なんか文句あんの！？ っていうか、誰なのよ、アンタは！ トウヤに何の用！？」

なんだか喧嘩腰になってきてませんか、リタさあん！？

お前の性格はよく理解しちゃういる。が、正直、この状況でそう

いう態度はやめてもらいたい。どんな時でも強気な相方を持つと辛いものである。

「ど、どういことなんでしょうか？ 悼矢さまの最初のエーテルは私で……そしていづれは私と悼矢さまはごによごによ……でも悼矢さまにはもうエーテルがいてあれ？ あれれれれ？」

ぷしゅーと弥生さんの頭から煙があがる。

「ちょ、ちよつと落ち着いてくれ、弥生さん！ これは違うんだ！」

「ち、違う！？ 違うってどういう意味よ、トウヤ！」

ぱちーん！

頬を引つ叩かれた。

「このエーテルは一体何なのよ！？ 私が寝てる間になに連れ込んでるのよ！ ことと次第によつちや私も手が出るわよ！？」

「お約束のように手が出してから言うな、このバカ！ つか、おまえ黙ってる！ 話がややこしくなるだろーが！」

「どういことなのですか、悼矢さま！ このエーテルは何なのですか！？ これでは話が違います！」

「話！？ ちよつとトウヤ！ あんた、このエーテルとどうい話になってたのよ！ 詳しく聞かせてもらおうじゃないの！」

ズトトトトトト……！

リタの手に光が収束してバカでかい大剣が姿を現す。

アルデヴァイン伯爵ご登場お！？

流石にそれでツツコミ入れられたらA Eで肉体強化しても死ぬぞ。

「まてまて！ アルデヴァインしまえ！ つーか、おまえ、そりゃ勘違いだつての！」

「ガーン！ 勘違い……そ、そんな……私は悼矢さまのエーテルになるために今まで鍛錬を積んできたというのに……！ 悼矢さまと言葉を交わしたい、でも許されていないという針の筵の中に幼い頃からいたというのに……！」

悼矢さま、あんまりです！ ひどいです！ 恨めしいです！」

眼に涙をためて、両の拳でだっこのように俺の胸をぽかぽか叩いてくる弥生さん。

「お、幼い頃からあ！？ あんた、子供の頃から既に手を出してたつて言うの！？ このシスコン！ 色情魔！ 変態！ シスコン！」

「二回もシスコンって言うな、コラア！ っていうかお前もう黙れ！ って、いててて！ こら弥生さん、爪をたてないで！」

あーだ、こーだ。

どたっばたっ！

「な、何してるの、みんな……」

騒ぎをききつけてやってきたこよりは遠巻きにぎゃーぎゃーと騒ぐ三人を見つめていた。

部屋の縁側にいるしらたまは三人の様子を見ると、青空へと視線を流しあくびをした。

「ふなあゝお」

今日も片桐家は平和だった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の12 - 2

「……………」

「……………」

「……………」

客間を沈黙が包んでいた。

沈黙の空気だけならまだ俺も心持が穏やかでいられただろう。しかし残念なことにその場の空気は最悪だと言わざるを得なかった。

壮絶な掴みあい、醜い罵り合いの果てに落ち着きを取り戻した俺たちはそれぞれ座布団の上に座っていたのであった。

落ち着いた俺たちがまず行ったのは互いの状況説明だった。

俺は一ヶ月ほど前にリタと出会い、エーテルや禍魂について知ったことを弥生さんに話した。

「…………ルクライル……。貴女はルクライル家の方なのですか…………」

弥生さんが少し戸惑うように言葉を発した。

「なによ」と睨むリタ。

「…………あ、いえ…………」

コホン、と咳払いをすると弥生さんは話し始めた。

「私は幼い頃から京都のとある社に住んでおりました。そこには他にもエーテルたちが住んでおり、私たちは切磋琢磨しあいながら日々を過ごして参りました。」

そこへある日、悼矢さまのお父様が本殿にいらっしゃったのです。お父様はとても気の良い方でした。本殿から出たことのない私はよく司さまからお話をしてもらったのです。その時に、司さまは悼矢さまという可愛い息子がいることを私に話してくださいました」

すつと着物の袖から古ぼけた写真を机にだす弥生さん。何年も前のものらしく、淵がかなり変色してしまっている。

その写真を手にとってみると、そこに写っているのは砂場で遊ぶ幼い俺の姿だった。

「司さまの話を聞いているうちに私は悼矢さまに興味を抱くようになっていました。そんな私の心中を察して下さいたのでしょうか。司さまは私に精進し、その時がくればすべてを話すようと大事な役目を与えて下さいました。」

そして私は悼矢さまのエーテルになるために鍛錬を積んで参りました。それは悼矢さまのためとはいえ苦しみ日々でした。しかしそれもこれもすべては悼矢さまのため。この身を不幸だと思ったことは一度もありません」

しゃんとした佇まいでそう宣言する弥生さん。

「そういうことですリタさん。悼矢さまを返してください。私はい

わば契約の許婚なのです」

少し睨むように弥生さんは俺の隣に座っているリタを見た。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の13

「却下よ。トウヤは私のものだもの」

しかしリタは弥生さんの願いを一蹴し、机の上の茶菓子を手に取った。そしてそ知らぬ顔でばくつく。

そんなリタの素っ気無い態度に弥生さんはばんっとテーブルを叩いた。

その大きな音にびくり、と俺の肩が震える。

もなかを口に含んでいたリタはどんどんと胸を叩いてごくりと嚥下する。

「そんな言い分が通ると思いますか！？ 人のご主人様を奪っておいて！ この泥棒猫っ！」

泥棒猫で……。昼メロドラマでもはや使われてない単語なんじゃないか……。

弥生さんの発言に対してリタは見せつけるように俺の右腕に両腕を絡めてくる。

「何言ってるのよ！ 早い者勝ちでしょ！ べっだ！」と舌をだすリタ。

ガキか、お前は！？ っていうか腕に胸あたってますってリタさあん！

“ないちち”でも男にとって魅惑的な部分であるには違いなかった。

「くっ……！ あと一ヶ月早く……！ 私が電車の乗り方さえ分かっていたら……！」

悔しそうに肩を震わせる弥生さん。

つて、あんた京都から歩いてきたんかい！

京都から関東の片田舎にあるこの街まで果たして何キロあることや。よく途中で諦めなかったものだ。その不屈の精神は評価したい。

「リタさん！ エーテルにとって契約は生涯の伴侶を決めるような神聖なもの！ 貴女に悼矢さまと添い遂げる覚悟はあるのですか！？」

たいがいのエーテルは契約者と生死を共にするらしい。たいがい、と言うのはエーテル使つまり契約主であるマスターが死亡すれば自然契約は解除されるのだが、エーテルよりも先にマスターが契約主が死ぬというのは稀なケースか、最初からそういう目論見であったケースのようだ。ともかく、ほとんどの場合は死ぬ時は一緒に、それ故にエーテルにとって契約を決めることは生涯を共にすることと同意義なのだとか。

エーテルにとって契約がそれほど大きな人生の機転らしいことはリタに出会った時に聞いてはいたが……。

「当たり前よ！ 馬鹿にしないでくれる！？」

紋章が反応したというのももちろんあるけれど、私がトウヤを気に入ったから契約したのよ！」

「紋章なら私だって……！」

いきなり弥生さんが立ち上がると着物から肩をはだけさせ、上半身を外気に晒す。

白い肌が、胸に巻いたサラシが頸になり、俺は思わず両手で視界を隠した。

「ちよつと、弥生さん！？」

だんつと勢いよく白い足袋の足をテーブルの上に乗せる。そして遠山の金さんのように左脇腹を見せた。

「御覧なさい！ 悼矢さまに会って私の紋章は反応し続けています
！！！」

瞬間。俺の目を緑色の光が覆った。

そこにはその存在を主張するように爛々と輝く紋章。四葉のクローバーのように葉っぱが四枚、先が四方を指した紋様。どうやらそれが弥生さんの紋章であるようだ。

エーテルにはそれぞれ個々に独特の紋様が存在する。例えばリタの場合は右肩にある赤い紋様。それはエーテルである証であり、ご主人様探知機のような役割でもあるのだとリタが言っていたが。

「それに私は……！　わ、私は悼矢さまを愛しています！」

両の拳を胸の前で握り、眼をぎゅっとつむり、顔を真っ赤にしながら叫ぶ弥生さん。

「悼矢さまが望むなら夜伽もこなせます！」

『ぶふううつふう！？』

俺とリタは思わず吹き出してしまっていた。

いきなり何言っちゃってんの、この人おお！？

エーテルとの契約ということが激しく誤解されそうな発言だった。

対抗心に火が点いたのか、やめときゃーいいのにリタも負けじと言
い返す。

「わ、私だって……そ、それくらいなら……！」

「う、嘘をつかないで下さい！　貴女と悼矢さまの態度を見る限り
そのような関係でないのは分かります！」

「う、嘘じゃないわよ！」

そう言っや否や、いきなりリタが俺の肩をがしりと掴んだ。

そして、じっと俺の顔を見つめてくる。

「おいおい、リタ……！ 落ち着けて！ お前が負けず嫌いなのは分かってるが、それは違っつていうか……！」

っていうか、本来ときどきするはずのシーン展開のはずだろこういうのって！ なのになんかすげえ嫌だ！ っていうか普通に怖えッ！

「るさい！ あんたは黙ってなさい！」

顔を真っ赤にして額にびっしりと脂汗が浮かんでいるリタ。

その顔が、体が、俺を押し倒すように体重を預けるように徐々に近づいてくる。思わず畳の上に手をついて押し倒されるのはまのあたれ。

さらに、とリタの金髪の髪が鼻をくすぐりこそばゆい。

弥生さんはそんな俺たちを見て恥ずかしそうに眼を手で覆っていた。ばっちり指の隙間から見えているが。

「お、おい！ リ、リタ……！」

「トウヤ……」

リタが俺の唇に唇を近づける。

ふっくらとした荒れ一つない瑞々しい唇が眼に入る。

触れ合うという瞬間。

ガッン！

俺は額に頭突きをされていた。

「こんにやろめええええええええっ！」

しゅーと額から白い煙が出て、俺はじたばたと畳の上を転げ回った。

なんとなく期待しちゃった俺が馬鹿だった！ 分かってたのに！
こうなるって分かってたのにい！

「ト、トウヤは……不能だから別にいいのよ！」

「勝手な設定を付け足すなよ！」

「そ、それみたことかです！ 強がってもだめですよ！

それにリタさん、貴女のその胸では悼矢さまを満足させることはできないでしょう！」

ピシャーーン！

リタが雷に打たれたような表情になり、ぱっと両腕で隠すように胸を抱いた。

「や、弥生さん！ それはリタにとってタブーなんですって……！」

リタ！ 頼むから喧嘩沙汰には……！」

俺はリタがぶち切れてないかと慌てて振り返ると、彼女は部屋の隅っこで背を向け三角座りしていた。

チーン。

意気消沈とはまさにこのことを言うのだろう。リタの周りだけどもんよりと暗黒の空気が渦巻き、じめつとした雰囲気漂っている。

あのまま放っておいたら、あそこだけカビが生えそうだ。

「このままでは埒があきませんね。仕方ありません……」

弥生さんがくると勇ましい顔で振り返る。そしてとんでもないことを言いだした。

「……リタさん、わたくしと尋常に勝負です！」

ズビシイとリタを指差す弥生さん。

瞬間。ぴくぴくっとリタの耳が動いた。

「ふーん、多少なりとも腕に自信があるようだけど……」

すつと背後を向いたまま立ち上がるリタ。

その体を赤い光が包んだと思うと、ぱつと振り返る。

「虎穴を掘ったわね！」

振り返ったリタはいつもの戦闘服になっていた。

墓穴だ、馬鹿。なんだそれ、どういう状況なんだよ。混ざってるじゃないか。

真つ赤なドレスに左腕、両足を覆う部分的な甲冑という見慣れた格好になるリタ。それこそが彼女の戦闘服なのだ。

それは決して無から有を生み出したわけではない。A E（厳密にはエーテライズ・エネルギー A s E）を利用した物質化（エーテル化）である。俺も詳しく理解しているわけではないが A s E というのは使用者の状況、求めるものに応じて性能・在り方を変えるものらしい。時には今のよう物質に、時には肉体に作用し強化を促すエネルギーに、その使い方は多岐に渡る。エーテルたちはこういった A s E の特殊な性質を用いて己の武器や服を生成しているようだ。

「おいおいおいおいおいおい……！二人とも落ち着けよ！」
今すぐにも弥生さんに飛び掛かりそうなりタ。そんなリタにいつでも反応できるように身構えている弥生さん。

幾らなんでもこんな所で戦わせるわけにはいかず、俺はすぐさま二人の間へ割って入って両手を左右に広げた。だが、

「トウヤは黙ってて！」

「悼矢さまは黙っていてくださいまし！」

二人に凄まれて二の句が継げなくなってしまう。

エーテルが持つ生命エネルギーって凄いよなあ。

結局。窓から空を見上げて現実逃避することにした。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の14 - 1

さわさわ……。

静かに風が吹いて桜の木が揺れる。

片桐家の庭はそれなりに風情の感じられる景色で春には桜を覗きに近所の方が訪れたりすることもあったり、なかったり。

かくいう俺も春休みに入った頃、美姫先輩とこよりの三人で花見を行ったのだが。

あの平和だった風景が今ではどこ吹く風。

庭の中央で対峙している二人のエーテル。

その二人が発する戦闘前の緊張感で庭はしんと静まり返っていた。

そんな二人を縁側で眺めているのは俺 + 日向ぼっこ中のしらたま。

そこへ八神が二階から降りてきた。

「おう、八神。一人で調べさせて悪かったな」

「いや、構わないさ。興味深い本が何冊かあってな。持って帰ってもいいか」

「ああ、構わねえぞ。こよりも読まないだろうしな」

俺が読まないのはわざわざ言つまでもないことだろう。

「そうか。で、客人が来たのではなかったのか」

「それが、ちょっと厄介なことになってな」と俺は中庭の二人に視線を戻した。

八神も俺の視線を追って、彼女たちに気づく。

「……何の騒ぎだ、これは」

「なんとかしてくれ。俺じゃ手をつけられない」

お手上げとばかりに俺は両の手を天に向ける。

「エーテル同士で決闘か？ 相手はこのエーテルだ」

八神の顔が少し興味深そうに変化する。

「俺のエーテルらしいんだよ、これが」

「お前のエーテル？」

と眉をひそめて俺を見てくる。

「ああ。かくかくしかじかで」

俺が事のあらましを話すと八神はやれやれとばかりに重い息を吐いた。

「お前は本当に厄介な事に巻き込まれるのが好きだな。トラブルを呼び込むのも特異体質のせいじゃないのか」

「好きで巻き込まれてるわけじゃねーっつーの！」

と、その時だ。ふとりビングからこよりの声が聞こえてきた。

「八神さーん。クッキー焼いたんですけど食べますか？」

「ああ。食べる」と八神はリビングの方に歩いていった。

俺としてはできればこの状況を止めて欲しかったのだが、残念なことに八神の興味はクッキーの方に傾いたようだ。

残るしらたまはこよりの『クッキー』という言葉にぴくりと耳を動かしたものの、相変わらず眠そうな眼で縁側に伏せリタと弥生さんを眺めている。

彼女はどうかやらクッキーより、こちらの方に興味をお持ちのようだ。

俺はしらたまを抱き上げると、あぐらを掻いた足の上に乗せて背を撫でてやった。

気持ち良いのかゆらゆらと白い尻尾が揺れる。

「なあ、しらたま。お前ならあの二人を止めることぐらい朝飯前だよな……」

「なーお」と返してくるしらたま。

「後でプリンやるから止めてくれよ。好きなんだろ、プリン」

「うなー？」と首を捻って俺を見上げるしらたま。

どうやら今は猫を貰くつもりらしい。紛う事なき猫かぶりをして
いるしらたまから中庭の二人へと視線を移す。

俺もここまできたらぶつかり合わないと止まらないだろうとは思
うが……。

「勝ったほうが悼矢さまの真のエーテル。私が勝った場合、悼矢さ
まとの契約を解約して貰います。それでいいですね？」

凜とした佇まいでリタを見据える弥生さんはそう確認する。

「もちろんよ。こうでもしないとあんたは納得できないでしょうし。
私が勝ったら本殿とやらに大人しく帰って貰うわよ」

対するリタは腰に片手をあて余裕そうに。

「後で泣きついてきても知りませんよ」

弥生さんの瞳の中に闘争心の炎が点り始める。

「言ってなさい。泣きつかないやいけないのがどっちかすぐに分か
るわ」と涼しげに受け答えするリタ。

睨み合う二人。

ずっと静かにリタがボクシングスタイルで拳を構えた。

弥生さんは深く呼吸を吐くと、拳を作らずゆるやかな構えをとる。

ざあああ……。

再び風が吹く。

その風が吹き終わったその瞬間。

二人が動いた！

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の14 - 2

風が吹き終わったその瞬間。

二人が動いた！

地面を蹴り、互いの間合いが高速で詰まる！

相変わらずだがエーテルの身体能力は凄まじい。相手が人間なら一呼吸する間に間合いを詰められ、一撃で気絶させられているだろう。

先に手をだしたのはリタだった。

フックとは思えない強烈な左フックが唸りをあげて弥生さんへと放たれる。

速いな。腐っても鯛か。最近ダレていたとはいえ、こと戦闘に關してリタは天性の才能を持っている。

リタにとって戦闘こそが本業。掃除、洗濯、料理ができなくても彼女がまったく気にせず、この家で大きな顔ができる理由。

それは己に絶対の自信を持っているからだ。八神に鍛錬をつけてもらった時にも話が出たが、この自信というものがかなり重要らしい。

リタの左フックに反応して弥生さんは左に体を傾けて避けようとする。しかし

「甘いわよっ！」

ぶうおんっ！

風を切る音！

「！？」

左フックが引っ込み、その反動を利用するように右拳が放たれていた。

左はフェイントか！ 入る！

持ち前の当て勘で弥生さんが左に回避することを読んでいたのか、リタの右拳が弥生の顔面に迫る！

だが！

「甘いのは……！」

弥生さんはリタの右拳の手首辺りを右手でいなす！

「貴女です！」

すると勢いにつけていたリタの体が弥生さんに引き込まれるように、前に傾き体勢が崩される。

「っ！？」

弥生さんは出した右手の運動エネルギーに反発せず、円を描くようにその場で体を一回転させて左肘でリタの左頬を打った！

「っっ！」

ずさあああ、とりタが後方に弾き飛ばされる。庭にリタが踏みとどまった二本の線ができた。

あんまり地面を掘り返さないで欲しいなあ……。

弥生さんは腕の裾をふわりと翻しながら体をくるくる回転させて、ゆっくりと回転を止める。

辺りに散らばっていた葉っぱが弥生さんの周りをひらひらと舞う。

まるで水が流れるような自然な動き。

その洗練された様に思わずぐくりと唾を飲んでしまう。

柔術？ いや合気道か、あれは……。

見ると彼女の足元に草鞋で描かれた円ができていた。その円はまるでコンパスで描かれたかのような真円。それは彼女がどれだけ修練を積んだかを物語っていた。

「あのエーテル。強いぞ」

隣からいきなりそんなぽつりと呟く声が聞こえた。

いつの間にか八神が戻ってきていることにびっくりしてしまう。

八神は縁側に立ったままぱりとクッキーを齧り、観戦モードだ。

しらたまも先ほどまでの眠そうな眼ではなく、俺の足の上で眼を細めて弥生さんを見ている。

そんな彼女らの様子を受けて俺はリタへと視線をやった。

負けたりしないだろうな……あの馬鹿。

リタはぺつと血を吐いて手の甲で口元をぬぐった。どうやら口の中を切ったらしい。

「フン。柔よく剛を制すってやつ?」

「ええ。貴女のような野蛮な方にはない発想でしょう」

にこりと微笑む弥生さん。

誰が見ても分かる明らかな挑発だった。

ぴきっ！

リタの額に怒りマークが浮き上がる。

「いちいち爛に触ることを……!」

あーあ。怒ってる、怒ってる。これじゃあ弥生さんのペースに巻き込まれちゃうぞ……。

再び拳をリタが構える。

だが、どうしたことがすぐに攻めはしない。じりじりと間合いを詰めながら相手の出方を伺う。

「冷静だな。あの一合で相手のスタイルを見抜いた」

八神に言われてから気づいた。

リタは弥生さんの戦闘スタイルが待ち型だということを既に見抜いたようだ。そもそも合気道はその体捌きによって自分よりも力が強く大きな相手に対し最も有効な格闘術で、自ら攻めることよりも相手の出方に技を返すことが最も合理的とされている。

だからこそリタは少しずつ距離を詰めることで、どの辺りから弥生さんの間合いなのか計ろうとしているらしい。

流石……といったところか……。戦闘慣れしているだけはあるな……。

「分かっているな、片桐。これはいいシュミレーションだぞ。エーテル使いにおいて何が重要なのか。お前に何ができるのか、よく考えながら見ておけ」

ぐつと俺の拳に力がこもる。

「ああ」とだけ俺は答えた。

なぜだろうか。俺は彼女たちの戦いを見てわくわくしていた。

まるで体が戦闘を望んでいるかのような感覚。思わず笑みがこぼれる。

確かめたいんだな……俺は……。どれだけ成長したのか……。

「良い判断です。伊達や酔狂で悼矢さまのエーテルになったわけではないようですね」

いや、伊達や酔狂で契約したようなもんだっただけ……。

俺は心の中でツツコミを入れていた。

「ですがまだまだ読みきれていません！」

刹那、弥生さんが地面を蹴った。

『！？』

それにリタだけでなく、俺や八神も驚く。

自らリタへ間合いを詰めた……！？

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の15 - 1

待ち型の筈の弥生さんから接近したことに俺たちは驚く。

中空でくるりと横に一回転し、姿勢を低くして右足で蹴りを繰りだし足払いをかける。

俺たちと同じようにリタも弥生さんがまさか自ら攻めてくるとは思っていなかったようだが、後ろに軽くステップして足払いをやり過ぎすことに成功する。

しかし、そこへ弥生さんは更に体を一回転させて立ち上がりながら左手の甲でリタの頬を狙っていた！

「バックハンドブロー！？」

リタは足払いを避けたことでまだ地に足がついていない……！

「追い打ちだ……！ 逃げ切れんぞ……！」

チツ、とリタが舌打ちをする音が聞こえた。

リタは迫り来る手の甲を左腕でガードする！

ばしいっ！

二人のA Eがぶつかりあい、接触面から光が弾けた。

よく今の奇襲に反応できたものだ俺は感心した。

だが！

弥生さんの回転はまだ止まっていない！

ぐるんっ！

左の手の甲を振り抜くと、更に勢いを増して真下から右の掌底をリタのあごに向けて繰り出す！

ずがあんっ！

「あぐっ！」

流石にそれに反応することはできずリタの体が上空に吹っ飛んだ！

「足払い、裏拳、掌底の三連コンボか。無駄のない動きだな」と八神。

リタの体は宙を泳いでいく。クリーンヒットしたせいで脳が激しく揺れているはずだ。

あのままじゃ追撃にあうぞ……！

事実、弥生さんがリタの落下地点を予測して距離を詰める！

だが俺の心配をよそに、リタはまるで何事もなかったように上空でくるっした後転して体勢を立て直し地面に着地した。

うーむ……。リタの奴……。馬鹿みたいな打たれ強さだ……。

リタを追って間合いを詰めていた弥生さんだが意外に早く彼女が体勢を立て直したことに驚き、ブレーキをかける。

だがつけた勢いは殺しきれない。

追撃をかけてきていた弥生さんにリタがカウンター気味に右ストリートを放つ。

「ふっ！」

ぎゅるおん！

リタの右腕を風が巻き込むように唸る！

「くっ！」

リタの右拳を左腕でいなそうとした弥生さんだったが剛力をいなし切れず弾くことに留まる。

ぱあんっ、と快音が響いて閃光が眼を瞬かせた。

さらに追撃をかけるべくリタが左拳を放つ！

轟ッ！

リタの一撃は重い。一発でも受けてしまえばその衝撃で行動が止まり、ラッシュへと巻き込まれてしまう。

相手にガードされたって構わない。とにかく押せ押せで自分のペ

―スへと持っていく。

それがリタの強み！

一度勢いがつくともう止められない。あいつの性格がよく分かる戦い方だ。

しかし、その二撃目を弥生さんはリタの左手首を左手で掴み、舞うように回転してリタの背後に回る！そして掴んだリタの左肘に右の掌を当てた。その回転によってリタの腕がねじれ、自然とリタの体が前かがみになる。

「一教……！合気道技だ！まずいぞ、リタ！」

俺は思わず口に出していた。

このままではリタは地面に組み伏せられてしまう。そうなってしまつてはまず次の一撃は避けられないだろう。

だが俺の心配をよそに、危険を感じ取ったリタは地面に叩きつけられる前に自ら大地を踏みしめていた足を離して前転、腕のねじれを直すではないか……！そのおかげでまた弥生さんと対峙する格好になる！

「！？」

これには弥生さんの顔に驚愕の色が広がる。

「なんて馬鹿げた身体能力だ……」

八神も感心した様子。

やはりリタの一度ついた勢いは止まらない。

左手首を掴まれていることなど関係なくぐつと左拳を振りかぶる！

リタの左手首を掴んでいた弥生さんの体がそのままリタに引きよせられる。そして左手首を掴まれたままリタは弥生さんの顔面に左ストレートを放った！

慌てて右腕でガードを上げる弥生さん。

ずがぁん！

しかしリタの左ストレートは弥生さんのガードを弾き飛ばしておでこに直撃していた！

弥生さんは吹き飛ばされながらも体を自ら横に回転させて少しでも衝撃を減らす。

そして回転が止まると同時に再び構えに戻っている。

はらはらと、弥生さんの周りで木の葉が地面に落ちる。

再び間合いが開いて睨み合う。

まだ互いに相手の実力を計っているのか二人は目まぐるしく思考しているようだった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の15 - 2

私は相手の想像以上の力量に驚いていた。

戦闘に関しては私も自信がある。

それは悼矢さまの足手まといにならないよう鍛錬してきた努力への絶対的自信。

……なんて怪力……。止めようと思っても止められないなんて……。あれは力任せに振るっているだけの拳ではありませんね。インパクト時に最良の状態の拳を当てているみたいです。恐ろしいのはそれを自然体で把握していること……。

生まれ持った戦いの才能。

その才能に私は嫉妬さえ感じてしまう。

それに加えてあの度胸と大胆さは……。

流石はアイデア界で勇猛に名高きルクライル家……。まさか人間を敵視、毛嫌いしている名家の彼女が悼矢さまと契約しているなんて……！

……強敵、ですね……。

弥生とかいったっけ、こいつ……。

半端な攻撃じゃ通用しない。いなされて反撃に繋がられるのがオチね……。

かなり練られた型があるみたい……。

厄介、だわ。マニュアル化されていると言ってもいいこの戦い方。特に相手の攻撃に合わせて手管を変えるのは並外れた思考力と反射神経がなければ意味がない。この事からも弥生が分析思考型の戦闘タイプだということが分かる。戦いの場の雰囲気を感じ取り、直感・閃きで判断する私とは真逆の位置にある戦い方ね……。

マニュアルの弱点は予期せぬ事態だけど……。弥生の場合、かなり細部まで作り込まれているような感覚を受けるわ。

完璧に練られた隙の無い戦いのマニュアル。

……まるで難攻不落の城じゃない……。

私はどんな攻撃を仕掛けても返されるような……そんな感覚を相手に覚えていた。

こんなに攻めあぐねる相手は久しぶりだわ……。

じりじりと双方の間合いが詰まる。

「しかし！ 負けるわけにはいきません！」

「だからって負けるわけにはいかないのよ！」

同時に地面を蹴り二人の間合いが零になる！

カアカア……。

日も暮れ始めた夕方。

俺は縁側に座って呆れながら二人を見ていた。

「はあはあ……」

「ハアハア……」

満身創痍、疲労困憊になりながらもリタと弥生さんは対峙し続けていた。

双方あちこち傷ついて肩で息をしている。

要するに決着がついていないのだった。

本当に力が拮抗する者同士だと決着が付かないらしいが……。

お前らは決着が着かず千日戦い続けるという黄金聖闘士か？ 最後は二人して消滅するのか？

しらたまは決着がつくのを待てなかったのかとつくにどこかへふらりと行ってしまった。

それともどちらが勝つか終局まで読みきったのか。

「なあ……もう暗くなるしここで終わりにしないか」

と提案してみるが、

「あんた、なかなかやるじゃない」

「貴女こそ。正直ここまでやれると思っていませんでしたよ」

聞いちゃいねーや。

二人は構えたままふっふつふと不気味に笑いあっている。

なんだか川原で殴り合ったライバル同士が意気投合したような雰囲気だ。このまま終わってくれればいいのに……。

「きづなちゃん！　夕ご飯できたよー！　食べていくよねー！？」

不意にリビングからこよりの声が飛んでくる。

「ああ。すまないな、こより。有難く呼ばれよう」と食卓に向かう八神。

こよりと八神の奴は妙に仲良くなってるし……。

「うむ。これは実に美味しいな。こよりは料理が得意なんだな」

「えへへー。おいしいだけじゃなくて健康にもいいんだよー。それ玄米使ってるんだからー」

おい八神、そのポジションは俺の特等席だぞ。

ん？　っーか、あれ？　俺のご飯は？

あつちはあつちで団欒していて、こっちはこっちで殺伐と睨み合っている。

そんな相容れない状況に挟まれている俺は深いため息をついた。

そこでボンと優しく肩に手を置かれる。

誰かと思って振り返るとそこにはライオンの姿をしたエーテル、レオがいた。

レオは八神が契約しているエーテルだ。ふさふさのタテガミが夕日にあたり金色に輝いて見える。

どうやら八神の帰りが遅いので探しにきたらしい。

『まあ、元気だせ』とばかりに哀れみの眼をして俺の肩に手をのせているライオン。

俺は余計に哀しくなってしまった。

「こうなったら互いに最高の技で決着をつけるしかないよね」

「そのようですね」

と、そこでついにリタと弥生さんが動きを見せる。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の16 - 1

「はあああああああッ！」

気合一発。リタから大量のエーテル・エネルギーが溢れ出し、彼女の体を赤い光が包み込む！

そして眩い光がリタの右手に収束していきバカでかい大剣を象っていく。

アルデヴァイン。リタの愛剣でその大きさは眼を見張るほどデカい。ニメートルはあるだろう長さにして横幅は四センチほどだろうか。どちらにせよその重量・デカさからして人間には決して扱えることができないような大剣。全体的に装飾されていて、中央には崩れつながつた何語か分からない文字が彫られている。

「ハルチ・ウムチ・ツツチ！ おいでまし、心翼！」

弥生さんがばつと両手で印を結ぶと体からエーテル・エネルギーが噴き出し、緑色の光が彼女を覆う！

そして眩い光が弥生さんの右手に収束していき鋭い大薙刀を象っていく。

それこそが彼女の武器らしい。エーテル化させた長さ二メートル後半はあるつかという大薙刀を頭上でくると回転させると、弥生さんは右脇に柄を挟む。それは薙刀術の構えというよりも棒術の構えに近い。おそらく彼女が自分で考案した構えなのだろう。

「って分析してる場合じゃねえ!？」

お前らストップストップ! 幾らなんでもこんなところでそれはまずいって!」

思わず立ち上がる。

だが俺の言葉など聞く気もなく二人のエネルギー量は膨れあがっていく!

ゴオオオオオオオオオオ……!

二人のエネルギーが中心でぶつかり合って暴風を生み出す!

「ってバーサク状態ですか、お二人さん!？」

どなたかデイスペル! デイスペルを唱えられる方は当機におられますか!？」

「いつくわよ! これが私の最強の一撃!」

リタが上空に跳んだ! いや、跳ぶな! 近所の人に見られたらどうするんだ!

高い……!

片桐家の屋根を越えている。

思わず俺は目線で追いかけて夕焼けを見上げるように頭を後ろにする。

火花と緑の閃光が弾ける！

「……っ！？ 堅いッ……！」

リタの眉が苦しそうに曲がる。途端、緑の羽がその翼を広げた！

それにリタの愛剣が弾き返される！

超重量級の大剣が弾かれ、リタの体が摩く。

まずい……！ 腹ががら空きだ……！

そこへ

「続けて」

舞い散る緑の羽根の中で弥生さんは薙刀を逆手にして両手で持っていた。そして後ろに振りかぶり、思いっきりすくい上げる！

薙刀の半分以上が地中に埋まり、しなりながらぼこぼこ地中を進む！

って、地面！？ 庭がああああああ！

そして薙刀の切っ先が地中から顔を出した瞬間！

割れた地面から光が溢れた！

撃翼・逆三日月ッ！

ドゴオオオオオオオオオオ！

まるで火山が噴火でもしたかのように地中から放出された緑色の奔流と共に薙刀の一閃がリタを襲う！

ジャギイイイイイイイン！

金属同士がぶつかりあう音。

そして地中から溢れ出ていた光の波動が収まり、同時にリタが地面に着地した。

波動に焼かれたのか、しゅううつう、とリタの体から白い煙が上がっている。

弥生さんは逆手で振りぬいていた薙刀をくるりと回転させて順手に持ち替え、リタに切っ先を向ける。

「私の逆三日月を咄嗟に剣で防いだのは素晴らしい反応でした。

しかし、勝負ありましたね」

弥生さんの言葉の通り、リタの手にアルデヴァインはなかった。おそらく先ほどの一撃を防いだ時に弾き飛ばされてしまったのだらう。

俺はとりあえず二人に大きな怪我がなく終わったことに少しほっとする。

その代償として庭があまりにも悲惨な状態になっているが……。

あーあ、どうすんだよ。その亀裂……。

と、その時だった。

ぎゅるん、ぎゅるん、ぎゅるん。

と風を斬る音がして、上空に弾き飛ばされていたらしいあの馬鹿でかいアルデヴァインが片桐家の屋根を突き破って家の中に突っ込んだ。

がしゃあああああーん！

「ぎゃあああああ！ 俺の部屋があああああああああ
！！」

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の16 - 2

俺は真っ青になって叫ぶ。

修繕費いくら！？ 俺のお小遣い何年分！？ いや、それよりも
こよりにSATUGAIされる……！

リタは呆然と自分の右手を見ていた。

「そ、そんな……アルデ・ブレイバーが……」

完封。そう言われても仕方がない。リタが絶対の自信を持っている
必殺技が弥生さんには通用しなかった。

これには流石のリタもショックを隠しきれない様子だ。

俺は中庭に降りてリタの傍まで歩いていく。

地面に女の子座りでへたり込んだまま、眼に涙を溜めて俺を見上
げるリタ。

「うう……トウヤあ……。……どうしよう……。負けちゃった……。
私……。負けちゃった……。」

まったく、負けるとすぐ泣くな……。悔しいのは分かるが……。

もしかしたら唯一、得意分野である戦闘で活躍できないとなると
自分の存在価値が危ぶまれ、不安になってしまうのかもしれない。

「リタ……」

家をこんなにしゃがって説教の一つでもしてやろうと思った俺ではあったが、半べそかいて凹んでいるリタを見、どう声をかけていいか分からなくなってしまう。

「それでは約束通り。悼矢さまは私のものですね。契約を解約して頂きます」

するとリタはぱつと泣くのをやめ、眼を点にしてけろつと言いつつ。

「ヤだ」

「なっ！？ 貴女、約束を忘れたとは言わせませんよ！」

「ヤだ」と能面なまま繰り返す。

「何をわがままな」

「ヤだ」

リタがいきなり俺の腰にがしりと抱きつき顔を腹に押しつけてきた。

「……ヤだ」

そう呟くリタの顔は見えない。

やれやれ、と俺は後頭部を掻く。

まるで駄々っ子だ……。

リタがここまで俺と離れるのを嫌がるとは、正直思ってもいなかった。この一ヶ月、共に命を賭けて戦い、一つ屋根の下で暮らしていたわけだから、俺も多少なりリタに情を感じている。

流石にこれでお別れというのは俺も……ん？

ふと腹に違和感、いや、痛みを覚える。キツく抱きしめてくるっていうか、これはキツすぎやしないか……？

ギチギチギチ……！

「あの……リタさん……。すんげえ苦しいんですけど……離してくれませんか？」

リタが本気で俺にしがみついているので、ちょうど腹が締まっているのだ。

「ヤだ」

それも拒否！？

「いや、マジで離せって……！ 折れる！ 背骨折れるって！ ぎやああああー！」

ギチギチギチギチ！ ゴキッ！

鳴ってはならない音がした。

「と、悼矢さま!？」

口から泡を吹き始めた俺を見て弥生さんが口元を手で覆い顔面蒼白になる。

俺がぱたりと地面に倒れると、リタはすくりと立ち上がって『うーん』と伸びをした。

「あー、スツキリした」

「ご、ご主人様で負けたストレス解消とは……。心配した俺が馬鹿だった……。」

「きゃあ! お気を確かに、悼矢さまっ! 傷は浅いです! い、今すぐ人工呼吸を や、やだ人工呼吸だなんて……。そんな……。私ごときが悼矢さまの唇を……。ぼっ」

手で赤くなつた頬を挟み、くねくねしている弥生さん。

「しかしやるしかありません! でもああっ……。どうしましようっ……。身を清めてくるべきなのでしょう……。!? もし接吻に発情した悼矢さまが私の身体をお求めになられたら……。! ああいけません、やめてくださいまし悼矢さまっ! こ、こんなところで……。! 焦らずとも私は身も心も悼矢さまに捧げて……。ああ、やだ恥ずかしいです……。!」

俺を忘れて妄想旅行しちゃってる弥生さん。

助ける気あんのか、あんた……。

弥生さんの口から出てきた妄想にリタが顔を赤くして迫る。

「な、何考えてるのよ！？ あんたが治療しなくていいわよ！ ト
ウヤは私の主なんだから私が介抱するわっ！」

リタが俺の右腕を引つ張った。

「悼矢さまにこんなことをしておいて何をおっしゃるのですか！
悼矢さまの治療は私が致しますっ！」

弥生さんが俺の左腕を引つ張る。

「離しなさいよっ！ 私の契約主よ！」

「ですからっ！ 元はと言えば悼矢さまは私の主さまなのですっ！
何度言えば分かるのですか！」

ぐいぐいと腕を引つ張りあう二人。

な、なんでもいいから医者を呼んでくれ……。

「大岡裁きという言葉を知っているか」

見るに見兼ねたのか、そこへ八神がやってきた。その手にはご飯
茶碗とお箸を持ったままで。

「才才才力？」

「裁き？」

リタと弥生さんは二人して顔を見合わせる。

八神はこくりと頷くと、お箸を力チ力チと合わせた。

「息子と取り合う二人の母親がいてな。先に手を放した方が本当の母親、本当に思い遣っている者という話だ」

『！？』

二人は同時に俺から手を放す。いきなり離され支えを失った俺は、がつんと地面に後頭部をぶつける。眼に火花が散り、鈍痛が頭を駆け抜けた。

「くくっ！ くくくっ！」

「だいひょーぶか」

じたばたと痛みにもがいていると、呆れ顔で八神が手を差し伸べてくれる。口に箸を咥えて。

「や、八神……貴女が女神様か……」

「……………。まずいな。重症だ」

八神に手を引いて起こして貰い、肩を借りる。

「こうなったらどちらが悼矢さまを治療するか勝負しなかなければならないようですね…………！」

「どつやらそうみたいね……！」

ゴゴゴゴゴゴ……！

家にあがる前に振り返ってみれば、再び対峙している二人。

もう止めるのもアホらしい……。

俺は今日何度目か分からないため息を吐いた。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の17 - 1

しばらくの後、俺と弥生さんは客間に戻っていた。

睨み合っていたリタと弥生さんはこよりの雷で休戦を迎えたのだ。
った。

その鶴の一声がなければ未だに二人は戦っていたに違いない。

負けたショックもあつてかりたはあれから自分の部屋にこもりっぱなしだ。きつと不貞寝でもしているのだろう。

弥生さんは赤い顔で眼を伏せ、ちらちらと上目遣いにこちらの様子が伺っている。

「で、ではその約束通り、私と……け、結婚　ではなくて契約を……」

その眼差しはこれから起こる事に期待している様子……なんだが……。

「言っておきますけど俺はそんな約束した覚えはないですからね」

そうである。そもそも勝った方が俺のエーテルだとかいう話はリタと弥生さんが勝手にヒートアップした結果であつて、俺の望んだところではない。

俺の言葉を聞いて弥生さんは俯き、拳をぎゅっと握った。

「……………。そうですね……。そんなに私のことがお気に召しませんか……………」

俯き、声を、肩を震わせ始める。

ポツリと、雫が彼女の足に垂れ落ちた。

「あ、いや嫌いだとか好きだとかいう問題じゃなくてですね？」

俺が弥生さんとの契約を洩る理由がある。

それは俺のA E容量の問題である。

何もエーテル使いは好きな数だけエーテルと契約ができるというわけではない。

当然、そこには限界があるのだ。

例えば俺のA E容量が一 エネルギーポイント E P あつたとしてしよう。この容量にあるA Eの分だけ俺はエーテル・カードが使用できるわけだ。要するにA E容量はゲームでいうところの最大M Pみたいなものと考えて貰えれば分かりやすいだろうか。

しかし、エーテルとの契約の場合、A E容量そのものを削ることになる。A Eを使用して契約が成立するのではない、A E容量の器を幾分か占拠されるのだ。

俺は既にリタと契約している。リタが俺のA E容量から二 E P ほど占拠していたでしょう。そうすると今の俺のA E容量は八 E P ということになる。

本来、消費したAEは休息や睡眠をとることで回復するのだが、契約で削られた分はいくら休息や睡眠をとったところで回復しない。つまりAE容量が一　EPに戻らず八　EPが最高値になる。契約を解約しない限り、だ。

そこから更に弥生さんと契約するとなると、弥生さんもリタと同じAE容量二　EPを占拠するとしても、俺のAE容量は六　EP。戦闘時はこの六　EPでエーテル・カードをやりくりしていかなければならない。ゲーム感覚で考えて最大MP四割カットのデバフ。最初のー　EPに比べると、かなりキツいことになる。

当然、これはでたらめな数値であり、本来はもっと複雑だ。俺が今、どれだけのAE容量を持っているのか、その中でリタが何%を占めているのかはAESSに出向いて調べて貰わないと分からないことだろう。

スカ　ターみたくピピピツと数値が出せれば楽なのだが。実際はものの見事に素っ裸にされ、体の部分という部分に計器類を貼り巡らせ、うん時間もその状態で寝かされることになるらしい。娯楽になるようなものも持ち込めないの、暇で暇でしょーがない上に、終わった後は何時間も同じ体勢でいたせいであちこちが痛くなる、とは河上さんの談だ。そんなことを聞いては調べる気も起らず、今の今までAE容量がいくらか分からないままやりくりしているわけだが……。

弥生さんはずっと指で眼をぬぐった。きらり、と光るものが落ちる。

「……いえ、契約は悼矢さまのお気持ちもおありでしょうし強制す

るつもりはありません……。

リタさんがいる今。私の役目は終えたも同然ですし……」

その哀しそうな眼に胸が痛む。

「弥生……さん……」

参る。なんだか非常に哀れに思えてきた。

「しかし私の心はやはり悼矢さまにあります。ご迷惑かと存じますが、この家でしばらくの間、住まわせてはもらえませんか」

言つとすと、座布団から正座のまま下がり、三つ指をつく。そして身を折り、頭を下げた。

「……どうか……!」

いわゆる土下座というものだった。

真摯だ。これほどまでに純粋な想いを俺は生まれてこの方、ぶつけられた記憶が無い。

「住まわせてあげたいのはやまやまなんだが、うちにはこれ以上居候を増やす余裕なんて……」

そうだ。どちらかというとA E容量なんかより、金銭的問題の方が大きい。お金がなければ何もできない、お金こそ全てだ、と世界から人を見放すような突き放すようなことこそ言わないが、食っていくためにはお金が必要なのもまた事実。

特に無料飯食らいを抱えている片桐家の財政は赤字路線をまっしぐら。終着駅に辿り着くのもそう遠くはない緊迫ぶり。

「裁縫、しつけ、炊事、洗濯、掃除……！ 女のさしすせそは心得ております……！ どこかのエーテルよりはよっぽど役に立つと自負しています……！」

『役に立たなくて悪かったわね！ どうせ家事なんてできないわよ！ どうせ戦うのが趣味だわよ！』

二階からリタの大声が聞こえてくる。

リタのやつすんげえ地獄耳……。つか、聞いてんのかよ。

「それに私の能力は特殊でしてエーテルには効果は無いに等しいかも知れませんが、対禍魂に関してはこの上なく役に立つかと……！」

ここぞとばかりに自分を売りに出してくる弥生さん。

対禍魂には効果が抜群というところ……あれだろうか。ゾンビ系のモンスターにレイズすると瞬殺みたいな感じなのだろうか。

……いかな。ここ最近リタに付き合わされてゲームばっかしてたせいか、ゲーム脳になりつつある。

ちなみに、リタもエーテルの端くれなのだから何らかの特殊な能力を持っているようだが“使わない”らしい。使えないのではなく、“使わない”という口ぶりが気になるところだが、今のところ使わなければならないような窮地に追い込まれる場面も少なかったので

俺は触れずにいた。能力の話をしようとするとことさら嫌そうな顔をして話題を変えようとするのだ。

腕を組み、うーむと悩む。

弥生さんの想いには応えたい。が、現実的に考えるとどうにもこうにも首が回らない。

そんな俺の渋い表情を読み取ったのか。

弥生さんはすくりと立ち上がった。

「無理を言って申し訳ありませんでした……。いきなり押しかけて困らせてしまいましたね……」

大きな風呂敷を首にかけ背負い、笠を頭に乗せる。

俺は何も言えない。

ただ座ったまま腕を組んでいる。

「……………忘れるところでした。悼矢さまのお父様からこのようなものをお預かりしています」と弥生さんがごそごそと着物の袖に手を入れる。

そして取り出したのは一枚のエーテル・カードだった。

「司さまは鍵だとおっしゃっていましたが……。そのエーテル・カードでエーテル使いとしての準備が整うと。リタさんを助けてあげて下さいまし」

動こうとしない俺の手を掴むと弥生さんは俺にエーテル・カードを握らせた。

鍵と言われて真っ先に思いつくのはもちろん親父の部屋にあるアレである。

「まさか……金庫の……」

俺の手を両手で握ったまま、

「私にとって契約主は悼矢さま……。あなただけです……。悼矢さまのことは生涯忘れません……。悼矢さまも私のような馬鹿なエーテルがいたくらいには頭の片隅において頂けたら……。嬉しいです」

そう言って微笑する弥生さん。

「や……よい……さん……」

辛い、笑顔だった。

「あ……」と俺が何かを言う前に、いや言わせぬように、

「御免！」

きらきらと零れ落ちる涙を振り切って、部屋から走って出て行ってしまった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の17・2

「弥生さん！」と思わず立ち上がってしまう。

たったった、と廊下を駆けていく音が小さくなる。

だが追いかけるはしない。追いかけたところで掛ける言葉もない。

『あれ……、お帰りですか？』

ふすまの向こう、廊下からこよりの声が聞こえてくる。

『はい、こよりさま。この辺でお暇させて頂きます』

『そう……ですか……』

『どうかご達者で……！ 悼矢さまをよろしくお願いします……！』

ピシヤリと玄関の扉が閉まる音がした。

なんだよ、これ……。こうするしかねーのかよ……。

後味が悪い。

俺はどかり、とその場に腰をおろした。

手にあるのは彼女が残していったエーテル・カード。

しばらくそうして座っていると部屋の扉が開いた。

こよりだった。

こよりはあぐらかく俺の前に無言で正座した。

「なんだよ……」

ぺち！

額を叩かれた。

「なんだよ、じゃないよ。泣いてたよ、和泉さん」

どこか怒っているようなこよりの眼。

知っている。そんなことは分かっている。

「いいじゃない。住むくらい」

「聞いてたのか」

「聞いてた」

俺は顔を伏せた。

「うちにそんな余裕はない」

「でも元気はある。それがうちの家柄じゃないの」

俺は顔をあげた。

こよりは笑っていた。

ぱちん、と胸の前で手を叩く。

「はい、お説教はおしまい。」

早く和泉さんを追いかけてあげて」

霧が晴れていくようだった。

やはりあれでお別れというのは夢見が悪い。

「ああ……！　ああ！」

俺は立つや、否や、ふすまを開けるのもめんどくさく蹴り破って廊下に出た。

「って、こらああああ！」

後ろからこよりが怒りに叫んでいるが構いやしない。

俺はすぐさま、靴を履き外へと飛び出す！

中庭を突っ切り、家の門を開け、左右を見回す。

だが既に弥生さんの姿はない。

京都……って方角的にはどっちだっけ……！？

と、数メートル走って俺はブレーキをかけた。

ふとした違和感。

とあるものが眼に入っただような気がして振り返る。

家の門のすぐ横。

その壁に背を預け。

三角座りして膝に顔をうずめ。

じっとしている弥生さんの姿がそこにはあった。

しゃがみ込んでいたせいで、さっきは気づかなかったらしい。

俺はほっとして弥生さんの前で足を曲げる。

そして彼女の手をとった。

すると彼女は顔をあげ、やっと俺に気づいたようだった。

その頬には涙が流れている。

「……と、悼矢さま……！？　どうして……あれ……！？」

ぱっと立ち上がると、袖で涙を拭う弥生さん。

「す、すいません……！　決して未練がましく離れがたい想いに囚われていたわけではなく……！」

良かった……。

「これはそのなんと言いますか」

俺は彼女を抱き寄せた。

とさり、と胸に彼女の重みが伝わってくる。

いきなりの俺の行動に俺の胸で眼を丸くしている弥生さん。

「と、悼矢さま……？」

「弥生さん、悪い。俺が間違ってた。虫の良いことを言ってるかもしれないが、俺に力を貸してくれ」

「悼矢……さま……」

弥生さんが幸せそうな顔で俺の背中に手を回す。

「悼矢さま……！ 悼矢さま……！」

感情が溢れるように、胸に顔をうずめ、強く抱き返してくる弥生さん。

じー。

ふとねめつけるような視線を感じ、俺は家の方に眼をやった。

そして彼女に気づいて俺は思わずびくりと体が震えてしまう。

片桐家の二階。

部屋の窓からリタがこちらをじと眼で睨んでいるのだった。

「けっ」

面白くなさそうな顔をしている。

「悼矢さまっ！ 悼矢さまっ！」

それを知ってか知らずか、幸せそうに頬を俺の胸にこすりつける弥生さん。

「いつまでやってんのよ！」

リタが投げた目覚まし時計が俺の頭にぶつかった。

「うぐー！？」

「と、悼矢さま！？ 敵！？ おのれっ！」

辺りを見回し、弥生さんはリタに気づいた。

「リタさん！ 何をなさるのですか！」

「ふん」と腕を組むリタ。

「悔しいのなら貴女も多少は素直になったらどうなのです！」

言われてリタは顔を紅潮させ、窓から身を乗りだす。

「な、なによ！ 私は別にトウヤのことそんな風には思っていないもの！ 相棒よ、相棒！ ただのパートナーなの！」

「何を世迷い言をおっしゃるのですか！ 悼矢さまのパートナーは私です！」

ぎゃーぎゃー！

道ばたと窓で口論を始める二人。

「近所迷惑なことこの上ない。」

『わんわんわんっ！』

二人の口論につられるようにどこかで犬が吼え始める。

これから騒がしくなりそうだと俺は地に倒れたまま思っただった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の18

俺は金庫の前に立ち、エーテル・カードを差し込んだ。

「エーテル・カード発動！」

するとカチリと音がして扉が開くではないか。

扉を開け、中に入っているものを確認する。はたして中に入っていたのはカードフォルスターだった。

そのフォルスターの中を見て思わず俺は驚く。

そこには数十枚にも及ぶエーテル・カードが入っていたのだった。

た、宝の山！？ これをAESSに売ればか、金が……生活費が

……！

「悼矢さま、中に手紙が」

「お、ありがとう。なになに」

これを見ているということは弥生から話は聞いたはずだ。そのフォルスターは俺が昔から使用していたものだ。俺には必要なくなったからな。有難く使えバカ息子。

あのクソ親父……。弥生さんと契約した時のことを考えて用意していたのか。

初めて親父が役に立った……。

手紙にはまだ続きがあった。

追伸 お前は禍魂やエーテル使いから着け狙われることになるだろう、俺の子だからな。死にたくなければ現実を受け入れて精進することだ。こよりのことを頼む。

もう既に狙われまくってます、お父様。

あー、あと彼女できたか？ お前はたしか桧流間んところの美姫ちゃ

「うるせーよ！」

くしゃくしゃに丸めて手紙を放り投げた。

俺はフォルスターを腰に巻くと姿見の前に立つ。

お、これ今持つてるのより好きかも。

「なかなか真っ当に見えるじゃないか」

声がした方を見ると開いた扉を背にして、腕を組み八神が立っていた。

「話はまとまったようだな。私はもうそろそろ帰らせてもらっぞ。AESSに顔を出さなければならぬ用件もあるからな」

「なんだか長い時間とらせて悪かったな」

「いや構わない。久しぶりに健康に良い物を食べることもできたしな」

満足そうにお腹をなでる八神。

「言った通り、これらは借りていくぞ」

手に持っていたスーパーの袋を見せる。おそらくその中には本が入っているのだろう。

「ではな」

「おう。また明日、学校でな」

手を背でふりふり八神は廊下を歩いていった。

と、そこで弥生さんは部屋の時計を見た。

「あら、もうこんな時間。私はお風呂の支度をして参りますね」

「ああ、頼むよ」

弥生さんはにこりと微笑むと部屋から出て行く。

俺は手に入れたカードの種類や効果を確認しながら思う。

話は聞いてたけど親父って本当にエーテル使いだっただのか……。

その古いフォルスターと手紙を見てやっと思感が沸いてきた。今ま

では話に聞くだけであつてもしかしたら何かの間違いじゃねえのという疑惑の念があつたが、こんなものを見せられればもはや疑う余地はなくなつた。

このカードを使いながらあの親父が禍魂と戦つていただなんてな……。

ドン。

きづなは机の上にアルバムを放つた。

「……………」

河上治はいつものようににこやかな微笑みを浮かべながらじつとソファに座っている。

そこはAESSが設けている客室であつた。客室といっても豪華なものではなく、その部屋にはソファと低いテーブルといった調度類のみしか置いていない狭い空間であつた。壁に館内終日禁煙と書いた張り紙がある。他にもエーテルとエーテル使いの大きなポスターが張られてある。そのポスターには『あなたもAESSで働こう！』と太い文字がプリントされていた。

河上治は二代前半といった風貌の男だ。身長は一七半ば、銀

縁の眼鏡をかけており、長い前髪が縁にかかっている。その身は紺色のスーツに包まれているため、一見、どこにでもいそうなサラリーマンだが、何を隠そう彼はAESSに所属する一部隊を預かる優秀なエーテル使いである。

対するきづなは向かいのソファに座らず立ったまま腕を組んでいる。片桐家から直接バイクを飛ばしてきたこともあってか、服装は制服のままだ。

ソファに挟まれた机には彼女の好きな炭酸飲料が置かれてあるが、きづなはそれに手をつけようとはしない。

（相変わらず嫌われている感じですねー）

すちやり、と治はレンズとレンズの間、フレームを人差し指で押し上げる。

そしてそのアルバムを手を取った。

ぱらぱらと無言でページをめくり、手の平を写真にかざす。すると写真が違つものを映し出した。それを見た治はアルバムを閉じて再び机に置く。

「言いたいことはあるか」

言われ、治はやれやれとため息を吐いた。

「……………。逆に聞かせて貰いましょうか。」

どうするつもりですか？ この事を悼矢くん？」

きづなの細い眉がぴくりと動く。

「言えるはずが……ないだろうっ……」

「でしょうね。感謝しますよ、八神くん。これを届けてくれたことも含めて」

苦笑いを浮かべる治。

「悼矢くんが“奇跡の子”と呼ばれる特別な存在だということを知っているのはAESSにもごく少数います。その中で、ここまでの詳細を知っている人間といえば……はてさて、片手で事足りますかね……」

「その中の一人になってしまったわけか……」

きづなはソファの背もたれに腰を預ける。

「説明しろ」

「説明も何も……。ここに書かれてあることで全てですよ。彼は“そういう存在”というだけです」

治は紙コップに入った白湯に口をつけた。

「藤島を捕獲してすぐに片桐がAESSにきて体のことをお前に尋ねただろう」

「ああ、あれは八神くんの差し金でしたか。えらく質問の内容が的

確についていたので戸惑いましたよ」

「なんと答えた」

「『君は人間とエーテルの間に生まれた特殊な体質の人間なんですよ』」

「……………お前、らしいな」

治はにこりと微笑んだ。

「血は争えませんか……………。君は結局、この件に関わってしまったているんですから」

深いため息を吐く治。

きづながやっと治の方を向く。

「ええ、そうです。この件に関わっていたのは当時、イデア界にいた者。つまり、君のお父さんもこの件に関わっていたんですよ」

とんとんと治はテーブルの本を指で叩く。

ぎりっ、ときづなは奥歯を噛んだ。

「君の意志は……………ずっと変わってないんですね」

「……………」

治の言葉にきづなはただ黙っていた。

「知っていますか。幼少期、小学校、中学校、高校、大学、社会を経ると、人一人の知り合いは五　人にも昇ると言われています」

「……それがどうした」

「もちろん、その知り合い五　人にも同じく知り合い五　人がいる。仮にこの波科町に五　万人の人口がいたとしても、街ですれ違うまったく知らない人物が君の知り合いの知り合いである確率は――分の三ということになるんですよ。もちろんこれは単純明快にした計算ですし、この街には五　万人もいませんけどね」

「何が言いたいのかさっぱり分からないが」

治がヤカンから白湯を紙コップに注ぐ。

「世界というのは不思議なものですね。関わりがないようで色んなところで関係が繋がっている。私の父、八神くんのお父さん、片桐くんのお父さん……」

（そして……ルクライル家……）

治はくいつと眼鏡を指で押し上げた。電灯の光がレンズに反射する。

「世代は代わり、今もこうして関係がある」

「フン。感傷に浸っている暇があるのなら仕事をするんだな」

きづなはソファから腰を放すとそのまま部屋の扉へと向かった。

「八神くん」

不意に治が呼び止める。

「もし……“穴”が見つかったら……君はどうしますか……？」

「……………この世界に未練など無い」

そうとだけ答えてきづなは部屋を出て行った。

「愚問、でしたか……。五　人が哀しみますね」

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の19 - 1

きづなが客室から出て二階ロビーにきたところだった。

「あら、きづなちゃん！ おこん！」

見知った人物を見かけた美姫はすぐに声をかけた。

「美姫……か……」

きづなは声の主が美姫だと分かったと、足を止めた。

（ありやう……。なんか元気ないぞう）

美姫はすぐにきづなの無表情から感情を読み取った。

美姫はすでに私服に着替えており、制服のインナーだったピンクのパーカー、白いミニのスカートになっている。

「んー？ 上の階に用事あったの？」

と、両手をパーカーのポケットに突っ込んだままきづなの向こうにある階段を見る。

「ああ、ちょっとな。もう用件は済んだが」

そしてきづなの手に持っている紙を見て、彼女がここへ何しに来たのかを理解する。

「お、換金。一緒にいきましょ」

美姫はスカートのポケットから紙を取り出すと、ひらひらと見せて用事が同じであることを知らせる。

AESSの二階には食堂と談話室、斡旋所、換金所、エーテル・カードの販売所、修理所がある。二階はAESSに属していない野良のエーテル使いが最も訪れることのある階層なのだった。

換金所へと続く道すがら、

「誰を捕まえたの？」

美姫は隣を歩くきづなに尋ねた。

「ああ……。小物さ。宝石店を襲った奴だ。」

AESSの人間を誘拐したエーテル使いを確保したかったが、誰かに先を越された。良い値だったんだがな」

「ふーん」

「美姫は誰を狩った」

「てへへ　誘拐した奴」

ぱつと美姫を見て立ち止まるきづな。

「……つく！　お前だったのか……！　獲物をとったのは……！」

「はいはい、睨まない、睨まない。こつちだつて稼がなきゃいけないの分かってんでしょー。たまには師匠に花を持たせてちょうだいよ」

美姫は苦笑いして手をひらひらと振る。

「誰が師匠だ！」

「何言つてるのよー。独学の荒削りだったきづなちゃんにちゃんとしたエーテル・エネルギーの使い方を教えたのも、戦い方を教えたのも私じゃないのさ」

「教えてもらっただけだ！」

「一般的にそういうのを師匠って言つたのよ」

手をひらひら振って歩きだす。

「くうー」と悔しそうに唸るきづな。

だがすぐに平静を取り戻し、彼女の後を追う。

「……お前、片桐と知り合いだったんだな」

「まあねー。家近かったし親が仲良くてねー。昔は美姫ねーちゃん、美姫ねーちゃんってひよこみたいにくつついてきてたっけ」

昔を思い出すように顎に指をそえ目線を上にする。

そうして前を歩く彼女にきづなは呼びかけた。

「美姫」

「なーにー？」

「……“奇跡の子”を……知っているか？」

美姫の肩がぴくりと震え、立ち止まる。

「……。「奇跡の子」がどうかした？」

振り返らず問い返す。

「……いや……」と口ごもるきづな。

美姫はぼりぼりと頭を掻いてから、やっと振り返った。

彼女の素振りですぐ美姫は気づいたのだ。きづなが知ってしまったのだと。

“奇跡の子”がただ特異体質という羨望の眼差しで見られる存在ではないことを。

だからこそきづなから次の言葉が出てこない。

だからこそAESSは“奇跡の子”をひた隠しにする。

「……。あー、そっかー。」

知っちゃったんだ。“奇跡の子”が一体何なのか」

視線を外していきづなが顔をあげる。

眼があうと美姫はにこつと笑った。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の19 - 2

「美姫……お前……。いつから……」

「小学生の時かなー？ ケツコー衝撃受けた記憶があるわねー。どう扱えばいいか分からなくなったりして。暴走されても困るしねー」

あっはっは、と笑う美姫。

「くっ……！」

そんなあっけらかんとしている美姫に対してきづなの中で一気に怒りが込みあげる。

気づけば美姫の胸倉をきづなは掴みあげていた。

「なぜ貴様がエーテル使いだと教えてやらない……！ あいつはずっと悩んでるんだぞ……！ 分かっているのか！」

言われ美姫の顔から笑みが消え、俯きぐつと唇を噛んだ。何かに耐えるように拳を握り、震わせる。

「昔馴染みなのだろ……！ お前がエーテル使いだと知ればあいつがどれだけ頼りに」

キッ、と顔をあげると美姫はきづなの手を痛烈に払った。

「分かってるわよ……！」

急に出した美姫の大声にきづなは口を止める。

「そんなこと……言われなくても分かってるわよ……！」

トーンを低くして美姫が呟くように言う。

強く握った拳が血の気をなくして白くなっている。

きづなからは前髪で美姫がどんな表情をしているのか見えない。
いきなりの豹変に胸倉を掴んでいたきづなの手が緩む。

「……美……姫？」

「なーんちゃって」

と、顔をあげた美姫の表情はいつも通りちゃらけていた。そして、
片手を顎に添えるとぽんぽんときづなの肩にもう片方の手を置く。

「んー、なんて言えばいいのかなー。私と悼矢くんって姉弟みたいな
なもんだからねー。」

あんまり近づきすぎると、うつとおしがられるのよー」

彼女は困ったような表情でそう言った。

「それはお前の性格が起因しているんじゃないのか……」

「なあーん！？ なにそれー！ こんなぷりちーな私のどこがうつ
とおしいのよー！」

「そついうところだ」

にべも無く言われ、むー、と口を膨らませる。

「中学生に上がる時なんてほんとひどかったんだからー。親が傍にいなかった分、反抗期の影響が全部近くににいる私にきちゃってさー。

あれだけ嫌われたらそりゃ私も女子校選ぶちゅーねん！ あの朴念仁め！」

美姫は『うがあー！』と吼えて、近くにあったゴミ箱を蹴り倒した。

「まあ、悼矢くんってずっと反抗期みたいなところあるし、あの頃に比べればちよつとは大人になってるみたいだけど……。私には分かる！ 親の心、子知らずという言葉の意味が！」

「……なんだか知らんが、色々と苦勞をしたようだな……」

散らばったゴミをぐしぐしと踏みつけていた美姫は冷静さを取り戻すと、ふうと深い息を吐いた。

（タイミングが必要なよ。また嫌われるかもってと思うと躊躇して当たり前じゃない……）

「悼矢くんのはきはぎづなちゃんに任せるわ。今はもう悼矢くんも私よりきづなちゃんを頼りにしているでしょうし」

後は若い者に任せましょう、とばかりにひらひらと手を振る。

「おい、美姫……！ 何を勝手な……！」

「ま、こんなこと言わなくてもきづなちゃんのことだから自分から悼矢くんの世話焼いてたと思うけどね！。

だいぶ前に三階で悼矢くんと特訓してるの見ちゃったし。私が出る幕は無さそうかな、ぐふふふ」

口に手をあていやらしい眼で笑う。

「み、美姫い！」

きづなは顔を紅潮させて怒鳴った。

「後でカフェ行こうよ、カフェ。悼矢くんとこの馴れ初めを聞かせて貰おうじゃない。ジューズくらい師匠が奢ってあげるよ？」

「~~~~っ！ ……帰る……！」

「なあーん！？ ちょっとー！ 換金どうするのよー！？」

「フン……！」

きづなはすたすたと階段に向かって歩いて行ってしまふ。

「ありやりや。怒らしちゃったか」

一人になった美姫はきづながさっき言った言葉を反芻していた。

『なぜ貴様がエーテル使いだと教えてやらない……！ あいつはずっと悩んでるんだぞ……！ 分かっているのか！』

(……あんなに熱くなっちゃって……。妬けるじゃないのさ……。意地悪の一つも言いたくなるってもんでしょ)

美姫は悪戯が成功したようにちろりと舌を出した。

翌朝。

ゆさゆさ……ゆさゆさ……。

「て下さい、悼矢さま。朝ですよ」

優しく緩やかに体が揺すられ、俺は眼を覚ました。

「うーん、こより、もう朝か？　ってゆーかなんか暗くないか？」

「あらまあ、悼矢さま寝ぼけていらっしやいますね」

くすくすと笑う声。

言われ起こしに来た相手の顔をよく見てみる。

「弥生さん！？」

それは誰であろうかな紛うことなき弥生さんだった。赤と白の袴の上に、割烹着を着ており、その姿は京の若奥様といった感じた。

「おはようございます悼矢さま。

そんな他人行儀な呼び方はやめてくださいまし。呼び捨てで結構ですよ」

「はあーくしよい！　うう……寒い……」

見上げると穴の開いた天井。

昨日、アルデヴアインの空襲でできた穴から外の寒い空気が流れ込んでいた。

「あらあら。大丈夫ですか？」

弥生さんは俺の手をとって『はあ』と暖かい吐息をかけ摺り合わせしてくれる。

その優しさに心まで暖くなりそうだ。だが激しく恥ずかしい。

「い、今何時ですか？」

俺はその照れを隠すように彼女に問うた。

「五時半です」

にこにこ笑顔でのたまう弥生さん。

は？

訳が分からず阿呆のようにぼかんとしてしまう。

「五時半です」

にこにこ。

なぜ二回言うんですか、なぜ二回言うんですか。

「五時半！？　まだ三時間は寝れるじゃないですか！」

「めっ！」

ぺちつと額を叩かれた。

「何をおっしゃるのですか、悼矢さま。朝は早く起き、夜は早く寝る。先人たちはみなそうして健康を保ってきたのですよ？」

と人差し指を立て、子供に諭すように言う。

「あ、いや、しかしですね……」

「しかしもしかかしもありませんっ！　早く着替えて下さいまし！」
と言うと、ばばっと俺の寝間着変わりのタンクトップをはぎ取る。

だが

「いゃん！」

俺の上半身を見て弥生さんは頬を赤らめ目を覆った。

「と、ととと、殿方のむ、胸板……！　は、はやく着替えて下さい、悼矢さま！　目のやり場に困ります……！」

自分で脱がしといて何言っただ、この人は。

仕方ないので俺は渋々と箆笥から黒のＴシャツを着込んだ。

すると彼女はときどきと高鳴っていたらしい胸を押さえながらほうと息を吐く。

「朝から刺激的なものを見せないで下さいまし……」と弥生さんがこちらに振り返る。

すると、

「ひきつ！」と顔を強ばらせて固まってしまった。

「今度はなんですか？」

弥生さんの視線を追うとそこには男性特有の朝があった。

ズボンを履いているとはいえ、我が息子様がその存在を主張しまくっていたのだ。

「ぬお!？」

俺は慌ててその部分を手で隠す。だが時は既に遅かったらしい。

弥生さんはぶくぶくと泡を吹いて背中からひっくり返ってしまう。

「や、弥生さん!？　しっかり!？」

「と、とと殿方の殿方が!」

目を×にして『殿方殿方』とうわごとのように口にする弥生さん。

どうやらこっち方面にはとんと免疫が無いらしい。よくこんな夜

伽どうこう言えたものである。

「弥生さーん！ 大丈夫ですか！？ 聞こえてますか！？」

「ハッ！？ 亀の頭が！？」

不穏なことを言いつつ目を覚ます弥生さん。

「だ、大丈夫です、悼矢さま……。違うのです……。少しばかり驚いただけです……」

「はあ……。大丈夫ならなによりですが……」 「はい。悼矢さま！ わたしめも知識は得ております！ 及ばずながら悼矢さまの殿方を鎮めて……ごくり！」

弥生さんが喉を鳴らして唾を嚥下する。

「つてちよつと！？」

「だ、大丈夫です……！ 経験はありませんが奉仕の心と悼矢さまへの愛は十二分にあります……！」 と震える手で弥生さんが俺のチャックに手をかける。

「んぎゃああ！？ なにこの展開い！？」

「あ、暴れないでくださいまし！ うまくできないではありませんか！」

「できなくていいですって！」

と、その時だった。

ドギャン！

壊れんばかりに扉が開く。

「っるさいのよ朝っぱらから！ 何時だと思ってるのよ、トウヤ！」
扉を開けたのは誰であろうかなリタであった。

リタは扉を開けはなつたまま俺の上に覆い被さっている弥生さんを見、半分脱がされかけている俺のズボンを見た。

「……………」

「……………」

「……………」

三人が三人とも固まつたまま嫌な沈黙と空気だけが流れる。

俺の息子もしおしおと身を屈めるほどの緊張感が走っていた。

やべえぞ！ なにがやべえって、こんな状況を見たら絶対にリタが誤解するじゃねーか！ どうする！？ どうするってそりやおめー俺は悪くないんだから堂々と事の顛末を話せばいいだけじゃないか！

大丈夫だ！ ちゃんと話せば理解してくれる！ ああ、そうさ！
フラグを自分で立てまくってるような気がするけど気にしちゃいけない！ いくら緒突っ娘でリアル脳筋で口より先に大剣ぶん回す

リタでも話せばなんとか

「死ねええええええッ!!」

リタの体がいつもの赤いドレスに包まれ、振りあげた両手にはもちろんアルデヴァイン伯爵おはようございますうう!

「ってリタさあんツ!? 話す前から激烈戦闘モードじゃないっすかあ!？」

「亜流出ええ! 武霊威罵ああ!!」

この日、にわたりの鳴き声のかわりに爆発音が波科町の朝を告げたという。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の20

「まったくな考えてるの二人とも！　また部屋をあんなにしちゃって！　なんでもかんでもすぐに喧嘩するのはやめてよ！　昨日は昨日で庭をめちゃくちゃにするし！　ちゃんとあの穴埋めておいてよね！？」

『はい、すみません』

「いつまでも子供なんだから！」

小五の妹に子供だと言われるこのふがいなさ……。いや実際まだガキなんだけどさ……。

俺はちらりと横で同じく正座をさせられているリタを見た。

眼が合うとリタは『ふんっ』と顔を反らしてしまった。

こおんのアマアア！？　ほんと可愛くねえ！？

怒りに打ち震えながら救いを求めて弥生さんへと視線を向ける。

が弥生さんはあらぬ方へと眼を反らし、脂汗をかきながらぽりぽりと頬を掻いていた。

今にも口笛を吹きそうな素振りである。

孤立無援、孤軍奮闘とはまさにこのことをいうのだろう。

「ちゃんと聞けよ、おい」

ギロリとこより様の眼が鋭く据わる。

『ひいつ!?!』

かくしてこより様のお小言は二時間続いたのであった。

俺はふらふらと学食を目指して学校の廊下を歩いていた。

なぜこれほどまでにへばっているのかももう語るまでもないだろう。
もちろん朝の惨劇に疲弊しきっているためだ。

ちなみに鍊太郎たちは一足先に食堂へ向かった。

だけどもさか親父が俺のエーテルを育ててただなんてな……。

和泉弥生さん。白と赤の袴に身を包んだ和風美人。俺のために鍛鍊を積んだようだ……。なんせリタと対等、いやそれ以上の立ち回りを見せたのだ。きっと血の滲むような毎日であったに違いない。

それもこれも俺のため……ってか……。

弥生さんの熱視線を思い出して、額に脂汗が滲む。

期待されるのは悪くは無い。が、過度の期待となるとプレッシャーにしかないわけ……。特にああいっただ羨望の眼差しというのを受けたことがないだけに俺は彼女に対してどう対応すればいいのか分からないでいた。

今朝、彼女がこよりと二人で仲良く洗濯ものを集めているの俺は見えていた。きっと今も洗濯したものを取り込んだり、掃除したりと精を出して働いていることだろう。

こよりはこよりで『自分の時間が持てるよ』と嬉しそうだし。

どこかで昼寝して壊すだけが取り柄のエーテルとはまるで違うな……。

本人にそんな事を言えばどうなるかは眼に見えているので口が深谷のように裂けても言えないが。

そうして弥生さんのことを考えて歩き、階段へとさしかかった時だ。

前の廊下から美姫先輩が歩いてくるではないか。

「あら悼矢くん。ほんと最近は良く会うわね……。やっぱり赤い運命には逆らえないのかしら」

最後の方を何かぶつぶつ呟いている美姫先輩。いつものように制服の下にパーカーを着ているらしく、後ろ首からフードが飛びだしている。

俺の正直な気持ち。

激しく関わりたくない。

しかも今のこの状態では特にだ。

「もしかしてフラグがたったのかしら。

おめでとう、悼矢くん！ キミは今、美姫先輩ルートに入ってるわよ！」

ペコちゃんのように舌をだしてぐつと親指を立てる美姫先輩。

なんだそのめんどくさそうなシナリオルートは……。全力で願ひ下げしたい。

「ってうわなにそのクマ！？ 顔色も悪いし、精気も欠けてるわよ。徹夜でゲームでもしたの？」

あんと一緒にすんな。

「ああ……美姫先輩……こんばんは」

「こんばんはってまだお昼だけど？」

言われ俺は辺りを見回した。

あ、ありえねえ……。疲労的にはもう夕方だぞ……。

どうやら朝早く起こされたせいもあってか体内時計が狂ってしまっ

ているようだ。

前回と立場が逆になってしまい、半ば放心している俺を見て美姫先輩が目の前で手を振る。

「おーい、生きてるかーい？ ゴムパッチンでもして生きてる実感っていうのを確かめてみる？ でゆわな、でゆわな！ おにいいちやーん！」

生きてるってなんだろう、生きてるってなあに、と美姫先輩は体を揺らす。

「美姫先輩っていつでもテンション高いですね……」。

いやね……昨日、ちょっと色々ありまして」

「色々……！？」

なにやら視線を上にしてもややもやと想像している美姫先輩。

「だ、だめよ、悼矢くん！ 近親相姦なんて！ 確かにこよりは抱き枕にしたいほどカワイイけど！ やわこいほっぺた！ 小さなおてて！ お日様の匂い！ ああん、こより萌え！」

……。ほんとあんたの頭の中はどうなってるんだ。

俺の両肩を掴み、がくがくと揺さぶって俺の妹の愛くるしさを叫ぶ彼女はどうかやら本気で言っているらしかった。

「勘違いしないで下さいよ。妹に手をだすほど飢えちゃいませんっ

て」

「うーん？　じゃあ誰と？」

美姫先輩。あなたはそういう方向でしか考えられないんですか。

「あーもついいです。今から食堂に行くんですけど美姫先輩も一緒にどうですか？」

「いいわねえ。それじゃ、食堂デートといきましょうか」

そう言うとな彼女は振り返り颯爽と駆けだした。

「オホホ！　ほくら捕まえてごらんさーい！」

俺はそんな先輩を放っておいて、ゆっくりと食堂まで歩いていくのだった。

「ひどいわ、悼矢くん。後ろを見たら知らない人しかいないんだもん。

きゃっきゃうふふしながら一人で食堂に入って変な眼で見られたじゃない」

大丈夫です。あなたは常に変な目で見られていると思います。

「美姫先輩が勝手に一人で走ってたんじゃないですか」

今日も今日とて学食のカウンターは戦争状態だった。

もともとは学食は平和な場所であった。しかし、現生徒会長がここを戦場へと変貌させたのである。

要するに経費削減をうたった商品数の減少である。しかも人気商品ほどその品数が少ないという明らかに何らかの意図を感じる仕様。そしてどう考えても外れなメニューを増やしたのだ。

かくして学食戦争は始まりを告げたのだ。品数数が変わった初日、生徒会長は戦場となった食堂を見て大爆笑していたらしい。

あの性格からすれば確かにこれは噂ではなく真実に近い話なのだろう。

とにかくにもその外れメニューの中の一つがハルマゲ井なわけだが……。

「ハルマゲ井一つ！」

元氣良く注文する先輩にぎよっとする周りの生徒たち。

そんな視線を独り占めして渡された井をほくほくと幸せそうな顔で席まで運ぶ美姫先輩。

お怒りのこよりに昼飯抜きを通達された俺も定食を受け取って席に

向かう。……美姫先輩……その丼を見てみんな振り返ってますよ。
どろどろと何が含まれているのか分からないゲル状のタレがかかった丼を前に割り箸を折る。

「いったきまゝす！」と口に運ぼうとして美姫先輩は箸を止めた。

「あ、きづなちゃんだ」

どうやら目敏く美姫先輩が八神を見つけたらしい。

その腕に持っているのはカップラーメンとスナック菓子である。お世辞にも健康的なものと呼べるものではない。

八神はこちらに気がつくところへやってきた。

「邪魔するぞ」

こちらの応えもきかずテーブルの空いている席につく八神。

「あら。いつもは避けるのに珍しい」

言われ八神は眼を閉じ冷静に言葉を放つ。

「不本意だが席がなければ仕方ない」

「八神、お前学食なんて利用するタイプだったのか」

「たまにな」

「おー、おったおった。かつちゃん、つれないやない」

そこで俵先輩の体が止まる。

美姫先輩に気づいたのだ。

美姫先輩は美姫先輩で俵先輩を睨んでいる。

かくして俺たちの昼食は始まった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の21 - 1

うっわぁ、なんだこの雰囲気……。

そこは学食の端にある一角。

その四人がけの真四角の白い枕には俺、八神、美姫先輩、俵先輩の四人が座っていた。

相変わらず美姫先輩と俵先輩はお互いに睨み合っている。

これだけ敵意を剥き出しにするだなんて、この二人の間に何があったんだ。

そんな二人には興味なさそうに、と言うよりも触らないように力ツプラーメンをすすっている八神。

君子危うきには近寄らず、とは言いが……こいつ、この雰囲気よくメシが食えるよな……。

その一角からえも知れぬオーラが漂っているせいか、周りの生徒たちも和やかな食事というわけにはいかないようだった。ではどんな風なのかというと、ハラハラとしながら様子を伺うか、八神の生足をちらちら見るか、眼を合わせないようにもくもくと栄養の摂取を進めるかのどれかだ。

そしてその中に鍊太郎たちの姿を見つけた。

鍊太郎は『よっ』と手をあげ、本田がふりふりと手を振ってくる。

それに応えるように俺も手をあげてみせた。

「おい、見るよ。 桧流間先輩だ」

「え、どこどこ?」

ふとそんな声が聞こえてきた。

思わず俺はそちらの方へ視線をやる。

すると三人ほどの男子生徒がこちらのテーブルを見て何かを話している。

「桧流間先輩可愛いよなあ。 あんな人に甘えられたいよ」

「いや、俺はあの明るい勢いで桧流間先輩に振り回されたいな」

おおっ? 美姫先輩、意外だが男子に好感触じゃないか。

確かに客観的に見れば誰とでも親しくなる美姫先輩は面倒見が良さそうに見られるのかもしれない。

だが、これだけは言いたい。 振り回されたいって言った奴、一回俺の代わりになれや。 二度と美姫先輩に近づこうと思わなくなるぞ。

「おい……! 八神きづながいるぞ……!」

違う方向からそんな声も聞こえてくる。

そちらへ視線をやると、やはり男子生徒が数人でひそひそと話して八神に見とれているではないか。

「すっげえ美人だな……。噂以上じゃねーかよ」

「だろだろ。でも鉄壁らしいぜ」

相変わらずだな。八神の人氣は不滅か。

八神の耳にもさっきの言葉は聞こえているはずだ。気分を害していないかと彼女を試してみる。

が、八神はもくもくとポテチを齧っていた。

「？ どうひた？」

八神が俺の視線に気づいてポテチを咥えたまま尋ねてくる。

「……………。いや」

八神はポテチの袋を見下ろすと再び俺を見た。

「食べるか？」

「いや…………いい」

「そうか」と自分の食事へ意識を向ける八神。

こいつ、やっぱり聞こえてないな。

つか、カップラーメンにポテチ、ソーダって食べ合わせが混沌としすぎやしないか。

「おいおい。あのテーブル、俵までいるじゃないかよ」

「あの噂の！ 百人フラれ男の俵衛助か！」

俵先輩……。そんな不名誉な通り名があったんスカ……！

と、目ばしい人物を回ってついに俺の話題になっただらしい。

「もう一人の男は？ 誰だよ、あれ」

「さつきからきよろきよろしてんな」

「さあ、見たことないな」

でーすーよーねー

「……………」

まあ、そりゃそうだろう。波科高校では美人でクールと有名な八神、それに負けるとも劣らぬ美しさと可愛さを持ち合わせた美姫先輩、そしてあまりにも目立つ赤髪な上に関西出身の俵先輩。

この顔ぶれは豪華さを通り越して滑稽でしかない。

注目を集めてしまうのは仕方が無いことだろうし、俺が霞んで見えるのも仕方が無いことだ。

このメンバーの中にいることが嬉しいやら哀しいやら。俺は窓から空を見上げて涙を流した。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の21 - 2

「あらやだ。悼矢くん、なに泣いてるのさ」

「いえ、いいんですよ。気にしないで下さい」

「うっん、そうはいかないわ。お姉さんに相談して？　ね？」

「そこまで言うならじゃあ……俺の目の前にかなり面倒な先輩がいるんですけど、どうにかしてくれませんか」

「言われてるわよ、衛助。さっさとどっか行つてよ」

美姫先輩がしつしと俵先輩を手で追い払う仕草をする。

「いや、貴女ですから！」

「ナアーン！？」

美姫先輩はそう言つて口を大きく開けたまま固まってしまった。
どこかのジョーさんみたく真っ白くなつてしまつているが、これは
どうでもいいことである。

「かっかっか。ええ気味や。かっちゃんはお前が悩みの種やて」

「や、できれば俵先輩も」

「ハアーン！？」

美姫先輩と同じように口を開けて固まり、真っ白になる俵先輩。

「阿呆だな」と肘をつき窓の外を眺めながら言う八神。

「悼矢くんがお望みみたいだし、さっさと消えたら？」

「それはお前もやる。さっさと消えたらどうや」

バチバチバチ。

ぶつかる視線の間に紙でも出せば燃え上がりそうな勢いだ。

「バカ派手髪」

「アホ女狐」

「音の出ないスピーカー」

「ブレーキのない三トントラック」

ついには相手に対して訳の分からない文句を言い合い始める。

「おい、片桐。この二人、何があつたんだ」

と耳打ちしてくる八神。

「知るかよ。そもそも俺はお前と美姫先輩が知り合いだってことが不思議でしょうがないってのに」

なので俺もひそひそと静かな声で返す。

「……………想像くらいつくだろう」

「ついてねえから訊いてんだよ」

俺の答えに八神はやれやれと首を振った。

「キヤー、悼矢くんときづなちゃんがひそひそ話してるうー！　ラブ臭！？　ラブ臭がするわ！？」

乙女チックに眼をきらきらと輝かせて俺と八神を見る。

「……………なに勝手に盛り上がってるんですか、美姫先輩」

「いやいや。かつちゃんとかがみんながお似合いのカップルに見えるんは確かやでー」

言われ八神の方に視線をやると、八神はちらりとこちらを見て、すぐに視線を戻し、顔を赤くしながらゲフゲフとわざとらしい咳払いをした。

「くだらんことを言うな。私と片桐はそんな関係じゃない」

「えー？　昨日、悼矢くんの家で夕飯食べたくせに？」と底意地が悪そうににやにやとした顔の美姫先輩。

な・ぜ・知・っ・て・い・る！？

俺と同じく八神もなぜそれをとばりに驚いている。

特にやましいこともしていないし、俺と八神はそんな桃色な関係ではないが、美姫先輩の言い方だとどうしても変な方向性を感じてしまう。こんなことを言われて互いを意識するな、というほうが難しい。

しかも、周りには八神に注目している男子生徒がいるのだ。奴らに聞かれようものなら、ちょっと後で校舎裏こいやイベント確定である。しかも今なら確率変動で大フィーバーだ。

「美姫先輩……！ あ、あんまり大きな声でそういうことを」と俺が『しー！ しー！』と周りを気にしながらボリウムを抑えるとボディランゲージで伝える。

そんな俺を見てニヤリとほくそ笑む美姫先輩。

次の瞬間。

「えええええ！？ 昨日、片桐悼矢くんの家で八神きづなちゃんが夕飯食べたくせにiiiiiiii！？」

余計に声を大きくしゃがる美姫先輩。

つか、説明的すぎるだろ！

『なんだと、オラアツ！？』

がたん！

音をたてて立ち上がる男子陣。

ぎゃあああ！？ こええええ！

いきなり周りの男子生徒から俺に殺気という名の視線が集まった。

このアマ……。人が嫌がることを嬉々と……。

「か、かつちゃんが自分の家に女を連れ込んだやと……？」

し、信じられへん……。あ、明日は雹が降るな……。カキ氷シロップ買つとかな……。」

すみません、俵先輩。今はツツコンでられません。

「な、何を馬鹿な……！ そ、それは片桐が……！」と反論すべく立ち上がる八神さん。

「お、落ち着け八神！ そういう反応をすると余計にからかわれるだけだ！ 美姫先輩は分かってやってるん」

「うるさい！ これが黙っていられるか！」

「ごがあっ！」

頬を殴られ俺は椅子から転げ落ちた。

エーテル・エネルギーでガードする暇もねえ！？

八神さんのお怒りは頂点MAXサイヤ人4並であった。

「ってか美姫先輩、なんでそんなこと知ってるんですか！？」

「こよりから聞いちゃった」

こより様ああああ！？

俺の脳裏に『教えちゃった』と舌をだすこよりの姿が浮かぶ。

OH……マイ・ラブシスター略してラブシス。なんて人にぺっちやくってんだ。そりゃからかう種になるってもんでしょ……。

それでもなくても注目されるメンバーだっていうのに、ぎゃーぎゃー騒ぐから周りの人から余計に注目を受けているじゃないか。

俺には殺気の視線がぐさぐさ刺さってるし。

どうしたもんかため息を吐いた時だった。さらにこの場を混沌とさせるような彼女の声が聞こえてきたのは。

「悼矢さまー！」

こ、この呼び方は……まさか！？

俺が恐る恐る振り返って声のした方を見ると、食堂の出入り口に誰であろうかな弥生さんが手を振っていた。

しかも目立つことこの上ないあの巫女っぽい姿の上に白い割烹着を着ている。足は草鞋ではなく黒塗りの高級感が溢れる婦人下駄だ。

やっぱり京の若妻ルック！？

いつものポニーテールを首元で上に折り曲げ髪留めで止めているのが、すっきりとしたうなじが見え驚異的なまでの破壊力を産み出していた。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の22 - 1

「な、ななな、なんで弥生さんがここに!？」

カラカラと黒い婦人下駄を鳴らして軽やかに駆けてくると弥生さんは手に持っている大風呂敷を俺の目の前に掲げてみせた。

「決まっているではありませんか。お弁当を届けにきたのです。その様子では残念ながら間に合わなかったみたいですが……」

「あらあら! きづなちゃんにライバル現る!？ これはピンチじゃないのお」

美姫先輩がぐふふといやらしく含み笑いして八神の脇を小突く。

「美姫! 私と片桐はそういう仲ではないと言っているだろう……!」

顔を赤くしてパンツと机を叩く。

「おほほほ! 照れなくてもいいのよ、きづなちゃん。初めての時は替えの下着とナプキンを持っていかなきゃダメよ! それとちやんと避妊もしなきゃダメだからね!」

「なっ!？」

顔からボツと蒸気を出して固まる八神。

あ、八神がフリーズった。

だが悪いな、八神。美姫先輩はお前に任せ

と弥生さんへ振り返ろうとすると俵先輩が飛びかかってきた。

「どういうことやねんな、かつちゃん！ 俺たちの童貞同盟はどうなってる！？」

俺の両肩を掴んでがくがくと揺さぶってくる俵先輩。

「『スタンドアップ』！？ なんですかそのドラマみたいな同盟は！ 勝手に加えないで下さいよ！」

「うるさいわ！ うるさいわ、うるさいわ！ かつちゃんだけは味方やと思ってたんや！ 幾らなんでもこれは俺の拳が黙ってへんで！」

顔の前まで右拳を持ってきてぶるぶると震わせる。

「ほう。それは面白いですね」

イライラしていたこともあり俺も少し喧嘩腰になる。

俵先輩は急に拳をぱくぱく動かして裏声をだした。

「オイ、コラア！ チョーシノツテンジャーゾ！」

どげしっ！

俵先輩のボケなど知ったこっちゃない。俺の振り下ろした拳を脳

天に受け、俵先輩はぽてりと床に倒れた。頭から白い煙がしゅーつと出てるがきつとこの人なら大丈夫だ。

そしてやつと俺は弥生さんに向き直る。

「だめですって弥生さん……！　こんなところに来たら……！」

できるだけ人目につかないように弥生さんの身をテーブルの下へ押し込む。既に注目を受けている中ではどう考えても無駄だが、そうせずにはいられなかった。

「あら……なぜです？」と弥生さんはみかん箱に捨てられた子猫のようにテーブルの下から俺を見上げ、寂しそうに問う。

「なぜですじゃなかるーね……！　アンタ自分の格好見てみんとねえ！？」

「かつちゃん。どこの人やねんな」

復活したらしい俵先輩がご丁寧にツツコミを入れていた。

「だから違うと言っているだろう！」

「おほほほ！　じゃあどうしてそんなに必死に否定するのかしらねー！」

「それはお前が勝手なことを……！」

あつちはあつちでヒートアップしているがもはや止めに入る気にもなれない。

と、その時、不意に弥生さんが不穏な台詞を吐いた。

「ちなみにリタさんも来ていますよ」

は？

なんだって？

思わず眼が点になる。

「見学してくるとおっしゃって校舎の方へスキップで行かれましたよ」

にこにこテーブルの下で微笑みを絶えない弥生さん。

なにしくさってんの、あの馬鹿！？

こうしちゃいらねー！ これ以上、騒がしくされてたまるか！
っていうか本音を言ってしまうはこの場にいたくねー！！

「俺ちよつと探してくる！」

と出入り口に向かおうとすると、八神がささつと俺を避けるように道を開けた。

「へ？ な、なんだ八神……」

その訝しげな行動に俺が八神に手を伸ばすと、八神はさらに俺から離れ真剣な顔で言った。

「やめろ、触るな。妊娠する」

「は？」と眼が点になる俺。

『ぶぷー！』

八神の言葉に口を押さえて噴き出す美姫先輩と俵先輩。

「ひーっひっひ！ に、にんしひーっひっひ！」と眼に涙を溜め、腹を抱えて大爆笑している美姫先輩。

「ぎやはははははは！ か、かつちゃん、やがみにきらわれひーっひっひ！」

俵先輩は俵先輩で大爆笑である。

この二人マジでどつきてええええええ！

「妊娠！？ どういうことです、悼矢さ」

妊娠という言葉聞いて立ち上がった弥生さんだった。

がつん！

自分がテーブルの下でしゃがみ込んでいるのを忘れていたのか、頭を盛大にテーブルにぶつけ、再び頭を押さえて無言でしゃがみ込んでしまった。

「ああもう！ 俺は行きますから！ ちゃんと八神の誤解解いてお

いて下さいよ、美姫先輩！」

「はいはい、いつてらっしゃい」

にぱにぱと手の平を開いたり閉じたりして俺を送り出す美姫先輩。

その顔がにやにやと笑っているのは腹が立つが今は構っている場合ではない。

俺が出入り口へ走る最中。道を開けるようにすすすと割れる生徒の波。

『変人さんの仲間へいらっしゃーい』

脳裏でそう言って手を差し伸べる美姫先輩、俵先輩の幻影。

俺は涙をちょちょぎらせながら校舎へと走っていった。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の22 - 2

とことごとこ。

私は観光気分でトウヤの学校を見て回っていた。

なかなか興味深い建物だった。コンクリートと呼ばれる素材で構築されているようだが、アイデア界ではもっと強度のある物質を建物には使用していた。

よくもこんな柔らかい物で学び舎を作ったものだ。私にしてみれば塩の塊で作っているようなものである。いきなり学校が崩れてしまってもおかしくはないだろう。

チラ。チラ。

なんだろう。さつきから視線を感じる。

「すげっ……金髪……」

「ごく……良いスタイルしてんなあ……。足長すぎだろ……」

ふと私は振り返る。

すると、皆ほけーっとこちらを見ていた。

目があつと、慌てたように顔を反らす。

彼らの服装を見、私は自分の服装を見下ろした。

彼らはトウヤと同じような制服を着ている。そして私はノースリーブのパーカーにホットパンツ、黒のニーソックスという出で立ち。

ああ、そっか。制服を着てないから目立つちゃってるのね……。

あとでトウヤに怒られるのは嫌だ。

トウヤが本気で怒ると本当に怖い。こよりからの説教を聴きながらいるせいか、こよりばりの説教を垂れ流してくるのだ。

一ヶ月前はまだ出会ったばかりで互いに遠慮する部分もあったのだが、今ではもうなんら遠慮の無い付き合いになっている。と言うのも一ヶ月前はトウヤが知らないことばかりで、エーテル使いとしてもひよっこだった。私が教えられることも多かったのだが、今のトウヤは私よりも知識を持っている。

河上やきづなから教わっているらしい。時間があればAESSへと出かけているし、毎日のAE修練、体力作りにも余念がない。

エーテル使いとして成長してくれるのは嬉しい事なのだが、私から離れていくようで寂しい気もしていた。

誤解のないように言っておきたいが今の関係が嫌いというわけでは決していない。むしろ良い関係だと思う。私の暇つぶしにもよく付き合ってくれるし……。

そもそもエーテル使いは契約しているエーテルへの絶対的強制力を持っている。トウヤが私の体を自由に操れるということだ。しかし、トウヤは一度たりとも私を強制したことがない。そんなトウヤ

の心使いには感謝しているし、なるだけ迷惑はかけたくないと思う。

私は近場のトイレへ、そして個室へと入る。

そして意識を集中させ、頭の中で今の自分の姿を思い浮かべる。
そして徐々に女子生徒が着ていた制服を自分が着ている自分を想い描いた。

白い上着に黒く短いスカート、そして上履き。

目を開けると、果たして私の身を頭で思い浮かべた通りの制服が包んでいた。エーテル化させたのである。

いつもの戦闘服と違って、多少の時間と集中力はあるがエーテルにとってこれくらい容易なことだ。

ふりっとお尻をつきだし、背中の方へと目をやった。短いスカートがさらりと揺れる。

んむ。完璧。

これでトウヤに怒られることもないだろう。

私は再び、トイレから出て観光を再開した。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の23 - 1

ざわざわ……。

未だにざわついている食堂でものもせず弥生はお茶を飲んで熱い息を吐いていた。

「ほう……。やはり宇治茶に限りますね……」

テーブルの上には茶具が出されていて、急須から白い湯気が出ている。周りから注目を受けていたが彼女たちはまったく気にした様子を見せていなかった。

美姫との戦いに疲れ果てたきづなは中庭へ戦略的撤退をし、この場に姿はない。

「久しぶりやな、和泉。本殿のエーテルが一体何の用や？」

衛助が横目で弥生を見る。その質問に弥生は心なしか心外そうな顔をした。

「あら、嫌ですね。勘違いなさらないで下さい。ただ本殿で育ったというだけであって、私は元より悼矢さまのエーテルです」

彼女の言葉にハルマゲ井をたいらげた美姫が驚いたような顔をする。

「え……。きみってエーテルなの？」

「はい。悼矢さまのエーテルです」とにこやかな笑みで返す弥生。

「A Eがまったく感じられないし黒髪だから人間……っていうか日本人だとばかり……」

「私は幼少の頃からこちら側にしまして、A E消費を0にして活動するよう訓練して参りましたので」

エーテルたちは知らず知らずA Eを使って活動している。それを取りなく温存に近いかたちで減少することは可能だが、それを普段は人間と同じく0消費の状態にしていると弥生は言うのだ。

戦闘になって初めてA Eを消費して活動するということは、A Eを最大容量の状態から活用できるということだ。このアドバンテージは大きい。

「本殿ってあの京本殿でしょ？ 神那ちゃんのところよね。お父さんに連れられて何度か行ったことあるある」

「聖巫女様、元気いっぱいですよ。毎日、退屈そうにしていらっしゃいます。悼矢さまにも近いうちに聖巫女様と面会して戴くつもりです」

「神那もそりゃ退屈やるなあ。あそこ何もないしなー。ど田舎やし」

そんな衛助の知った風な口ぶりに美姫は彼へと視線をやった。

「そういえば衛助も本殿に関わりあるんだっけ」

「うーん、まあなあ。もう関係ないっちゃないんやけど……。追い

出された身やし」

と、どっちつかずな返答をしてうどんをつつく。

「……………俵さん」

「なんやー？　ずるずるー」

「有難うございます」

言われ衛助はごふつと麺を吐きだした。

「な、なんや……………急に」

「貴方が悼矢さまを見守って下さっていたのですね」

彼女の真摯な視線を受けて衛助は口元をぬぐった。

「おいおい、ええ風に考えんといってくれや。わいの立場、分かってんねやろ？　もう本殿とは関係ないんやで？」

「はい、聞き及んでいます。それでもです」

弥生の真剣な顔に衛助は「なんだかなあ」と頭を掻いた。

「ねーねー、弥生さん。こいつって何が目的で悼矢くんに近づいてるの？」

「目的は間違いなく悼矢さまの力でしよう。それで何をするのかは存じ上げません。味方と考えるには難がありますが、敵と考えるに

も……」

困ったような弥生の表情。

「そつやなあー。中立やと思ってくれたらえーで、ちゅーりつ。

俺にも夢の一つや二つはあるってことや」

ずるずるとうどんを口に含む。

「……夢……ね……。あんた、もしちょっとでも不審な素振りを見せてみなさい……。そしたら」

ズズズズ……！

美姫の周りにA Eが揺らめく。

「私も……許しませんよ……」

す、と鋭い眼で衛助を見る弥生。彼女の身体からじんわりとA Eが滲みでる。

そんな二人のプレッシャーを受けながら衛助は平然としていた。

「お前のエーテルは面倒やからなあ。和泉の能力も厄介やし。できれば敵にはしたくないなあ」

両手で碗を取り、ごくごくと汁を飲む衛助。

「フン。二対一でも勝つ気満々のくせに」

ことり、と碗をテーブルに置くと衛助はにやりと口を歪めた。

「……ありゃ……バレてもーたか」

ゴゴゴゴゴゴ……！

衛助からもA Eが放出され、不可視のエネルギーがテーブルの間でぶつかり合う。

ピシッ。

テーブルに置いてあったコップにヒビが入った。

不穏な空気が充満し、視線で互いに腹の底を探りあう。

一触即発。そんな雰囲気の中、彼はへらへらと笑顔を見せた。

「ま、かつちゃんに危害加えるよーなことはせんつもりやから、そんな怖い顔すんなや」

（グリフォルオはどうか知らんけどな……）

心中で黒髪オールバックの禍魂を思い、空を見上げた。そして眼を細める。

空の向こうから何かが迫ってくる感覚。

（こりゃ……。一騒動ありそつやな……）

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の23 - 2

おかしい。

チラッ。チラッ。

じー。

辺りから感じられる視線。

ちゃんと制服に着替えたのに……。

どこか違うのかと自分の姿と女子生徒を見比べてみる。しかし、同じだ。なんら変わるところはない。

そこで私はあることに気づいた。

気づいてしまった。

そうだったのね！？ 私があまりにも美人すぎるから注目されているのね！？

自分の美貌を恨む瞬間だった。

しかし、悪い気はしない。

「ふふん」

心なしか足取りも軽くなる。

だが、その時だった。

いきなり体を舐めつけるような不気味な気味の悪い視線を感じる。

背筋にぞくりと悪寒が走った。

思わず振り返る。

踊り場から階段へと誰かが動いた影が見えた。

……金髪？

金色の髪の男子生徒だったようだが……。

……気のせい？

後ろを気にしていると、

「あの……」

いきなり前から男子生徒に声をかけられた。

顔を戻すとそこにはウルフヘアーの男子生徒が立っていた。

傍には二人の女子生徒もいて「もうっ、やめときなっ」とか言うてる。

「わ、私？」と私は自分の顔をさした。

「そうそう」

どうやらやはり私らしい。

「あー、怪しい者じゃなくて……。ちょっと情報収集……。あ、いやお話をつてね。留学生か何かかな？」

「充分怪しいと思うわよ」

眼鏡をかけた女子生徒が言った。非常に同意したい。

「うん、そう」

私は迷いもなく、きっぱりと答えた。

「今年から留学生がきてるって噂を聞いてたけど本当だったんだ」

なにかの映画で見たような髪型の女子生徒がほわーっと私を眺めて言う。

「何組なんですか？」と再び男の質問。

困った。

「二年三組……かな？」

適当にトウヤのクラスを言っておくことにした。

「へ……？ それって俺たちのクラスだけ……」

二人の女子生徒も私のことをぽかーんと見ている。

「……………。あー、えーっと、勘違いしちゃったかな。二年三組は……親戚、そう親戚のクラスだったかな……？」

「親戚って？」と映画に出演していた子が今度は質問してくる。

どうしよう。

……………ま、いいや。

「えーっと、片桐トウヤっていつて」

「は？ 悼矢の？ マジで？ 悼矢から親戚が高校にいるなんて何も聞いてないけどなあ」

「片桐くんって意外に秘密主義だからねー」と苦笑いをしている眼鏡の女の子。

「ああ。言い忘れてた。俺は七橋鍊太郎。悼矢の友達なんだよ」

「私は本田睦月。よろしくね」

「古河来留季よ」

げっ！ この人たち、トウヤの友達！？ レンタローってトウヤから話で聞いたことあるような気がするわ！

「わ、私はリタ。リタ＝ルクライル」と握手を交わす。

「参ったなあ。俺がまさかこんな美人を見逃しているとは……波科高校三大美女に変動が起こるかもしれない……」

ふうむ、と悩んでいるレンタロー。

や、やばい……。これは後でトウヤに怒られる……！

脳裏にガオーと怪獣のように火を噴くトウヤの姿がよぎった。

だああつと背中に脂汗が吹きでる。

私は早々に話を切り上げることにした。

「え、えつと……私、やらなくちゃいけないことがあるから……」

「ええー、そう言っなよ」

「もっつ、リタさん困ってるでしょー」

「ははは……。ごめんね……」

と歩き出そうとしたまさにその時だった。

ぐいつと誰かが私の首根っこを掴み、ぐつと首が絞まる。

「ぐえっ」

振り返るとそこには私のご主人様のご立腹な顔で私を見下ろしていた。

「何しとんじや、お前は！」

ひーん！ 時すでにおそしー！

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の24 - 1

「何しとんじゃ、お前は！」

俺はリタの首根っこを掴んだ。

怒りを込めてリタを見ると、リタは俺の顔をみてがくがくと震えだす。

そこで気づいた。リタの格好が波科高校の制服なのだ。

「なんだこの格好は！？」

「えっと、あ、えと、これは、その……」

「ああん！？ きこえねーぞ！ お前、自分が何やってるか分かってんのか！？」

俺は口から火を噴かんばかりに怒鳴り散らす。

びくびくっ。

リタが米粒みたいな目をして、口を にし、だああと涙を流す。『ごめんなさいごめんなさい』と小さく何度も呟いていた。

「こら、片桐くんっ！ 女の子イジめちゃだめでしょ！」

そこで俺は気づいた。

なんとリタの目の前には見知った顔三つ。

鍊太郎、本田、古河来が立っているのだ。

「あれ……お前ら、なんで……」

リタと本田たちを交互に見やる。

「親戚で留学生なんだって？　なんで教えてくれなかったの？」

本田の摩訶不思議な言葉。

ついにそこまでボケたか、本田。

そう思ってから俺はピンときた。

リ、リタのやつ……嘘八百を……！

思わずリタの首を掴んでいる手に、きゅつと力が入る。

「ごめんなさいっごめんなさいっごめんなさいっ……！」

拝むように手を合わせているリタ。

まったく、こいつは……。

やれやれと俺はため息を吐いてリタの首根っこから手を離す。すると安心したのかリタはほっと胸を撫で下ろしていた。

「まさか隣クラスに転校してきた留学生が悼矢の知り合いだとはな」

「は？ 留学生？」

俺は眼を点にする。留学生がきているなんて話を初めて耳にした。

「知らないのか？ うちのクラスの隣に転校してきた留学生」

「いや、違っただ、鍊太郎。こいつはその留学生とは別物だ」

「あれ？ 違っただ？」と古河来。

「ああ。ちょっとこいつ、うちの家庭と訳ありでな。一応、親戚つかたちにはなってるんだが、本当は俺の親父の妹の向かいに住んでるおばさんがよく行ってた酒屋さんにいる叔母さんに似ている宅配屋さんが病気で入院してる病院がリフォーム中なんだよ。ところが、この酒屋さんに住んでいるお兄さんと俺の妹が結婚した旦那さんが産んだ子供の孫と親父の妹の向かいに住んでるおばさんの隣の家に住んでるお姉さんがはとこでな。今、地球温暖化が危ぶまれているんだよ。」

このままだと地球がまずいだろ？」

「え、あ、えつと、まずいのかな？」

「ん、あー、温暖化はまずいよな？」

くるくると目を回している本田と鍊太郎。

明らかに混乱していた。

「まずいんだよ！　もしかしたら、お前たちにバレたことでまた地球温暖化に拍車がかかってしまうかもしれない！」

「なんだかよく分からない複雑な関係だけど、大変なんだね、リタちゃん……！」

「なんだかよく分からない複雑な関係だが、大変なんだな、リタさん……！」

目を回しながらそう言う二人。

馬鹿なやつらで良かった。

「いや、ツツコミどころありまくりでしょ」と古河来が一人だけ納得していなかったが。

「とにかく俺たちは温暖化から逃げるから、あとよろしくな」

「ああ！　任せろ！　冷房をつけて地球を冷やせばいいんだな！」

「任せといてよ、片桐くん！　地球を守ろうよ！」

目を回したまま意気込む二人。

今、セーブアースの旗を掲げる二人の戦士が立ち上がったためたしめでたし。

「温暖化よりも二人の将来が本気で心配になってきたわ……」と額に手をあてる古河来。

そんな二人を置いて俺はリタの手を引いて走りだした。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の24 - 2

しばらくして俺たちは中庭にいた。

俺は腕を組み、無言でリタを見下ろしていた。

リタはつーんとした感じで、横を向いて立っている。私悪くないもん、という雰囲気だが、その頬には脂汗が浮かんでいた。しかも、ちらつと目線だけで俺の顔色を伺っては再び視線を横に戻す。

何してるんだろう、とクスクス笑いながら女子生徒の集団が通ったが気になどしない。

彼女らが離れていって若干の沈黙の後、俺は言葉を口にした。

「なんでお前、学校に来たんだよ。色々ややこしくなるのは分かってるだろ」

「わ、分かってるわよ……それくらい。でも」

言葉を濁す。

「でも？」と俺が促すとリタは視線を反らしたまま口を尖らせた。

「だって、弥生がトウヤのガッコーに行くって言うから……」

……。そういうことか。

つまりまた『あんたが行くなら私も行くわよ！』って対抗心を燃や

して弥生さんについてきたわけか。で、来たはいいが俺に会うことよりも校舎に興味を惹かれてふらふらと見学してた、と。

なんとも単純な思考だった。

俺は『はあ』とため息を吐いて、腕組みをやめた。

「いいわよ、反省してるわよ！ 言いなさいよ！ 言いたいことがあるなら言いなさいよ！ 罵詈雑言だろうが誹謗中傷だろうが受け止めてやるわよ！ えーえー、私が悪かったわよ！ 全部私が悪いのよ！ 地球温暖化だって私が原因よ！ 冷房をつければいいんですよ！？」

なにムキになってるんだ、こいつは。つか、お前が原因だとしたらどんな肺活量で二酸化炭素排出してるんだ。そして冷房はつけるな。

「悪いと思ってるならそれでいい。これ以上俺から言うことはねーよ」

説教されると思っていたらしく、リタは少し肩すかしにあったような顔をした。

「……怒ってないの？」

「怒ってる」

「うぐっ」

にべもなくそう言ってやるとリタは少し身を引いていた。

俺は中庭に置いてあるベンチに座る。

「ほら、座れよ」

言われ、リタも素直にベンチに座った。反省していると言った手前、意地を張る気にもならなかったらしい。しかし、彼女なりの精一杯の反抗なのか、リタはベンチの端に座っていた。俺を避けるかのように。

「何もそんな遠くに座らなくてもいいじゃねーか！」

客観的に見ても不自然としか言いようがなかった。

「ふん」

両手を膝の上に乗せたままぶいっとあらぬ方向を向く。

「おい、リタってば」

「……………」

無視。

つーん。

俺は立ち上がると、自販機を指差した。

「何か飲むか？」

「午後ティー」

……ちゃんとそういうことには答えんのね……。

中庭に設置してある自動販売機に小銭を投入して飲み物を選ぶ。片手で二本の缶を取り出し、一本をリタに放った。

ちなみに、午後の紅茶のレモンティーである。リタはミルクティよりもレモンティーが好みなのだ。

俺は再びベンチに座る。だが先ほどのように間隔を開けてではない。

リタの真横に座ったのだ。

「ちょ、ちょっと……！ 近いわよ……！ もっと離れてよ！」

慌てたように顔を赤くして俺の肩を押してくる。

「あのなあ。付き合いたてのカップルじゃねーんだぞ……」

「だ、だって……！」とキョロキョロ周りを伺っている。

周りにはちらほら中庭で昼食をとっている生徒たちがいるが、俺たちを気にしている人などいない。リタを眺めている男子生徒はいるが、姿形だけならばリタは言う事なしの美人なので思わず見とれてしまうのも仕方ないだろう。俺だってこんな奴を街で見かけたらそりゃ目線もいくつてもんだ。

それに、リタを見ている彼らにはきつと俺という存在は映っていない

いだろう。

「家じゃ破廉恥な格好でうろつろしてる時もあるだろーが。何を今さら恥ずかしがってんだか……」

「それとこれとは話が別なのよ!」

「堂々としてりゃーいいんだよ。キョロキョロしていると不審に思われるぞ。それでなくてもお前は金髪だから目立つってのに」

「……もういいわよ」

リタがプルトップをカチャと開ける。

こくこくとレモンティーが喉を嚥下する音が隣から聞こえてくる。

俺もエメラルドでマウンテンなコーヒーの飲み口を開け、口をつけた。

くるっぽー、くるっぽー。

エサをくれるとでも思っているのか、ハトが俺たちに近づいては離れ、近づいて離れを繰り返している。

ハトに気づいたリタがごそごそとポケットから何かを取り出した。クッキーだった。しかもどう見てもこよりが作ったらしき手作りの感のあるクッキー。それをパキと折るとハトへと放る。

「お前……持ち歩いてんのか」

「こよりのクッキーは一枚でー メートル走れるわ」

「キャラメル代表作であるところのグリコを超えた!？」

「きつとこのハトは今日、大気圏を突破して宇宙へと飛び出すわよ」

「お前、某エネルギードリンクのCM見すぎだぞ」

強いてはテレビの見すぎだ。

「ねえ」

「あん？」

「ハトが豆鉄砲食らったような顔をする、ってあるじゃない？」

「あー、コトワザの。いや、慣用句か。」

確かびつくりする、とかいう意味だよな」

「あれってさ。人間が食らったらどんな顔するのかな」

クッキーの破片を持ったまま俺の顔を見ているリタ。

俺は彼女の手から視線をあげて彼女の顔を見た。

リタの眼は好奇心という名の輝きを放っていた。こんなところで無駄な知識欲を出さないでもらいたい。

「やめてください」

「ちえー」とどこかつまんなさそうに言う。

持っていた破片は結局、ハトの腹に収まることとなった。

「こうして二人でのんびりするの久しぶりね」

唐突にリタがそんなことを言った。

Dance 1” 集うエーテル使い” 其の25 - 1

「トウヤは学校で毎日忙しいし、休日はAESSにでかけたり、禍魂討伐に参加したり、賞金首探したり……」

「最近は色々と忙しくなっちゃったよ。暇で暇でしょーがなかった頃が嘘みたいだ。お前に会おう前と比べたらすっかり環境がガラリと変わっちゃってるし」

かたや普通の学生生活。かたや化け物相手に戦う日々。これで生活リズムを変えるなど言う方がどうかしている。本格的に鍛えるようになってからだいぶ体つきも変わってきてる事も自分で分かっていた。

「私と会おう前はどんなだったのさ」

そんなリタの質問。

俺は彼女の問いに空を見上げた。

「そうさなー。鍊太郎とふらふらしてるか、家に帰ってごろごろしてるか、つてところだな……」

「あんた……私にだらだらするなとか言う割に自分だってそうだったんじゃないのよ」

じとりと横から睨まれ、俺は少し彼女の目線から顔を反らす。

「……………」

確かに……。このままこの話を続けるとリタに注意しても『あんたが言うな!』と反発される確率を高めるだけのようなので俺は話を変えることにした。

「変わったといえはお前もだいぶ砕けてきたよな。最初は気を張ってたっていうか……。必死だったっていうか……。かなり張り詰めてたじゃねーか」

「だってあの時はこの世界で何が起こってるのかも分からなかったから仕方ないじゃない。今より禍魂やエーテル使いが活発に動いていたし」

バリツとクッキーを両手で持って齧る。リタの性格からしてもつとガツガツとがさつに食べるのを想像してしまうのだが、割と食事に関しては丁寧に食べる奴なのだ。どうやら親のしつけはかなり厳しかったらしい。

両手でクッキーを持ってはむはむと口をつけている様はどこかリスみたく見える。

相変わらずつまそうに食う奴だな……。

「この世界に慣れてきたってことか」

俺の視線を感じたのかリタが俺の方を見た。

「トウヤも食べなさいよ。私一人で食べてると意地汚い女の子だと思われるわ」

と新しいクッキーを俺に渡してくる。

「正直有難い。昼飯の途中にお前が来てるって聞いて飛びだしてきたからな」

クッキーを齧ると、バターの風味と塩味が口の中で広がった。確かに――メートル走れそうなくらいうまい……。料理作りは得意でもお菓子作りはあまりしなかったこよりだが、またスキルを上げたい。リタのようにおいしいと言って食べてくれる人がいると作りがいがあるのかもしれない。

俺がもくもくとクッキーを食べていると、

「もう。食べるの下手くそね。ポロポロ零してるじゃない」

「んお？」

リタがぱんぱんと俺の膝に落ちたクッキーの破片を払った。

「あーもう。口の周りにもついてるし。しっかりしなさいよ」

と、俺の口へと手を伸ばして破片をとる。

「お、おい……！」

そのまるで親密であるかのような対応に俺は顔が熱くなってしまった。

「へ……？ あ……」

リタはリタで自分のした恥ずかしい行動に気づいたのか破片をとったまま、顔を赤くして固まっている。

「な、なに顔赤くしてんのよ!」

「お、お前がいきなり変なことするからだろ!」

「親切でやってあげたんじゃないのよ!」

お互い茹蛸のように顔を赤くしてぎゃーぎゃーと喚く。

「こんな恋愛漫画みたいなことされたら誰でも顔を赤くするっての!」

「れ、恋愛い!? あんた私をそんな風に見てるわけ!? エーテルをなんだと思ってるのよ!」

「みてねえーって! 誰がお前みたいな猪突猛進な女を恋人にしたがるんだよ!」

「なんですってー!? 私が恋人じゃ不満なわけ!? えー、えー、いいわよ、分かったわよ! 一生、弥生とくんずぼぐれつイチャイチャしてなさいよ!」

「何もそこまで言っていないだろ!」

「なにさなにさ! いつもデレデレしちゃって! そんなに大きなおっぱいがいいわけ!？」

「デレデレなんてしてねー! 確かにふくよかな胸は魅力的……っ

てそうじゃなくて……!!」

「~~~~っ! バカ! 変態! とへんぼく!!」

ぽかぽかぽかっ!

リタが両の拳で俺の頭を叩いてくる。

「いて! やめろ! この馬鹿力女!」

ぎゃーぎゃー!

「はあはあ……」

「ハアハア……」

「っ、疲れた……」

「同じく……」

「はあ……」

深いため息を吐くリタ。

「どうして私たちってすぐ喧嘩になるかなあ」

ぽつりと呟くように言っけリタはちよいと小石を蹴飛ばした。

「お前、実は俺のことが嫌いなんじゃないのか」

「嫌いならそもそも契約なんてしないわよ」

言ってからリタはバツとこちらに向き直る。

「だ、だからって好きとかそーゆーのじゃないんだからっ！ か、勘違いしないでよね!？」

顔を赤くしてリタは慌てたように付け足した。

「何も言ってねえって」

「そ、それならいいのよ……別に……」

静かな沈黙が降りる。

「うふふ」

「あはは」

どこからか楽しそうな声が聞こえてくる。視線で探すと中庭の芝生に二人の男女が座って談笑していた。

幸せそうに笑いあっている。

平和を感じた。彼らは禍魂なんて化け物がこの世界にいる事を知らない。そして、俺たちは彼らを感じているような平穏を守るために戦っている……と言えば少し大袈裟、か……。

だが悪くない。

彼らのような人間の平穩を守るといふ役割も悪くないと思う。

「もう。あんまりジロジロ見ちゃ失礼だって……」

「あ、ああ……」

窘められ、俺は慌てて彼らから視線を外した。だが失礼だと言ったリタ本人も芝生の二人から目線が離れていない。

「ねえ……トウヤ……」

「あん？」

「私が人間に生まれてたらどうだったのかなー……」

「は？」

いきなり何を言いだすんだ、こいつは。

「こんな風に制服着て学校通ってさ……。トウヤと知り合ってたなら、どんな風になってたのかなって……」

そりゃまた面白い想定が出たもんだ。

「……まあ、まず喧嘩してるだろうな」

俺の返答にリタは笑った。

「あはは、言ってる。それで、もう二度と顔もみない、喋らない、とか？」

「そこまではいかなくとも、今みたく一つ屋根の下って感じにはな
ってないんじゃないか」

「……じゃあ今のままでいいや」

「あん？　なんだって？」

リタがいきなり小声になったもんだから聞き取れなかった。

「なーんでもないわよー」

言って『うーん』とのびをする。

「トウヤ」

「んー？」

「弥生と、契約する気？」

「あー……」

俺は頬をぽりぽりと掻いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9484j/>

Dance of Aether's! ~ 激情のメリーゴーラウンド ~

2011年12月27日21時50分発行